

500  
26

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 <sup>19</sup>/<sub>m</sub> 1 2 3 4 5

始



坪内逍遙  
渥美清太郎 共編

歌舞伎脚本傑作集

第十一卷

北卷 3  
12. 1. 93

内交

玉藻前御園公服  
御園入曾我中村



桑三郎

上  
國  
夏  
事

07



小村の輕比奈  
中村傳九郎

小塚宗玄白井権八  
尾上宗五郎

多景芳八重珍  
岩井  
兼三郎

上原喜作  
國貞

07



文學博士

坪内逍遙  
渥美清太郎

共編

第十一卷

# 歌舞伎脚本傑作集

東京春陽堂發行

目次

「玉藻前御園公服」題解……………一頁一六九頁  
同本文……………  
「御國入曾我中村」解題……………  
同本文……………一七二頁五八七頁

插繪目次

『御國入曾我中村錦繪』(色刷り木版。五渡亭國貞畫)……………卷頭  
 玉藻前錦繪(コロタイプ版。初世歌川豊國畫)……………三三頁の前  
 『玉藻前御園公服』錦繪(コロタイプ版。歌川國芳畫)……………八二頁の前  
 同錦繪(コロタイプ版。五渡亭國貞畫)……………八九頁の前  
 『御國入曾我中村』番附表紙……………一七三頁の前  
 同三立目……………二〇九頁の前  
 同引返し……………二五七頁の前  
 同四立目……………二七三頁の前  
 同淨瑠璃……………三二三頁の前  
 同對面場……………三九頁の前  
 同二番目淨瑠璃……………三五三頁の前  
 同序幕……………三九九頁の前  
 同中幕……………四六五頁の前  
 同引返し……………四九九頁の前

たまものまへくまゐのはれぎぬ  
**玉藻前御園公服**

『玉藻前御園公服』は、四世鶴屋南北が六十七歳の夏の作で、文政四年七月、木挽町の河原崎座へ上場された、所謂夏狂言のケレン物であります。其年、同座は三世尾上菊五郎の獨り舞臺で、春以來、南北が種々考案を立て、存分に菊五郎を働かして來ましたが、夏狂言はケレン物で當てようといふので、宙乗り、本水の使用、早變り、等の關係から、九尾の妖狐の傳説へ、三十三間堂の「祇園女御九重錦」を混じて作つたのが此狂言であります。内容は元より薄いものですが、菊五郎の特殊な技巧を活用した舞臺効果は著しいものがあつたので、江戸の民衆の嗜好に投じて、非常な大入を續け、以來尾上家の藝となつたのであります。

この二番目は、新作の玉屋新兵衛の狂言でした。夏狂言の世話物として、南北式の軽い味に捨て難い興味もありましたが、頁の部合と、一つには「玉藻前」と表面關係は無いので本集には載せませんでした。たゞ、大詰の祈りから、白狐の宙乗りが濟むと、舞臺はすぐに向島の道行き場になる。正面に三圍稻荷の碑を置いて、これを殺生石と見立て、その前に小女郎と新兵衛とが裏向きに番傘をさして立つてゐる、この傘に三浦屋、上總屋と書いてあるので、三浦之助上總之助と那須野ヶ原を暗示させるといふ、南北らしい技巧を見せたのが、大評判でしたが、關係は單にこれだけの事なのです。



一冊で一寸年表を拵へて見ませう。

年	月	座名	名	題	玉藻前	平太郎	鳥	羽	那須八郎	藻	女	お	柳又五郎	泰	親
文政四、七		河原崎座	玉藻前御園公服	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	關三十郎	關三十郎	關三十郎	中村大吉	市川門之助	嵐冠十郎	津打門三郎		
天保四、五		河原崎座	玉藻前御園公服	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川海老蔵	市川鯉三郎	山下金作	尾上榮三郎	市川鯉三郎	市川鯉三郎	成田屋宗兵衛			
弘化元、九		中村座	玉藻前御園公服	尾上菊五郎	市川團十郎	市川團十郎	市川九藏	岩井杜若	岩井榮三郎	松本幸四郎	市川幸四郎	市川九藏			
元治元、十		守田座	三國妖狐傳	中村芝翫	中村芝翫	坂東龜藏	中村福助	岩井榮三郎	尾上榮三郎	市川市藏	坂東龜藏				

本巻へ録するに際し、底本としては、帝國圖書館所藏の十五冊物寫本を使ひ、参考として、早稲田大學附屬圖書館所藏の三冊物寫本を用ひました。

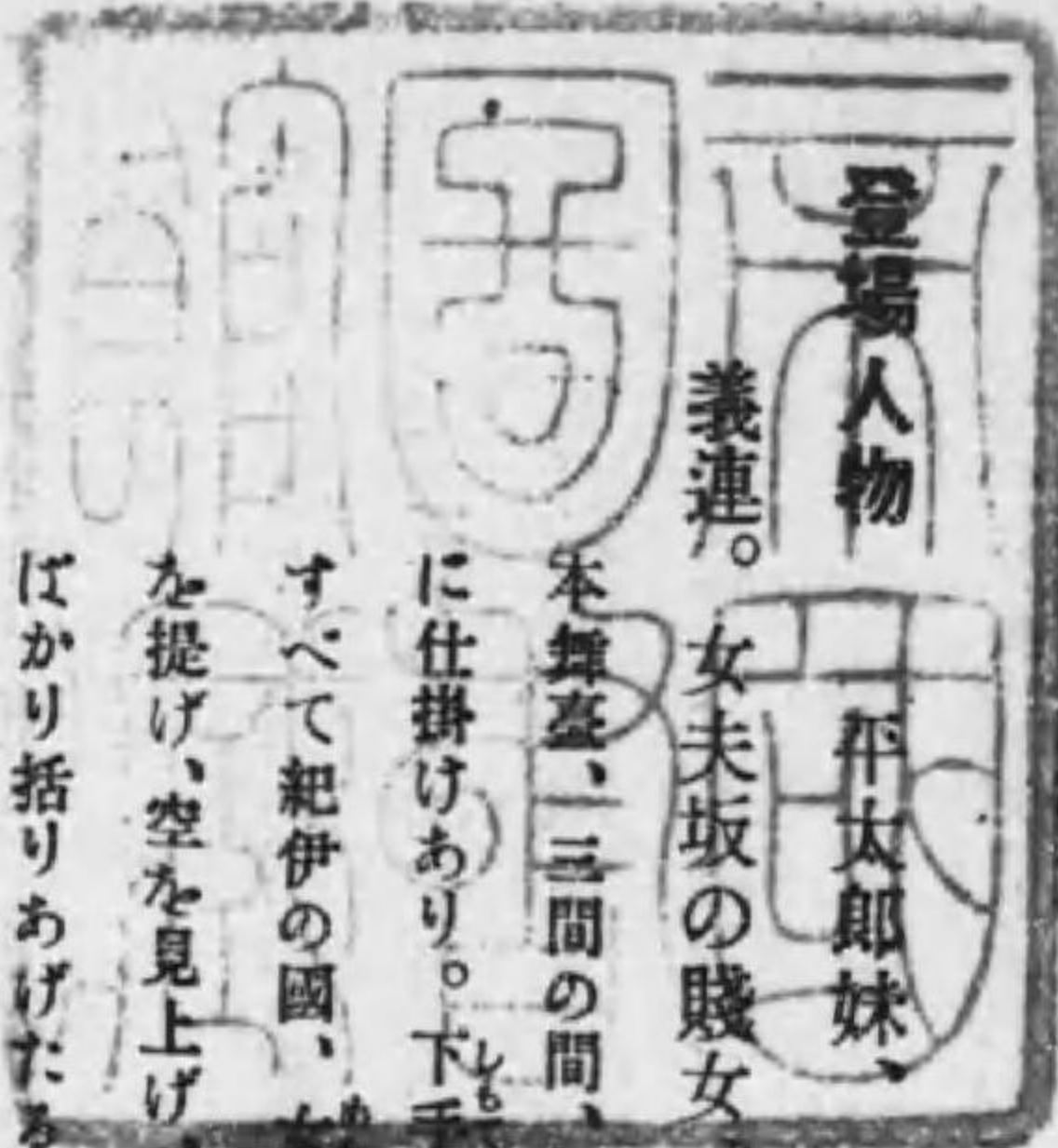
挿入してあるコロタイプ版は、いづれも二度目の、天保五年上場の錦繪であります。たゞ「松助と源之助」が出てゐる錦繪は、此狂言の書きおろしよりも以前の、文化年度の、全く變つた脚本の物なのですが、扮装其他に就て御参考にもと思つて、収録したのであります。

渥美清太郎識

玉藻前御園公服

三建目

紀州女夫坂の場



登場人物 平太郎妹、お柳。お柳妹、お露。磯上飛忠太持國。八郎一子、綠丸。鹿島三郎義連。女夫坂の賤女、お市。木樵、岩淵の和田四郎。進の藏人春俊。那須ノ八郎宗重。

本舞臺、三間の間、向う一面の淺黄幕、よき處に眺への柳の大樹、日覆ひ一ぱいに同じく吊り枝、此枝に仕掛けあり。下手草井戸、釣瓶をおろし、下座の口山路の模様。舞臺前、岩組み、谷底の體よろしく、すべて紀伊の國、女夫坂のかゝり。ここに絆纏、股引きの侍ひ二人、餌差し竿を持ち、腰に鞆箱、火打ち袋を提げ、空を見上げ、わやく言つてゐる。これを磯上飛仲太、烏帽子、小手、腰當て、武者草鞋、素袍の下ばかり括りあげたる形にて、床凡にかゝり、鳥さしに下知してゐる見得。こだま、トヒヨ、山嵐しにて、幕あく。

飛仲 ソリヤ、そこだく。  
侍甲 イヤ、こつちへ來たく。  
侍乙 ソレ、そこだ。

二人 ソリヤ、来た〜。

ト皆々空を見て、鳥をあちこちと追ひあるき、竿にて荒さうとする思ひ入れ。

飛仲 ヤア〜、異形の鳥が、虚空はるかに向うの方へ。

二人 鳥の行くへを、いづくまでも。(ト駆け出さうとする)

飛仲 アイヤ、各々、まづ休息致されよ。今に、又ぞろ爰へ飛び来らん。まづ〜。

二人 ハツ。(ト控へる)。

飛仲 此程より、和朝に見馴れぬ怪しき鳥、此紀伊路を飛行なすゆゑ、進の藏人、鹿島の三郎、此飛仲太は怪しき鳥を狩りにとばかりにはあらず、實は、鳥羽の大臣、遁世せられ、諸寺諸山の靈場、願拜の御立願にて、大館をお出ましありてお行くへ知れず。然るところ此紀伊の國は、根來、高野、加太、熊野を初めとして、靈社、靈場、數ある國なれば、大方は此國へお出でと、田熊法眼どの、差圖によつて、怪鳥狩りを幸ひ、大臣を尋ね参らせ、再び御歸館あるやうにとの心配。御自分かたも随分ともに、心を附け、鳥を捕へるばかりでなく、君のお行くへ、尋ねてよからう。

侍甲 委細長りました。併しながら、下々のわれ〜、尊顔を拜し奉りし事もなければ、此儀に當惑。

飛仲 そりや其筈の事。御顔の様子は、身共が詳しく話し申す。

二人 それは有り難う存じまする。

ト此うち又山嵐し、トヒヨになり、日覆ひへ跳への異形の鳥二羽、舞ひ下がる。皆々見て  
飛仲 アレ〜、又ぞろ、怪しき鳥。油断めさるな。  
二人 心得ました。

ト又鳥をささうとする。これより、こたまの入りし合ひ方になり、向うより進の藏人、鹿島の三郎、いづれも侍ひ鳥帽子、小手腰當て、武者草鞋、素袍の下ばかり括りたる袴へ、腰に、教中を差し、鷹を据ゑ、半纏、股引きの侍ひ兩人附き添ひ、つか〜と出て来り、花道よき處に留まり

藏人 三郎どの。御覽の如く、怪しき雌雄のあの鳥に、鷹を合せんと存ぜし所、鳥とは申しながら、空にかける事自在をなす稀代の鳥。

三郎 あれに飛仲太どのもお出で。一手になつて手柄をなさん。サ、お越しなされい。

藏人 然らば、お先きへ。

ト矢張り右の鳴り物にて、此人數、本舞臺へくる。

飛仲 これは御兩所。御苦勞に存じました。

ト此時、鳥は虚空へ飛び去る。三郎これを見て

三郎 ヤア、怪鳥は又々、山深く

藏人 これより山中はわれらが係り。

飛仲 いかにも。お手柄お待ち申す。  
藏人 御兩所には、暫く御休息。  
三郎 藏人どの。  
藏人 後刻、閑談。

ト唄になり、藏人麿を据ゑ、侍ひ一人附いて下座へ入ると、すぐに在郷唄になり、向うよりお露、振り袖衣裳、在所娘の拵らへ。お磯、同じく在所女の拵へにて、兩人とも薪を脊負ひ、草鞋がけにて出てくる。餘程後より、和田四郎、やつし衣裳、輕袷をばき、草鞋がけにて、煙草をのみながら出て來り

和田 オ、イ／＼。そこへ行くのはお露ぢやアねえか。いゝ事を教へてやらう。

ト早足に來り、お露に載れる。

つゆ エ、わるい事を。

トいひながら本舞臺へ逃げてくる。和田四郎追ひ廻す。お磯留めながら、皆々本舞臺へくる。此時、三郎、和田四郎を見て

三郎 ヤア、其方は柚の和田四郎ではないか。

和田 これは三郎様。飛仲太様。

三郎 ハテ、よい處で逢つた。……かねて其方に申し附ける川事あつて、わざ／＼も尋ねるところであ

つた。

和田 それは幸ひな處でお目にかゝりました。シテ、其御用とおつしやるは。

三郎 サア、外の義でもない、

ト言はうとするを

飛仲 ア、コレ、鹿島氏。こゝは途中。殊に、あたりにも

トお露、お磯へ思ひ入れ。三郎呑みこみ

三郎 イカサマ、さう早急に話も出來ねば

和田 左様なら、アレ、あれにござる森の中には、鎮守の社もあれば

飛仲 成る程、こりやアいゝ思ひ付き。其社殿にて、何かの密談。

三郎 然らば案内致せ。

ト山風しになり、三人へ侍ひ附いて下座へ入る。お露、お磯残り

つゆ お磯さん。わたしや和田四郎さんに逢うて、どうせうと思つたわいなア。

いそ さいなア。よい處にお侍ひ様がござんして、和田四郎づらを連れて行つて、此やうな嬉しい事は

ないわいなア。

つゆ 斯ういふ間に山へ行て、もう一荷、脊負うて來ようぢやないかいなア。

いそ ほんにさうせうわいなア。(ト立ち上り、向うを見て)アレ、あそこへござんすのは、平太郎さんの妹の、お柳さんぢやないかいなア。

つゆ ドレ。ほんに、姉さんぢやわいなア。

いそ オ、イ〜。お柳さん〜。

二人 オ、イ〜。

ト向う揚げ幕の中にて

りう お磯さんも、お露さんも、待ちなさんせいなア。

ト誂への在郷唄になり、向うよりお柳、在所娘の拵へ、柴を背負ひ、緑丸、小さき熊手を持ち、片手に持運びを持ち、お柳に手を曳かれて出て来り、すぐに本舞臺へ来り

お磯さん、お前はよう精出しなさんすなア。

いそ なんのいなア。精を出すのはお前の事。兄御平太郎さんといひ、妹御の此お露さん。其上、此頃は御浪人のお客さんはござんす。其かんかくから飯炊いたり、其隙には山稼ぎ。ほんに見上げた事ぢやわいなア。

りう なんのいなア。兄さんに女房さんが無ければ、みんなわたしが仕打ちぢやわいなア。

いそ いつぞやは聞かうと思ひましたが、やもめ暮らしのお前の内に、久しくゐさんす其お子は、平太

( 6 )

郎さんのお子でござんすか。どなたのお子でござんすえ。

りう ハイ。此子は兄さんの子ではござんせん。

いそ そんならお内方にござんす、御浪人とお前の仲に出来たを、世間を憚り、わざとお主あしらひをといふやうな事でござんせう。ナア、お柳さん。

りう イ、エイナア。どうして其のやうな事があつて、よいものでござんせう。あの御浪人様はお主筋。とよさんは侍ひの時、下野の領主、那須の八郎様に勤めた、横曾根平内というた者。さすればまさしう、兄弟三人の爲めにもお主様。又關東にてそれなりに、お行くへ知れざる藻女様。此頃噂に聞けば、神誘ひにお逢ひなされたといふ事でござんす。

つゆ モシ、姉さん。つひに女子の神誘ひに逢うた話しは、聞きませんわいなア。

いそ イエ〜、其やうに、片圖に物をいはぬものでござんすぞえ。今時は天狗様も、女子の方が好きかかも知れぬわいなア。アハ、ハ、ハ、ハ。

りう 神隠しにならしやんした、藻女様は仕方もないが、どうぞして御鏡を尋ね出して、八郎様を元のお大名にせにやならぬというて、兄さんともく〜に、詮議してござんす。

つゆ 昔は大勢の御家來を、お持ちなされたお方が、今ではわたしたち兄弟三人を便りに、ほんにいとしいと言はうか。まだしも此お子が姉さんに、よう馴染んでぢやによつて、八郎様も、兄さんも、

( 7 )

喜んでござんす。

いそ さういふ事なら、いつそ其御浪人様とお柳さんと、夫婦にならしやんすればよい。

りう ア、勿體ない。假りにもお主様に、そんなみだらな事がならうかいなア。もうく、座興にも、其やうな事、言うて下さんすな。

ト此時、下座より鹿島三郎、以前の形にて出て来り、あちこちを見て

三郎 若大臣様よりお預りの、鷹を怪鳥に合はせしところ、こちらの方へ追ひ来りしと思つたが、どつちへ逸れたかしらん。

ト獨り言をいひながら、お柳を見附けて

ヤ、そちは百姓平太郎の妹。

りう あなたはいつぞや私し方へ、お出でなされたお侍様。

三郎 オ、サ。其方に用事あつて、是非に逢はねばならぬところであつた。

りう いやしい賤の私しに、お歴々のあなた様が、どのやうな御用がござりまして。

三郎 其用事といふは、鷲塚金藤次様が其方に惚れて

いそ エ、。すりやアノ、お柳さんに  
トこれにて三郎心付き

三郎 ヤイく、下司女めが。最前といひ、今といひ、身共が話しの邪魔ひろぐ女郎め。わいらは爰に用事は無い。きりくくと立歸れ。

りう イエく、あの衆たちはわたしと一しよに、山稼ぎに行くのでござんす。サア、お磯さん。

ト立ちかゝるを抑へて

三郎 イヤサ、其方には申しきける仔細がある。……ヤイ、女郎め、べろくくと何してうせる。きりくと行きをらぬか。

いそ お柳さん、そんならお先きへ。

りう ア、モシ、一しよに行かうわいなア。

三郎 イ、ヤ、やる事はならぬ。……汝ら、そこらにうろついてけつかると、ぶちはなすぞ。

ト刀へ手を掛ける。

磯露 ハイく。

ト氣の毒なる思ひ入れ。モヤくしながら下座へ入る。

りう コレ、二人の衆、待ちなさんせいなア。

ト振り切つて行かうとするを、引廻してきつと留める。此うち縁丸、お柳に附いて、うろくして三郎の顔を見て

縁丸 アレ、怖いわいのう。

リウ ア、何も怖い事はござりませぬ。私しに斯う附いてお出でなされませ。

三郎 コレ、お柳。俄鬼にかまはずと、おれが言ふ事を、下にゐて聞きやれよ。(ト引据ゑる)。

リウ ハイ、ハイ。(ト仕方なしに下にゐる。これより合ひ方になる)。

三郎 今、出頭の鷺塚金藤次どの、其方に殊の外の執心にて、閨の伽にも致したく、身共へくれぐれの頼みゆる、侍ひのあるまじき、女子を捕へてのわり口説き。こゝをよう聞けよ。人間と生れ、其身の出世を、思はぬ者は無い浮き世。今、身が申す事聞き分けて、ウンと返事さへすれば、身共が仲人して、金藤次どのの奥方になれば、其身ばかりか、兄平太郎の出世になるわ。こゝの道理を聞き分けて、得心しておくりやるまいか。

リウ そりやモウ、折角あなたの思し召し、有り難うござりますれど、此儀はどうも、御返事が出来ませぬ。

三郎 ムウ。かういふうまい相談は、願つてもねえ事を、返事が出来ぬといふからは、ア、聞えた。さすれば汝が兄の平太郎が、主人といつて世話をする、浪人者の那須の八郎と、わりやアくつついてゐるな。

リウ どう致して、さやうな事が。

三郎 なければすぐに金藤次どのの、屋敷へ連れて行かうか。(ト手を取る)。

リウ そりやあまり御無體な。

三郎 無體と思は、思ふまで。武士が一旦いひ出して、其儘では済まされぬ。サア、おれと一しよに歩んでゆくか。

リウ サア、それは。

三郎 但し得心して行く心か。

リウ サア、それは。

三郎 手荒くせうか。

リウ サア、

二人 サア、

三郎 お柳、返事は、ど、どうだ。

ト此時風の音、トヒヨになり、下座より件の鳥舞うてくる。これを、三郎の据ゑてゐた鷹、怪鳥を目かけ飛び、追ひ廻す。ト怪鳥は空へ舞ひ上がる。鷹は柳の枝へ足を引ツかけ、飛ばれぬことあつて、鷹はあせつてゐる。縁丸これを見て

縁丸 アレ、鷹が鳥を追つて、面白い。

ト手を叩き喜ぶ。三郎聞きつけ

三郎

ナニ、鷹が。(トわが手を見て) ヤア、若大臣様が御秘藏の鷹が、柳にかゝつて。

ト柳を見て獨りあせる。此うちにお柳は縁丸の手を曳き、そつと逃げて入る。三郎いろく氣なもみ、又お柳の方を見て、そこにあぬゆゑ

ヤアく、鳥は逃げる。お柳は飛んでしまふ。鷹は柳にひツかゝる。こりや、どうせうく。

トうろくしてゐる。下座より藏人、飛仲太出て來り、此體を見て

藏人

こりやこれ、若大臣様御寵愛の鷹。此儘に打捨て置かば、鷹の命は目のあたり。いかゞ致したものでござらう。

飛仲

イカサマ。猿猴ならでは登りがたき此梢。何とも以て致しやうがござらぬ。

三人

ハテ、困つたものでござる。

ト此うち下座より、和田四郎出かゝりゐて、此時前へ出て

和田

あの鷹の命、助けてあげませうか。

ト皆々和田四郎を見て

飛仲

ヤア、其方は樵夫の和田四郎。鷹の命を助くるとは。

和田

さればでござりまする。御覽の如く、丈拔群の柳の梢。袖樵夫のわれくでも、登りがたき高木

なれば、袖仲間を呼び寄せ、大勢しかけて根元より、切り倒す其時は、自然と鷹のとまりし枝は外へ落ちる。そこをおさへて足皮を放しなば、鷹に少しも怪我なき工夫。此儀はいかゞでござりませう。

三郎

成る程、流石は和田四郎。性は道によつて賢し。われくもなぞが存じも附かぬよい分別。なんと

左様にはおほさぬか。

藏人

イカサマ。此儀よろしきやうなれど、幾年となく星霜つもりし柳の樹、無下に切る時は、あとの憂ひも計りがたし。どうも柳を切る事は。

三郎

ナ、何とおいやる。其許は外に何ぞ御工夫あつて、若大臣様御秘藏の鷹を、助くる手段がござるか。

藏人

サア、其儀は。

三郎

御手段無ければいらざるお差圖。和田四郎、急いで樹を切る用意致せ。

和田

かしこまりました。すぐに爰にて人數を集めて。

ト人集めの竹法螺を吹く。烈卒、やうなる太鼓の鳴り物になり、向うより袖、五人、いづれも木綿やつし輕衫をばき、腰に斧を差し、小さき竹の子笠を冠り、走り出てくる。此中へ交り、那須の八郎、浪人者の山狩りに出たる好みのなりにて、粗末なる半弓と矢を持ち、竹の殿中笠をかざし、顔を隠して出て、

皆々と一しよに下手に控へる。

楠 人数を集める合圖の竹法螺。聞くに其儘走せつけましたが、和田四郎どの。

五人 何御用でござるな。

和田 其御用といふは、これなる柳の大木へ、鷹が足並ひツかけて、アレ、あの通り苦しむゆる、柳の幹を切り倒し、鷹の命を助けるのだ。いづれもすぐに支度さつせえ。

五人 心得ました。

八郎 ト皆々笠を脱ぎ、腰の斧を取つて立ち上がり、柳の樹へかゝる。此時八郎、笠投げ捨て

八郎 アイヤ、此柳を切る事、御無用になされませう。

蔵人 ト五人の袖を振きのけ、留めながら前へ出る。皆々八郎を見て

蔵人 ヤア、貴殿は那須の八郎どの。

三郎 ほんにさうだ。いづぞや大館勤番の夜に、八手の神鏡紛失させ、まだ其上に、田熊どのの息女藻女と不義密通が現はれて、浪人なされた扶持離れ。

飛仲

八郎 面も冠らず其儘で、われく列座の其ところへ、柳を切る事無用とは、なんで留めにお出やつた。

各々方の仰せの如く、身の誤りより肌薄き、浪人者の活計にて、山野をかけり鳥獸を、撃つて身すぎの八郎宗重。不意に吹き立つ竹法螺は、何事やらんと袖仲間の、中へ交りて様子を聞けば、

( 14 )

鷹の命の其代り、あれなる柳を切るとは、いづれも方の思し召し、相違のやうに存じまして、恥辱もいとひなく、申したのでござりまする。

( 15 )

三郎 イヤナニ、八郎どの、柳を切るをわれくが、料簡違ひとおいやるのか。

八郎 いかにも。

三郎 ハ、ハ、ハ、ハ。そりや何といふたわ事だ。若大臣様が御秘藏の、鷹の命が危ないゆる、人数を集めて切り倒すを、料簡違ひとは片腹痛い。

八郎 アイヤ、それが即ち料簡違ひ。鷹の命を助けても、年経し柳の命お取りなされば、同じ事かと存じえする。

三郎 ヤア、言はして置けばさまぐのよまひ事。柳に命があるものか。

八郎 イ、ヤ、命がござる。

三郎 そりや又どうして。

八郎 草木とは申せども、四季折々の時を知り、若葉ともなり、又青葉ともなる。秋は葉隠れ、冬は木枯し。花あれば實あり。何ぞ性なき者に變化の理あらんや。大樹百年にして神となるといへり。

かほどの古木にして此末に、何百年と命数の計りがたきを、命数の限りある、鷹の命を助けん爲に、いたづらに切り捨てなば、木魂神となつて、其咎め、無いともあながち申されまじ。殊に先



の大臣お惱みの折柄、即ち鷹を助けて、柳の命を取る時は、同じ殺生と存するゆゑ、お留め申し  
たが、誤りでござるかな。

三郎 サア、それは。

八郎 但し、外に御批判がござるかな。

飛仲 オ、批判がござる。柳は切らずと其儘にして置かうが、鷹の命はどっして助ける。

八郎 その助ける仕様は、幸ひ持ち合せたる此小弓にて、たつた一矢で射落しまする。

飛仲 ヤア、血迷うて何を差し出た。鷹を射殺す位なら、尾羽打枯した浪人者の、差圖は受けぬ。す

和田 つこんでおるやれ。……ヤア、和田四郎。彼れにかまはず、切り倒せ。  
心得ました。

ト皆々斧を持ち、立ちかゝる。

八郎 イ、ヤ、切らせる事は相成らぬ。(ト皆々を支へる)。

皆々 何を小癪な。

八郎 イ、ヤ、ならぬ。

ト八郎弓矢を持つて皆々を留める。六人は斧を振りあげる。八郎、五人を下手へ突きおのけ、和田四郎と一寸立廻り、膝に引敷きながら、手早く弓に矢をつがへ、鷹を目當てに切つて放つ。これにて鷹の足

皮を射切り、鷹は日覆ひへ引いて取る。皆々見て

皆々 ヤア、鷹は虚空へ飛び去つた。

八郎 鷹も柳も、双方とも、命助ける拙者が仕様。御覽の通りにござりまする。

ト和田四郎を突き放し、皆々へ目禮して思ひ入れ。

藏人 あつばれ射術の八郎どの。

飛仲 射術にしろ、何にしろ、鷹は飛んで行くへわからず。さすれば死んだも同じ事だ。若大臣様  
への申しわけは、何としようと思ふのだ。

八郎 アイヤ、そこが平日据ゑ置く鷹。拳へ戻すを御存じなき、各々方でもござるまい。よし又それを  
御存じなくば、鷹を据ゑなざる、お役目に、疎いやうに存じられまする。

飛仲 ムウ。

藏人 かゝる手練のありながら、世の諺に、田熊の娘藻女と、不義の汚名を受けし上、御鏡の紛天が、  
越度となつて今の流浪

八郎 申すも便なき身の誤まり、さりながら、先の大蔵御惱みの此時節に、何とて貴殿ははるくくと、  
此紀伊路まで遊獵めさるな。

藏人 さればサ。此度日本に珍らしき怪鳥、飛行なすゆゑ、陰陽の博士に申し附け、大館記録所の書藉

を、残らず吟味致せしに、かゝる怪鳥は其昔、天竺より唐土へ渡る。時は即ち殷の代、白面の妖狐出で、殷の帝を惑はし、人民を悩ませし時、此鳥出で、舞ひ遊ぶ、名づけてこれを双鸞と呼ぶと、時の博士より關白家へ奏聞。さすれば、聖代に不吉の鳥なるがゆゑに、捕へんが其爲め、三郎どの、飛仲太どのもろとも、遊獵ならぬ此鷹狩り。殊更當節鳥羽の大臣、御遁世ありて、蓮花坊と自ら稱され、靈佛靈社御願拜の立願にて、大館を出で、ほのかに聞けば、當時此紀伊の國を御めぐりのよし。承つて狩倉の、折を幸ひ御勤座を、相尋ねるのでござりまする。

三郎

それといふのもなまじいに、貴殿の兄の安部泰親、大臣の御顔を相しつゝ、今御就任あると雖も君には正しく下賤の相あり、これを除かんには、一萬人の手の内を受け給へと、出かし顔に申せしより、起つての御遁世。

飛仲

まことに陰陽師身の上知らずと譬への通り、人の相の難非難くツつけても、那須の一家は同罪と、八郎どのの兄なれば、可愛や遂に閉門とは

三郎

ほんにたわけた詮索だ。

八郎

ト八郎へ當て附けていふ。八郎ムツとして、氣を變へ、藏人に向ひ

大臣は御在任の望みなく、御身に下賤の相あるは、予が不徳と剃髪なされ、世を捨て人と館を出でさせ、習はぬ道のわらぐづも、おいたはしき儀でござりまする。

藏人

然るによつて、御弟として輔雅君へ、御就任を勧め奉れども、親兄の禮を思し召し、御承引なく、然るゆゑに、當節一天下に主君なし。

八郎

さすれば四海は常闇同然。

藏人

ぢやによつて、先の大蔵の御悩み、一日も早く平癒あるやう、千々に心は碎けども、肝心の御祈念に、無くて叶はぬ神鏡の、紛失は是非も無し。

八郎

お氣遣ひ下されな。數日を持たず、神鏡は、きつと詮議致し、差上げまする。

飛仲

イ、ヤ、そりやアひが事だ。現在自身が勤番の夜、大切な神鏡を、盗み去られるお手際で、なんの詮議が出来るものか。

三郎

三種の重器の其一つと、知つて盗むほどの者が、うつそりかんの大だわけが、詮議しようからとて、ツイそれと知れる處に、持つてをらうか。身共なぞが盜賊なら、さううまく……いけ馬鹿々々しい。なんと、藏人どの、さやうには思さぬか。

藏人

アイヤ、三郎どの。貴殿のやうにおいやれば、どうか在所を、御存じもあるやうで。

三郎

ヤア。

藏人

イヤサ、御存じあらう筈は無いが、申さば朋友のよしみとやら。ともぐ詮議に、盡し遣はされい。

三郎 成る程、こりやア拙者が申しぞこなひ。とても出ぬ寶とは知れてはあるが、ともく詮議致しませうよ。

藏人 イヤナニ、八郎どの。寶首尾よく差上げて、生國野州へ伊達道具、飾ら花野の那須の氏。

八郎 其會稽も心を籠め、たとへ高麗唐土に隠すとも、

藏人 アイヤ、さのみ遠く詮議に及ばぬ。彼の古歌にもある通り、……「春雨の、分きてそれとは降らねども、受くる草木もおのがいろく」。……赤き花に赤き雨、青き花に青き雨と、雨露の恵みは變らねど、受くるは己が色々にて、人の心もまッその如く、表の花は形よく、内には含む鬼薊そこらあたりに刺あれば、心を籠めて、必ずともに。

八郎 ハッ、委細承知仕る。忠義の二字と聖徳の、頭に宿る神力にて

藏人 寶詮議を、那須の宗重。

八郎 吉左右お知らせ申す時は

藏人 よろしく奏聞。

三郎 進の藏人。

藏人 御兩所お先きへ。

四人 おさらばでござる。

ト唄になり、藏人こなしあつて、侍ひ一人、袖五人附いて、向うへ入る。八郎と三郎、飛仲太顔見合せ、こなしあつて、八郎は下座へ入る。三郎、飛仲太、和田四郎残り

和田 ア、つまらぬ者はおれ一人。鷹の事からしやくり出て、一番手柄と思ひの外、あの八郎めにばひ取られ、これがほんの犬骨折り。鷹は飛び去る。

三郎 イ、ヤ、其犬骨折りしてやる其譯は、兼ねて某、田熊法眼どの、鷲塚金藤次どのと合體なし、那須の八郎が勤番の夜に、盗み取つたる八手の御鏡。肌身離さず、これ爰に。

ト懷より、服紗包みの神鏡を出して、思ひ入れ。

和田 すりや、それがまことの、神鏡でござりまするか。

三郎 盗み取りは取つたれども、今、藏人めが詞の端々。どうか氣取つた様子。身共が持つては危ないもの。ところで、思ひ附かぬ和田四郎へ、此神鏡を預け置けば

和田 エ、。すりや、其品を私しに。

三郎 これをきつと守護してをれば。やがて田熊どのの關白職。天下の政事を取計らひ、心にたがふ殿上人はおッ下し、身共らも公卿となり、何大臣と官位昇進。其時には其方も、武士に取立て、よくれるワ。これまでの約束代りの此神鏡。大事に持つて出世を待てサ。(ト神鏡を渡す。和田四郎受取る。)

飛仲 それはさうと、飛び去つたる鷹の行くへ、此儘打捨て置いては、若大臣よりお崇りをも計られず。

三郎 イカサマ。これより手分けして詮議なさん。

和田 さやうなら此品に付いて、必ずお心遣ひなされまするな。

三郎 必ずともに、人に氣取られるなよ。

和田 蟲にも刺さす事ぢやござりませぬ。

飛仲 あつばれ片腕。

三郎 和田四郎。

和田 いづれも様。お別れ申します。

ト、木魂、山嵐の合ひ方になり、三郎、飛仲太、侍ひ残らず向うへ入る。和田四郎残つて

待てば海路の日和とやら、斯うもまんが直るものか。……これが出世の品とは、ハテ、とんだ物だなア。

ト出して見たり、又懐へ入れたりして獨り喜んでゐる。此時お露、お磯、以前の形にて出て來り

露磯 和田四郎さん。こゝにかいなア。

和田 オ、これはお磯坊にお露坊。其やうに山稼ぎをするものぢやアねえワ。ちつと夜稼ぎといふ事をして見ねえか。(トお磯に戯れる。)

いそ ア、コレ。主ある者に、戯談をさんすないなア。(ト突きこかす。)

和田 年増に刎ねられたら、さつきにも懲りず生娘にしよう。(トお露に戯れる。)

つゆ さつきといひ、あたしつこい。わたしや其やうな事は知らぬわいなア。

ト振り離す。和田四郎二人の袖を捕へて

和田 さう二人ながらむごくはしねえものだ。男が斯う者ひ出したからは、二人に一人、得心してもらはにやならぬ。年増か、生娘か。長か、半か。附け目なしにどつちへでも乗る氣だが、どうだえ、どうだえ。

いそ お前も男、いひ出した事を此儘で済まされまい。わたしが仲人して、お露さんを取持たうかいなア。

つゆ ア、モシ、めつさうな。其やうな事がどうしてマア。

いそ イ、エイナア、わたしがわるいやうにはせぬほどに、(トお露にわるいやうにはせぬと呑みこませる思ひ入れあつて)ナ、任せて置かしやんせいなア。

和田 任せて置けといふからは、お露を取持つか。

いそ あの子はとうから、得心してぢやわいなア。

和田 得心とは面白い。定めて手入らずの、エ、有難い。(ト無性に喜ぶこなし。)

いそ シタガ、物は堅うせにやならぬ。盃事というたところが、こゝは道中。手早くツイ抱き附くにも

和 初心なお露さん、恥かしがつて埒が明かぬによつてナ、お前見ぬ振りしてござんせいなア。

いそ 馬鹿をいつたものだ。見ぬ振りをしてるちやア、口を吸ふ事も出来ねえ。

いそ ほんにさうでござんす。こりやどうしたらようござんせう。(トいろ／＼考へ、思ひ入れ)。

和 オットいゝ事がある。さう初心ぶるなら、手足と口は自由になり、目ばかり見えぬやうにしたら

恥かしい事はあるまい。

いそ さうすればようござんすが、どうすれば目が見えぬやうになりますえ。

和 それは斯うするぢや。(ト手拭ひを出し、目隠しをして) これぢやア恥かしい事はあるまい。

いそ こりやアようござんす。そんならもそつと、そつちの方へ寄つてござんせ。

和 オット合點だ。(ト和田四郎上手の方へ行き、濟ましてゐる)。

いそ サア／＼、お嫁御さんは聲さんのまゝでござんす。早くお側へ。

ト言ひながら、早く逃げるゝと仕方する。お露呑みこます

つゆ お磯さん、何いうてぢややら、わたしや否いなア。

いそ エ、此子も呑み込みのわるい。(ト一寸囁き) ナ、早うお側へ。

ト向うへ行けと教へる。これにてお露、抜き足をして花道へかゝる。

エ、辛氣な。わしが手を取つて聲殿のお側へ、サア／＼。  
ト捨ゼリふ言ひながら、同じく抜き足をして、お露と一しよに揚げ幕へ走り入る。和田四郎これを知ら

す

和 エ、子供といふものは、恥かしがるものだ。肝心の聲どのは盲同前。どんな形をしてもいゝぢ

やアねえか。サア、來な／＼。

ト同じく捨ゼリふ言うて、あちこちと探り廻るところへ、お柳、縁丸の手を引き、以前の形にて、何心

なく來かゝるを、和田四郎、お露と心得、無暗に捕へる。お柳恠りして

りう エ、こりや無體な和田四郎さん。何さんすぞいなア。

縁丸 お柳を捕へて、どうするのだ／＼。

ト持つたる熊手にて、和田四郎をさん／＼に打つ。

和 ア、痛え／＼。(ト恠りして手拭ひを取り) ヤ、わりやお柳。……そんなら二人に騙かられたか。

いま／＼しい。

りう お前もマア、無性に人に抱き附いたり、引ツついたり、ほんにちと嗜なましやんせいなア。

和 イヤモウ、面目次第もない、といふ所をいはぬ其譯は、金藤次様がおぬしに惚れてござると聞い

たから、あなたへおれが取持つて、奥様にするワ。なんと、嬉しいか／＼。

リウ 三郎様といひ、お前までが、其やうな事。聞きともないわいなア。

和田 お大名の奥様に上かるに、味を知らないではぶしつげだ。おれが一寸お風味を。(ト戯れる)  
リウ エ、モウ、座興もいゝ加減にしておかんせいなア。

ト突きこかす。和田四郎起き上がり

和田 ハテ、此やうに女子なごに嫌はれる筈ではないが、待てしばしわが心。當時世界に和田四郎ほどの男はない筈だが、おれが顔はどうぞしたかしらん。(ト懐より以前の神鏡を出し、ためつすがめつ、髪かみの風を直し)どう見ても菊五郎をぬけといふ男で、おまけに少し浅友あさともといふところもあり。これで女の惚れぬといふは、ハテめんような。

トこれにてお柳、和田四郎の持つたる鏡を見て

リウ お前もよつほどの自惚れ。山稼やまがぎに歩くまで、鏡を持ちあるくやうな嫌味きらみな男は、當時流行らぬわいなア。

和田 イヤサ、此鏡は嫌味で持ち歩くのぢやアねえ。こりやア八手やての御鏡ごきやうといつて、大館様おほやかたの大事な寶だが、譯あつておれが預つてゐる。女に生れた名聞なまうもんに、拜んで置くがよい。

ト出して見せる。お柳取つて

リウ すりやこれが、八手の御鏡とやらでござんすかえ。

和田 オ、サ、縁あらばこそ拜まれるわ。

リウ (よくく見て)エ、有り難い。此御鏡こそ御主人の、日頃お尋ねなされるお品。ちつとも早く八郎様へ。

ト持つて行かうとするを、和田四郎あわてゝ留め

和田 ヤ、そんならあの浪人めが、尋ねる品であつたのか。さうとは知らず口走つたが、其品渡してたまるものか。

リウ イ、エ、渡して下さんせ。

和田 渡すどころか、他言されては身の上だ。

リウ そなたの身の上より、御主人の身の上、御身ごみみにかゝつた御鏡なれば。

ト振り切つて駆け出す。和田四郎、縁丸を捕へて

和田 コリヤお柳。われが返さにや平太郎が、主人とぬかす此小倅。今斧で打殺して。

ト斧を振りあげる。お柳惘りして

リウ ア、コレ、滅多な事さんすなえ。(トつかく立戻り、此中へ入り、縁丸を圍ひ)此お子滅多に、手籠めにさせては濟まぬわいなア。

和田 そんなら鏡を戻すか。

リウ エ、此品兄さんにお渡し申して、那須のお家の再興を。

和田 さうされてつまるものか。われがさうぬかすなら、こつちも酷い役ながら、餓鬼めを殺して其上に、おのれを金藤次どのへ連れて行き、妾にあけて金にする。

リウ イ、エ、なんの金藤次づらに。

和田 行かねば、そんなら鏡を返すか。

リウ こればつかりは。

和田 エ、面倒な。手籠めにして。

トお柳の持つて居る神鏡を取らうとする。お柳は渡すまいとあせる。立廻りのうち誤つて上手の谷底へ神鏡を取り落す。

ヤ、大切なる神鏡を。

リウ あの谷底へ。(ト岩組みの谷底へ下りようとする。)

和田 エ、しみしつこい。おのれに遣つてたまるものか。いつその事に。(トお柳を斧にてしたゝかにくらはす。)

リウ 鏡はあとでおれが取る。おのれは金藤次様へ、参りますと返事をしろ。

和田 エ、穢らはしい。なんの返事を。さうぬかしやア、餓鬼めを殺して。(ト緑丸をくらはす。)

リウ 其子にあやまちある時は。(ト留める。)

和田 われも一しよに。

トお柳と緑丸を左右に置き、あちこちとくらはす。お柳は緑丸を打たすまいと留める立廻りのうち、急所をしたゝかに打たれ、これにてウムと悶絶して、苦しみ倒れる。和田四郎驚き

南無三、お柳は氣を失つたか。………お柳やアイ。

ト呼び生ける。緑丸恠りして、お柳に取り付き

緑丸 こりやお柳が死にやつた。どうせうく。どうせうぞいなア。

ト大泣きに泣き落す。山嵐になり、いづくともなく烏三羽ほど飛び来り、お柳の死骸に取り付き、あちこちしてゐる。

和田 金藤次様へ差上げて、大金にする大事な代物。こりやア大變だ。(トあわてながら、下手の草井戸の繩釣瓶を汲み上げ、水を飲ませ、いろく介抱しても心づかぬこなし。和田四郎思ひ入れあつて)、烏が死骸をせよる様子では、どうしても事は切れたと見える。ハテ、惜しい事をした。併し鏡の事を見知つた女なれば、これも物怪の幸ひだ。侍ひならとゞめといふ所だが、斯うして。(ト斧にて死骸を思ふ存分くらはし)これぢやアよもや生き返る事はあるまい。これからは谷底へ下りて、御鏡取り上げ、それく。

ト上手の岩組みを下りようとする。此うち縁丸始終泣いてゐたりしが、此時有合ふ熊手を取つて  
縁丸 お柳を殺した憎いおぢいめ。

和田 トとうしろより打つてかゝる。和田四郎驚き、振返つて其手を捕へ  
エ、ませた餓鬼め、何をするのだ。此場の様子を見かぢつた小倅。おのれも生けて置かれぬ。  
殺生ついでだ、一思ひ。

と引ッ捕へ、ト危ふき所へ、下座より那須の八郎、何心なく出て來り、此様子を見て、あわてゝ抑へ

八郎 ヤア、こなたは和田四郎。なんで我が子を手籠めにするのだ。

和田 サア、それは。

八郎 様子があらう。それぬかせ。(ト蛇度いひながら、お柳の死骸を見て) ヤ、こりやお柳を何者が。

縁丸 あのおぢいが叩いたゆゑ、お柳は死にやつたわいの。

ト泣きながら言ふ。八郎驚き、介抱して

八郎 こりやことは切れたか。ホイ。

トこなし。此うち和田四郎窺ひあて、うしろより奔にて、騙し打ちに打つてかゝる。八郎危ふく留める。

此時薄ドロくにて、柳の蔭より山神、異形に出る。和田四郎には見えぬこなし。山神と共にお柳、す  
つくりと立つ。此途端に和田四郎、斧を持ったまゝ見事に中がへりする。これをきつかけに、チョンと

木の頭。お柳につこりと思ひ入れ。八郎、和田四郎が様子を見て、心得ぬこなしにて、縁丸を脇に引寄  
せる。双方よろしく、ひやうし

幕

( 31 )

## 四建目

九尾妖狐出現の場

### 登場人物

沙門、蓮華坊、實は鳥羽の大臣。金剛太郎重虎、海賊、荒磯浪九郎。同、浮州の  
岩蔵。華陽夫人の靈。

本舞臺三間の間、正面の奥深くに一面の浪幕、吹寄せの手探り。所々に岩組み。少し上手に寄せて、若  
蒸したる誂への自然石、仕掛け物好みあり。此側に、草生ひ茂り、舞臺前、流れの浪板。切り穴。下の  
方に管船一般繋ぎあり。すべて紀伊の國逢瀬の濱、海上を遠目に見たる飾り付けよろしく、こゝに待ひ  
二人、半素袍の下ばかり。これに、白丁の下を穿きたる仕丁四人、うろくしてゐる。浪九郎、岩蔵、  
海賊の拵へにて、これに立ちかゝりある。此見得、時の鐘、浪の音にて幕明く。

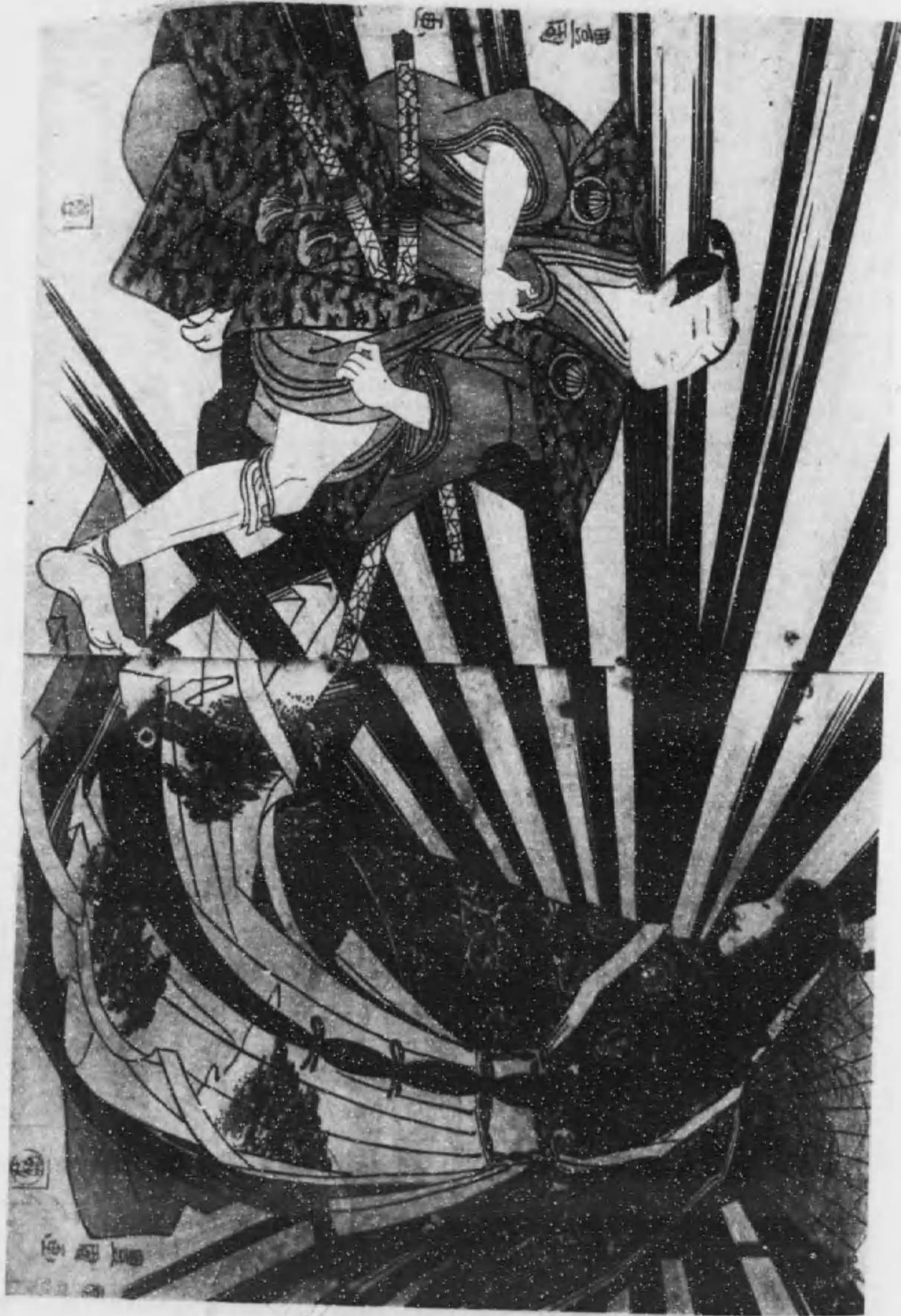
浪九 サア、うぬらがまとつた其温袍

岩蔵 四の五となしに片ッばし、きりく脱いで

浪岩 うしやアがれ。

( 30 )





侍甲 ヤア、何といふ。すりや二人とも、道案内と思ひの外。

皆々 田夫野人の、追剥ぎやなア。

浪九 知れた事だ。海道通路の旅人は元より、湊下りの浦船を、目掛けて働く

浪岩 海賊だワ。

皆々 イヤサ。(ト驚き、ガタ／＼慄へる。)

浪九 何も驚く事はねえ。コレ、エ、今わいらがぼざいた通り、鳥羽の大臣といふ公家どには、コレ、岩藏。

岩藏 オ、それ／＼。通世とやらを望んで、そんならいよく館をば、駈落ちしたに間違ひないか。

侍甲 オ、それゆゑに行くへを尋ね求むるわれ／＼兩人。殊更此程、これなる紀の路においでの上、町々の風聞。

侍乙 それ／＼。その在所を尋ね出せば、御褒美にありつくといふものだ。なんと其方もとも／＼に

侍甲 詮議致してくれまいか。

岩藏 イカサマ。金にさへなる事なら、詮議してやるまいものでもねえか、何をいふにも、雲を掴むやうな尋ねもの。

浪九 オ、岩藏がいふ通り、大臣さんのぐれを尋ねる事だ。當座の褒美に手付けの金を、いつちやア

ありはしまい。其代りに、わいらが温袍、

岩蔵 後生ながらに取つてやるのだ。サア、身ぐるみ脱いで、置いて行け。

皆々 すりやどうあつても、われくの衣類まで。

浪九 オ、おいら二人が今こゝで、頼まれた其しるし。

岩蔵 手付け代りに

浪若 もらふのだ。

侍甲 ヤア、言はせて置けば、推参なる匹夫めら。彼れらにかまはず、はやお行きやれ。

ト皆々行きにかゝる。浪九郎、岩蔵、これを捕へ

浪九 ヤイく、待ちやアがれ。匹夫だの、こつぶだのと、聞いた風な。

岩蔵 面倒な。片ツぱしから、引ッ剥けく。

ト皆々振り切つて行かうとするを、浪九郎、岩蔵、有合ふ舟の楫にて、皆々を打ち倒す。

皆々 ア、コレく、聯爾致すな。脱ぎますく。

トこれにて浪九郎、岩蔵、捨ぜりふにて引ッ剥ぐ。皆々裸になり

侍甲 ア、コレ、いかに都で無禮講が流行るといつて、大臣さまのお行くへを尋ぬるに  
侍乙 それく。裸で道中がなるものか。

皆々 道理で昨夜も張り込んだ。

浪九 やかましい。早く行きやアがれ。

侍二 仕丁ども、参れ。

ト浪の音。侍二人に仕丁附いて、皆々下座へ入る。此うち浪九郎、岩藏、衣類を掻き集めて見送り

浪九 なんと、ひつこしのねえ。餘程の判じ物だ。

岩藏 さうよ。あれが正眞の、天王様のお神輿かつぎ、よい／＼めいてゐるワ。そりやアさうと、此間

中鳥羽の大臣さんは、任をやめて、行くへが知れねえと、人の噂に違ひなく、そんならいよく大館から、駆落ちした様子だが、所詮在所を尋ねて、都へ知らせたいといつて、高の知れた褒美であらうよ。

浪九 ちけえねえ。それよりは眞ッ裸にして見やれ。大臣の事だによつて、なんといつても路銀はこつてり。引揚げるが上分別といふものだ。

岩藏 コレ／＼、待ちやれよ。さつきあの長濱で、出合つた沙門めは、さういやアどうか大臣くさいやうだが、あいつに足を附けて見やうぢやアねえか。

ト時の鐘を掠めて、浪の音にて、下に繋ぎし船の舳より、管を投げ、中より金剛太郎、簀をひツかけ、竹の笠をかざし、そろ／＼出て来り、うしろに窺ひゐる。

浪九 此濱傳ひに、那智へかゝるのであんべエ。なんと、こいつをばらしながら、鷓鴣ひのあたりで頑

張るべいか。

岩藏 それがい。これから大臣をぶツちめりやア、懐にすつしり路銀の金。

浪九 そいつをせしめた其上で、都へすぐに訴へりやア、濡れ手ではよく褒美の金。

岩藏 それがまことに、四でよし、五でよし。

浪九 そんなら岩藏。

岩藏 サア、来やれ。

ト兩人着類を持って行きかゝる。此時太郎思ひ入れあつて

太郎 二人ともに、待ちやがれエ。

ト前の方へ出る。兩人惻りして、太郎を見て

浪九 なんだ頭大柄に。つひぞ見た事もねえ野郎めが。

岩藏 ひよつくらひよいと出やアがつて、おいらに用とは

浪九 なんの事だ。

太郎 ヤア、何事とは小ざかしい蛆蟲めら。穢らはしい其口の端にかゝるさへ、勿體ない大臣さまの、其お在所を尋ね出し、手籠めにせうとは野太い雑言。サア、ぬかしやアがれ。

岩藏 ムウ聞えた。すりや、うぬも駈落ちして、鳥羽の大臣にとツついた二本棒だな。いッワ。斯うなるからは隠しはしねえ。見當り次第金にする、二人が目算。併しそんじよそこらといふ、其居處はおいらも知らねえ。

浪九 よし又知つてゐやうがま、大金になる仕事の蔓、うかく言つてつまるものか。

太郎 さう吐かしやア是非がない。大臣さまの御在家、ひそかに詮議をなさんが爲、姿を變へて徘徊なす、金剛太郎重虎が、掴みひしいで、言はせて見よう。

岩藏 ヤア、こま／＼吐かさばいつその事、うぬから先きへ。

浪九 オ、疊んでしまへ。

ト以前の楯を持つて打つてかゝる。太郎これを受留め、ちよつと立廻り。これより木魂、浪の音の入りし鳴り物になり、太郎、兩人を相手にタテあつて、ト太郎刀を抜いて打つてかゝる。これにて浪九郎岩藏一散に逃げ出す。太郎追ひ廻し、三人とも下座に入る。鳴り物打上げると、時の鐘の頭を打込み、すぐに唄淨瑠璃。

雨もよひ、しぐる、山を重ね来て、都もよその雲井なる、過ぎし寛和の昔さへ、玉の臺も何のその、登らぬ身にし有明の、月を友なる旅の空。

ト此うち時の鐘。木魂をあしらひ、よき時分、花道より、鳥羽の大臣、有髮の僧、鼠色の麻衣、木綿の

股引き、足駄にて、藁の搦みし杖を突き、行者の拵へよろしく、出て來り、花道にとまり、思ひ入れ。唄淨瑠璃一ばいに切れる。

鳥羽 「説きおける言の葉しけき中にしも、まことの法の花ぞ色濃き」……ア、ひとたび人臣の位を極めし身ながらも、其身の不淨をおもんみて、早くも浮世を遁れんと、名を蓮華坊と改め、五百戒を心に保ち、或る夜ひそかに大館を忍び出で、即ち沙門の身となれば、今は心も吉野の行尊、役の優姿のあとぞ懐かしき。ア、思へば富貴も浮べる雲。悟れば心外無一物。ハテ、樂しき法の教へぢやなア。

ふみも習はぬ道もせを、わたる御法の高足駄、名にし逢ふ瀬の片原に、しばし休らひをられける。

ト此文句一ばいに、鳥羽の大臣舞臺へくる。唄淨瑠璃切れると、薄ドロ／＼、トヒヨになり、前幕の怪鳥二羽飛び来る。これに連れて、小鳥大分飛び来る。此うち怪鳥は日覆ひへ舞ひ上がる。残りの小鳥は上手の塚の上へ飛び行くと、忽ち羽を縮め、ばら／＼と落ちて死ぬ。此途端に煙硝火立つ。鳥羽の大臣これに目を附ける。薄ドロ／＼やんで、矢張り木魂、時の鐘、かすめて浪の音。

鳥羽 ハテ、心得ぬ、小鳥の振舞ひ。(トあたりを見廻し、自然石を見て思ひ入れ)。ウム。こゝは紀の國逢瀬の濱。此古跡こそ其昔、吉備大臣入唐の其砌り、金毛九尾白面の、年経る妖狐わが朝へ、渡り

し事を悟り知り、即ち此處の地中へ封じ、名づけてこれを狐塚と稱す。狐念凝つて空舞ふ鳥、地を走る獸まで、此石に觸れ近附けば、落命なすと聞きつるが、安部の泰親奏したる、これなる一卷。(ト思ひ入れあつて、懐中より結構なる一卷を出し)これぞ正にもろくの、相を記せし其中に、天然にては華陽夫人、芙蓉の面も悪女の相。わが朝にては小野の小町、容顔美麗にありながら、即ち凡人の相を現はす。予も如何なる業因にや、一たび人臣の位を極めたれども、其相の賤しきを知りしゆゑ、直ちに任を辭し、遁世なしてあらゆる靈場、巡行なさんす志し。此一巻を所持なせしも、難苦行の心の戒め。さるにても此毒石、永劫が其間、浮まん便りを失へり。草木國土悉皆成佛とあるからは、此石も亦成佛せん事疑ひもなし。今、教諭して、佛果を得させん。(トこれよりのつとになり、鳥羽院珠數を持つて石に向ひ)汝元來頑石頭、其性は善、諦聽せよ。善惡不二、迷悟一致なり。此惡靈いづれの處よりか起れる。早く狐念を離散して、速かに成佛を遂げよ。

ト杖を上げて石を打つと、大ドロくになり、以前の怪鳥舞ひ下がり、塚の中へ入ると、煙硝火バツと立つ。此途端に鳥羽院、タヤクとなつて檯となる。ドロくかすめて、大薩摩の淨瑠璃になる。

大薩摩、それ梨花海棠の雨を帯び、妖冶の姿も消え失せて、今は果敢なき石魂の、忽ち魔魅の風につれ、怪しき華陽の臚影、ゑんくわいとして佇みたり。

ト此内よき時分、又大ドロくになり、右の塚左右へバツタリと割れる。此中に埋めたる瓶あつて、仕

掛けにて其中より、本水の泡を吹出し、次第に吹上げる。これにて瓶の外へ溢れ出る。ト、此池の中より、華陽夫人の靈魂、髪を亂し、白き好みの怪しき衣を着たる拵へ、よろしく出る。よき程に淨瑠璃切れる。

華陽 そもわれこそは天地の、開けそめたる時よりも、中有の間に縦横なし、儒佛を魔界に引入れんと思ひし事も水の泡。一度怨魂の石となり、迷ひの雲の深くして、又ぞろ惡趣に誘はれしも、未だ業因盡きざるか。アラ、恥かしき身の、有様ぢやなア。

ト思ひ入れ。此うち薄ドロくにて、鳥羽の大粒心附き、起き返り

鳥羽 ハテ、心得ぬ。夢ともなく、現とも覺えず。さては放心なしたるか。(トあたりを見廻し、華陽夫人の靈魂を見て)ムウ。怪しげなる婦人の様。もしや障礙の(ト思ひ入れ)。

華陽 只一陣の魔風につれ、遙かの遠流もいつしかに、思はず爰へ流れ來て、シテ此國は。

鳥羽 大千世界大日本。

華陽 これぞ幸ひ。唐と日本と隔つれど、人を助くる出家の御身。何卒妾を、助けてたべ。

鳥羽 イ、ヤ、五戒を保つ此行者。女は穢れ。

華陽 すりやどのやうに願うても。

鳥羽 便り求めて、少しも早う本國へ。

ト行かうとする。華陽夫人の靈魂、モシ、と袖を押へて思ひ入れ。大ドロ／＼になり、鳥羽の大臣タヤ  
タヤと引戻されて、思ひ入れ。此時、持ちたる一卷、思はず開かれる。大臣キツとなつて  
これは。

ト思ひ入れ。大薩摩淨瑠璃。

大薩摩、目聲 瞬(？)幽冥(？)の、池の藻屑に引かへて、玉を欺く粧ひは、あたりも輝く風  
情なり。

ト大ドロ／＼にて、華陽夫人の靈魂のおどろの髪、仕掛けにて美しき黒の下げ髪に變り、着附けは引抜き  
にて、白綾の唐女、振袖衣裳、耕の袴の姿になり、鳥羽大臣を留める。兩人よろしく、キツと見得。こ  
れより三味線入り、詠への鳴り物になり、矢張り薄ドロ／＼、鳥羽大臣、開きし中の畫と、靈魂を見比  
べて、思ひ入れ。

鳥羽

斑足王の寵愛たる、華陽夫人の面差しに、寸分たがはぬ夫人の容貌。

華陽

其華陽とは聞き及ぶ、悪意を含めし魔魅の妖婦。其相好に妾が面、其儘なりとは恥かしい。世の  
人々の口の端に、かゝるも妾が身の穢れ。今は便りも無き身といひ、思へば果敢なき妾が業因。  
生き長らへて何かせん。せめてはこれなる潮に沈み、海の藻屑と消え果てん。さうぢや。

ト舞臺の浪板へかゝる。鳥羽大臣留めて

( 40 )

鳥羽

不便なる其方が心根。殊に容顏麗はしき、年さへ未だ老けずして、水に溺れて死なんとはい、あま  
りといへば(ト華陽夫人をキツと引留める。)

華陽

イヤ、生きて憂き恥晒さんより、せめては消えて死を遂げん。こゝ放してたびたまへ。

鳥羽

イヤ、死は易うして、生は難し。未だ其身に天命を得ず。死を急ぐこと、本意にあらんや。

華陽

さはいへ國家を亂したる、妖婦に似たる其上に、國を隔てし上からは、誰れあつて自らに、情け  
を加ふる者あらず。

鳥羽

イヤ、見捨てぬ。殺しはせぬ。

華陽

エ。(ト思ひ入れ。)

鳥羽

見捨て難きは神國の、即ち掟。

華陽

すりやアノ、妾が行く末を。

鳥羽

ト此うち鳥羽大臣、華陽夫人の顔をよく／＼見て、又一巻と見合せ、思ひ入れ。

華陽

麗なる相とはいひながら、實にうるはしき容貌の、芙蓉の露を含める有様。

鳥羽

ト華陽夫人の姿に見惚れ、思ひ入れ。

華陽

でも貴僧には行者の御身。とても妾が便りには。

鳥羽

イヤ、其艶色に、心の迷ひ。

華陽 エ、。(ト思ひ入れ。)  
鳥羽 コレ。

ト華陽夫人へ立ち寄る。薄ドロ／＼にて、此時、前の流れへ、白き龜出で、あたりを舞ひあるく。兩人これを見て、思ひ入れ。合ひ方變る。

これなる流れへ、怪しき白龜、現はれ出でしは、もしや聞きつる龜なるか。

華陽 日本にては伊邪那岐の、男女の交りしたまひし、戀の起りは鶺鴒の

鳥羽 戀ひ教へ鳥ならねども、折を幸ひ、此白龜。(ト華陽夫人、白龜を取上げる。)

華陽 翼重ぬる思ひ羽の、此翼の鳥といつしかに。

トきつと思ひ入れ。大ドロ／＼にて、此龜、仕掛にて二羽の鶺鴒と化し、トヒヨになつて空へ飛び上がる。

鳥羽 ヤ、今浮みたる龜の、忽ち番ひの鶺鴒と姿を化して、アレ／＼、翼並べて舞ひ行く有様。

華陽 これぞ御身の妹脊事、番ひ離れぬ雌雄の鳥。

鳥羽 予も今よりは其方が側、離れぬ誓ひは、(ト思ひ入れあつて、我が足を見て)土を踏まざる願望の、行を破つて。

ト穿きたる足駄を脱ぎ捨て、華陽夫人へ寄り添ふ。此時、上の方へ金剛太郎、白丁高く、りの形にて先

華陽 に立ち、續いて鳥帽子、白丁の仕丁大勢、バラ／＼と出かゝり、控へある。  
すりや、御身には妾ゆる。

鳥羽 出家堅固も何のその。破戒のしるし。(ト持つたる珠数を引き切る。)

華陽 エ、。(ト思ひ入れ。)

鳥羽 「玉の緒の、解くる心も見えなくに、

華陽 われのみなどか、思ひみだる。」

鳥羽 再び任に立返れば、予は人臣の極みたる、

華陽 こよなき威勢の大臣の君。

鳥羽 只何事も心の儘。

華陽 もし天道に叶ひなば、

鳥羽 御身を磨が内子とせん。

華陽 エ。返す／＼も。

鳥羽 イザ、大館へ。(ト華陽夫人の手を取る。)

金剛 おとゞの還御。

仕丁 ハ、ア。(ト皆々平伏する。)

華陽 モシ。

ト思ひ入れ。鳥羽大臣振返り、華陽夫人を見て

鳥羽 ても、あてやかな。

トこれにて華陽夫人、装束の袖を顔へ當て、につこりと思ひ入れ。此途端にチヨンと木の頭。大臣も思ひ入れあつて

容貌ぢやなア。

ト唐樂、下り葉になり、双方引ッ張りの見得よろしく。

ひやうし

幕

### 五建目 楊枝村隠れ家の場

登場人物

鶯塚金藤次秀明。梓巫女、眞弓。伊豆の平馬。齋坊主、西念。庄屋、出来作。鹿

島三郎義連。賤の女、お磯。樵夫、和田四郎。播磨守安部泰親。妹、お露。お柳の靈魂。

那須八郎宗重。横曾根平太郎。

本舞臺三間の間、常足の二重。向う鼠壁、暖簾口、これに燈明を照らし、上方、反古張りの障子屋體、藁葺きの軒口を見せ、いつもの處に門口。こゝにお柳、お露、序幕の形にて、西念、道心坊主にて百萬

遍の音頭を取つてゐる。庄屋出来作、百姓大勢、百萬遍を練つてゐる。すべて紀州楊枝村隠れ家の體。百萬遍、てんつゝにて幕明く。

西念 南無阿彌だん佛。

皆々 南無阿彌だん佛。

西念 願以此功德(ト鉦を打ち)平等施一切、同發菩提心、往生安樂國。

りう これはく、皆さん、御苦勞でござりました。サア、お茶を一つおあがりなされませ。

皆々 イヤ、構はつしやるなく。(ト皆々よろしく住ひ)時に、今日の念佛は、何の志しでござる。

りう 今日の佛様は、兄さんや、わたしらが爲には實のとゝさんの、七回忌でござりまするわいなア。

西念 ハ、ア、爰の親仁どののは、もう七年になりますか。此やうに兄弟が寄つて、法事ばかりすると

は、仕合せな佛様だ。茶菓子まで叮嚀に、さぞ忙がしうござりませうな。

つゆ 何を致しまするも女の手で。

西念 平太郎どのはどこへござりました。

りう 只今寺参りから歸られました、奥へ往て寢てござんす。

出来 平太郎どのも忙しないゆゑ、くたびれたのも尤もでござる。

西念 此法事で急がしいのに、お柳どの、其方はなぜ手傳ひませぬ。



つゆ サア、聞いて下さんせ。姉さんは此間、山へ仕事に行かして、何やらやつさもつさがあつて、其場の事はこれぎり、内へ歸りなさんすと其日から、今まで仕つけた百姓業も、一向に出來ませぬわいなア。

西念 ハテ、そりや困つたもの。お柳どの、こなたは心持ちでもわるうござるか。

リウ イエ、わたしや何ともござりませぬ。

出来 それに又、仕つけた業の出來ぬといふは、  
皆々 どういふ譯でござるか。

リウ サア、それはな。

出来 ア、聞えた。こゝの内の小さい子を連れた御浪人。

西念 お柳どのもやもめの事なり、内談で乳繰り合ひ、始終は浪人どのお内儀になる心で、百姓仕事を つしやらぬか。

リウ なかく、其やうな譯ではござりませぬ。奥にお出でなさるゝは、わたしが爲には大切なお主様。仔細あつて御浪人。

つゆ 其上折わるい瘰癧の病ひ。早う御本復遊ばして、元の本地へ御歸參あるやう、明暮れ願うてをりますわいなア。

出来 こなた衆の爲には、大切な主筋といふ、して御浪人どのは何國の生れで、名は何といふ。

柳露 サア、其お名は。

出来 言はれませぬか。其名は滅多に言はれまい。

西念 包むに於ては、いよくそれと。

出来 目を附け置いた御詮議の、那須の八郎宗重、捕へて出せば褒美の金。

西念 必ずぬかるな。

皆々 合點だ。

ト暖簾口へ行きにかゝる。お露支へるを振切り、奥へ踏み込むと、奥より横曾根平太郎、木綿やつし百姓の形にて、出來作が手先きを捕へ、ツカ〜と出てくる。お柳、お露見て

柳露 ヤア、お前は兄さん。

皆々 平太郎どの。

こつけ詮議呼ばはり、いかにも御詮議者を隠まつた、ハテ、何が怖くて隠すものか。奥にござるはわしが御主人、花も實もある味のよい、しかも盛りで秋のなす、八郎様を隠まつた。今日の遊茶の口取りに、一切れ位るは振舞ひませう。ゆるりとそれで、賞翫させえ。

ト出来作を見事に投げて、思ひ入れ。

皆々 そんならいよく、あの浪人。

平太 何ぞ用なら、おれが聞かうか。

出来 ナニサ、それには及ばぬが、一寸お近附きにならうと思つて。

平太 そんなら晩に、ゆるりとござれ。

皆々 とはいふもの。

平太 どなたもようござりました。

ト皆々を門口へ突き出し、戸をピツシヤリ。西念見て

西念 或る程、平太郎どの、以前は侍ひと聞きました、

皆々 萬事の事に、あつばれ。

出来 皆の衆、今日の佛はよい子持ち。惣領は平太郎どの、其妹がお柳どの、末の妹がお露坊。此三人と掛けて、化粧道具と解く。

皆々 して、其心は。

出来 ハテ、よいきやうだいぢやといふ事サ。

皆々 何を言はッしやる。サア、ござりませ。

トてんつゝになり、念佛太鼓にて五人とも花道へかゝる。右の鳴り物にて向うより、梓巫女眞弓、口寄せの拵へにて、竹の笠を冠り、風呂敷包みを持ち、お磯、田舎娘の形にて、出て来り、皆々と行き合ひこれは新田のお磯女郎、どこへござつた。

いそ 庄屋様初めどなたも、お揃ひでござりますなア。

西念 わしも當月は、精霊會の佛まつりゆゑ、

いちこのわたしも勸進しながら参りましたら、此お方がおつしやるには、當村の平太郎様とやらいふお内に、法事がござりますと聞きましたゆゑ、連れ立つて参りました。

出来 それは幸ひ、今も今とて佛話して、長座しました。

眞弓 左様なら、もうお歸りでござりまするか。

皆々 こなた衆も早くござつて

眞弓 回向して参りませう。

ト皆々拾ぜりふあつて、五人は向うへ入る。眞弓とお磯は舞臺へ来り

いそ おゆるしなされませ。今日はさぞお取込みでござりませう。

柳露 これはく、新田のお磯さん、

平太 ようござりました。あの女中様は

真弓 ハイ、私は此前、村方へ折々参りました、梓の巫女でござります。

りう それは幸ひ、今日はこちの内に、志しの事もあれば、こなたへお入りなされませ。

真弓 左様なら御免なされませ。(ト兩人内へ入り、思ひ入れ。)

平太 妹、お茶でも上げぬか。

いそ 必ずお構ひなされますな。モシ、平太郎様え、今日の法事はお前の親御様の、七回忌の事なれば、此巫女さんがござんしたこそ幸ひ、今日の佛様を、口に寄せてはどうでござります。

りう 成る程、日頃から戀しと思ふ、とゝさんの事なれば、末々の便りも聞きたく、わたしが無事な事もお聞かせ申したら

つゆ 此上の孝行は、ござんすまいわいなア。

真弓 イヤモウ、今日の佛様の事は、上方でも話しに聞いてをりました。此平太郎様とやらの親御様、わたしも今ではのがれぬ者、御法事を聞いて、わざ／＼参りましたわいなア。

平太 イカサマ、一家一門此やうに揃つて、親の追善をするといふも、全く大江戸八百八町のお取立て

ゆゑの事。かやうな有り難い事はない……それにつけても、一寸いづれも様へ。  
トこれにて皆々座を直し、尾上松緑七回忌追善口上、よろしくあつて

いそ ヤレ／＼、残暑の時分、御苦勞でござりました。サア、お茶を一口。

りう ほんにマア、これでは佛様も、大抵な喜びではござんすまい。喜び次手に、梓の巫女さんを頼んで、いかさま口寄せもようござんせう。

平太 併しながら、親仁を口に寄せたら、さぞおれを不器用者と叱るであらう。こりやアよしにしませう。

つゆ たとへ役に立たすと叱らしやんしても、矢ッ張りお前やわたしどもの爲ぢやわいなア。

平太 成る程、それもさうかえ。併しながら、梓にかゝる佛様の

真弓 座の下がると申すはひがごと。血筋のお方が御回向なされ、手向けの水が、何より御功德でござりまする。

いそ 其やうな事を聞いたゆゑ、お前を連れて参りました。わしも後でこゝのお内を借り、かゝさんを口寄せませう。

平太 そんならいちこさん。御苦勞ながらお頼み申しまする。

眞弓

ハイ〜畏りました。(トよき處へ住ひ、風呂敷を取出す。)

リウ

コレ〜妹、末の子は親の不便が深いとあれば、其方水向けに。

つゆ

そんならわたしが……アイ〜、合點でござんす。

ト有合ふ茶碗へ水を汲み、臺へ載せ、佛壇の檜の葉を取つて水を向ける。此うち眞弓は包みの中より、梓弓を取出し、小さき棒にて吊して、目を閉ぢ、こなしあつて

眞弓

天清淨、地清淨、内外清淨六根清淨、天の社、地の神、家内には井の神、庭の神、別して竈の神、

其外日本六十餘州、大小の神祇八百萬神十善四庄の御神、しろしめ給へと申す。梓の巫女の寄せ口に、マ寄りくるわ〜。露どのの手向けの水、血筋の縁とて忝い。よくこそ梓にかけて下された。血筋の妹が手向けの水、禮をおつしやるには及びませぬ。南無阿彌陀佛々々々々々々。

平太

モシ、親仁様、お懐かしうござります。此世にござる時は、ろく〜孝行も盡しませぬ。只今までの不孝の罪、御免なされて下さりませ。

いそ

優しい兄弟衆の其お詞、他人のわたしでさへ涙がこぼれるもの、親御様はさぞ嬉しうござんせうわいな。

つゆ

此後は兄さんはじめわたしらも、命日忌日は弔ひます。後の事をお案じなされますなえ。

四人

南無阿彌陀佛々々々々々々。

眞弓

血筋と思へばこそ、露どの、其やうに言うてたもるが、言はれて今は懐かしい。戀しき人に數の枕はかはさねど、千年も (ト眼を閉ぢて現のやうになる。お柳へ乗り移る思ひ入れ。)

リウ

男女と形は變れども、親子となればこれ妹、手向けの梓を借り、寄りくる家は親にもあらず、露の兄弟。

三人

ヤ、なんと。

トお柳を見て思ひ入れ。薄ドロ〜、寒鳥、一つ鉦の入りたる凄き合ひ方になり、ポツと燧酌火燃える。皆々うつとりとなり、お柳はスツクと立つてこなし。此時平太郎現のやうなる思ひ入れにて、お柳を見て思ひ入れ。

平太

合點の行かぬお柳の素振り。ハ、ア聞えた。日頃から懐かしいと思ふ親仁様、未來の便りを聞いたゆゑ、嬉しいと思つての事か。そりやアおぬしばかりでなく、おれとても同じ事。あまり其やうに思つて、煩つてくりやんなよ。

リウ

流石は肉身分けし兄の詞、知らぬ事とて妹を、憐れみたまふ御心底、あまり此身に

平太

ヤ。

リウ

猶此上もお主へ忠義怠りなく、紛失なしたる御鏡の在所を尋ね、御主人もろとも歸參なし、家名相續なしたまへ。

平太 いふにや及ぶ。忠孝に私しなく、心は千々に砕けども、失せさせ給ひし八手の御鏡、今に行くへ  
知れず、主人をはじめ我れとても、日蔭にひそむ今の窮迫。

リウ 其儀は少しも氣遣ひあるな。今日思はずも逆徒のやから、此家へ来る事あるべし。これによつて  
詮議せば、寶の手かゝり疑ひなし。

平太 すりや此處へ、御鏡所持なす者來るとや。エ、忝い。主人の御運の開く瑞相。さりながら、心得  
ざる妹が一言、通力自在もあらずして、何故それを知つたるぞ。

リウ 愚かな事をのたまふものかな。われは此世の者ならず。

平太 ヤ、なんと。

リウ 梓にかけられ、今更語るも恥かしながら、恐れ多い、御主人那須の八郎様、二世と語らふ女夫坂  
樵夫が爲に思はずも、此世を去りし、わたしや妹の、(ト言ひさして、思ひ入れ。)

平太 ヤア、最前から合點ゆかざるお柳の有様。狐狸の見入れる物の怪か。何にもせよ、心を付けよ。

ト水向けの茶碗を打ち返す。これにてドロ／＼打ち上げる。燒酌火もバツと消える。皆々心付きホツと  
思ひ入れ。平太郎こなしあつて

平太 お柳、心が附いたか。

リウ モシ、兄さん、わたしやどうぞ致しましたかえ。

平太 何だか知らねえが、おれも夢現のやうに覺えたが、今おぬしは女夫坂で、樵夫の爲に殺されたと  
嘆言のやうに

リウ エ。わたしの其事を……兄さんとした事が、其やうな事を言うてよいものかいなア。

平太 それでも今、現のやうに

リウ アレ、又かいな。縁起のわるい、鶴龜々々。(ト思ひ入れ) 成る程、お前方が言はしやんす通り、  
わたしが今手向けすると其儘、われ知らず氣がうつとり。

眞弓 施主方のお前さん方は、御尤もでございますが、わたしは商賣でありながら、いつの間やらツイ  
とろ／＼。

つゆ お前がとろ／＼としなさんしたのは、よその悪性男が、此巫女さんの心意氣を聞かうため、お前  
の生き口を寄せたのかも知れぬわいな。

リウ ほんに、ソレ／＼、まだ年若な女中さん、どこぞにお楽しみがあらうも知れぬ。巫女さんの笠の  
直しやうで、色氣のあると、無いとは、知れるとの事。

トお露お磯、眞弓の笠を見て

つゆ モシ／＼、此笠が仰向けてござんすぞえ。

眞弓 イヤこれは面目次第もござりませぬ。

平太 そいつはおれも気が悪くなつたわえ。道理こそ年若な巫女ゆゑ。兎角色の世の中だなア。今も今とて妹が、主人と枕を交せしと、問はず語りにツイうつかり……サア、うつかりせずと巫女どのに、お初穂でも上げぬか。

真弓 なんの、それには及びませぬ。

ト思ひ入れ。此時、向うより、百姓一人走り出て來り

百姓 平太郎どの、内にか。今こゝへ鶯塚金藤次様がおいでなさる。お座敷掃除して、待つてござれござれ。

リウ 何と言はしやんす。金藤次づらが此ところへ

平太 くるも一つは佛の導き。

リウ 寶證議の、よき手が、り。

平太 お露は奥で何かの用意。二人の女中は暫くこゝを。

真磯 かしこまりました。

柳露 左様なら、皆さん。

真磯 これはお報謝になりました。

ト念佛太鼓、てんつゝになり、真弓とお磯に百姓附いて向うへ入る。お露は奥へ入る。平太郎はお柳に

騒ぎ、そこら方附けてゐる。時の鐘、誂への合ひ方になり、向うより以前の出来作を先きに、鶯塚金藤次、薄肉、刺り下げ鬘、上下衣裳大小。あとより伊豆の平馬、絆纏股引き大小の捕り手四人を召連れ、網乗り物一挺、これを警護して出で來り

出来 恐れながら申し上げます。あれに見えまするが、横曾根平太郎の住家にござりまする。

金藤 すりや、あれなる茅屋が、平太郎の隠れ家とな。彼れら主従は元來京家の侍ひ。心柄とはいひながら、兄泰親もろとも天下の囚人。出口々々をさし固め、取逃さぬやう用意致せ。

平馬 其儀は少しもお氣遣ひなされますな。泰親めは斯くの如く網乗り物。とても叶はぬ網の魚。併し那須の八郎主従は

金藤 風をくらふも計られず。片時も早く案内致せ。

ト右の鳴り物にて舞臺に來り、駕をよき處へ直し

出来 平太郎どの、都よりお役人様がお出でなされた。

平太 先刻御案内がござりましたゆゑ、お待ち申してをりました。むさくろしうとも、まづくあれへお通り下さりませう。

金藤 某は大内記録所の使者。罷り通る。

ト上座へ通る。お柳見て

リウ ほんにマア、いつの間(ま)にやら金藤次様、形(かたち)も立派なお侍(さむらい)ひ。さりながら、相(あひ)も變らず罷(か)むしやむしやと、あのマア憎(にく)い顔(かほ)わいなア。

平太 これはしたり、そりや何を申(ま)す。金藤次様は記録所(きこくじょ)よりのお使者(しやせ)、殊(こと)には京家(きやうけ)のお歴々(れきれき)、滅多(めつた)な事を言(い)ふまいぞ。して今日(けふ)のお使者(しやせ)の趣(おも)き、どのやうな事(こと)でござります。

金藤 黙(もく)りをらう。わいらに申(ま)し聞(き)したとて、馬(うま)の耳(みみ)に風(かぜ)とやら、下司(げし)下郎(げらう)の知(し)つた事(こと)ではない。すつ込んでをらう。併(ひ)しながら言(い)うて聞(き)せたいは、コレお柳(やなぎ)、おぬしが都(みやこ)にゐるうちから、いろく言(い)へど、身共(みども)が申(ま)す事(こと)、一向(いっこう)に聞(き)き入れぬが、今主(いまぬし)從此處(こゝ)と聞(き)いたゆゑ、そもじの顔(かほ)が見(み)たさに、今日(けふ)の使者(しやせ)を申(ま)し受(う)けて、わざく參(まゐ)つた心中(こころ)男(おとこ)、まんざら憎(にく)うもあるまいがナ。是非(是非)とも今日(けふ)は身共(みども)が返(かへ)事を(こと)を

リウ 成(な)る程(ほど)、其思(そのし)し召(め)しは有難(ありがた)う存(ぞん)じます、どうも其事(こと)ばりは

金藤 成(な)らぬといふは、言(い)ひ交(か)した男(おとこ)へ立(た)たぬといふのか。

リウ 言(い)ひ交(か)した男(おとこ)とはえ。

金藤 知(し)るまいと思(おも)ふか。現在(いま)主人(しゆじん)の那須(なす)八郎(はちらう)と、不義(ふぎ)ひろいであらうがな。

リウ モシ、滅多(めつた)な事を(こと)を。

金藤 隠(かく)しても隠(かく)されぬ。女好き(おんなずき)なる那須(なす)の八郎(はちらう)、八手(やて)の御鏡(みかぐさ)宿直(しゆくぢく)の折(せ)から、田熊(たぐま)法眼(ほふがん)が娘(むすめ)、藻女(もづめ)と忍(しの)ぶ

び合(あ)ひ、乳繰(ちちく)り合(あ)つてゐるうちに、預(よ)りの御鏡(みかぐさ)紛失(まがひ)失(し) (脱文(だつぶん)?) しぶといお柳(やなぎ)め。使者(しやせ)の様子(やまじゆ)を聞(き)いたなら、其(その)一言(いちごん)で今(いま)に後悔(こうかい)。よし、此上(こゝ)は厄病(やくびやう)神(かみ)で敵(かたみ)とせう。して、那須(なす)の八郎(はちらう)は

平太 主人(しゆじん)八郎(はちらう)は、此節(このせう)瘧(さつ)りの病(びやう)ひにて、打臥(うちふし)しをりますれば、たとへ大臣(おとぎ)の使(つか)ひ、大命(おほいのち)たりとも、お受(う)け致(いた)すは思(おも)ひもよらず。

金藤 イ、ヤ、其手(そのて)は食(く)はぬ。假病(かりびやう)をかまへ、期(き)を延(の)すとは卑怯(ひしやく)な八郎(はちらう)。者共(ものども)、踏(ふ)んごんで、引摺(ひきず)り出(で)せ。

皆々 心(こころ)得(と)りました。(ト立ちかゝる)

平太 モシ、滅多(めつた)な事を(こと)を

皆々 何を此奴(こいつ)が

ト平馬(へいば)出来(でき)作(さく)捕(と)り手(て)四人(にん)人、平太(へい)郎(らう)を突(つ)き退(ひ)け、上手(かみて)の障子(しやうじ)屋體(やたい)へかゝる。物音(ものね)して、皆々(みな)見事(みごと)に反(かへ)つて落(お)る。途端(とたん)に障子(しやうじ)引(ひ)抜(ぬ)くと、内(うち)に那須(なす)の八郎(はちらう)、浪人(なみのり)の拵(こしら)へ、綠丸(ろくまる)を圍(かこ)ひ、刀(やいば)をかまへ、キツと思(おも)ひ入(い)れ。

皆々 那須(なす)の八郎(はちらう)、手向(てむか)ひか。

八郎 浪人(なみのり)しても那須(なす)の八郎(はちらう)、これなる一(ひと)間は城廓(じやうかく)同前(どうぜん)、慮外(りがい)致(いた)さば、手(て)は見(み)せぬぞ。

金藤 ヤア、緩急(くわんきつ)なる其(その)一言(いちごん)、大館(おほやかた)より内意(うちい)を蒙(かぶ)むるわれくへ、敵對(てきたい)なさば、違命(ちやうめい)の罪(つみ)だぞ。

八郎 全く(まこと)以(も)て大臣(おとぎ)へ對(たい)し、刃向(やいばむか)ふ所存(しよそん)は無(な)けれども、理不盡(りふじん)なる各々(それぞれ)の計(はかり)らひ、何故(なにが)あつて此(こ)狼藉(らうじやく)。

出来 ヤア、とほけまい御浪人。科は其身に覚えがある筈。

金藤 大臣の仰せ、一通り申し聞さん其前に、汝等に見せるものがある。ソレ、囚人を引出せ。

平馬 畏りました……科人、出ませい。

ト時の鐘、合ひ方になり、綱乗り物の中より、安部の泰親、物爰刺貫、カ括けの形、小手を免したる繩  
付きにて出る。此うち捕り手は下手へ入る。平馬は泰親をよき處へ引搦る  
下にをらう。

ト八郎平太郎、お柳、泰親を見て

八郎 ヤア、あなたは兄者人泰親様。

平柳 思ひがけない此繩目。

泰親 方々の不審尤もなれど、某し忠信に私しなく、日毎の参内怠らずと雖も、お側には佞人あつて、  
罪無きわれを斯く仕合せ。

平太 腑甲斐なき其お心、潔白なる事ならば

八郎 何故奏聞なされませぬ。

金藤 其詫び事の奏聞も、ならぬ證據は泰親も、わが身を初め此繩目。  
八郎 して、其仔細は。

( 60 )

金藤

此節大臣の御惱み、日毎に重らせらるゝゆゑ、御祈りに用ゆべき八手の御鏡は、弟八郎が紛失させたる大悪人。まつた兄の泰親は、鳥羽の大臣の御寵愛ありし、玉藻の前を、畜生の相ありと上聞せしより、以ての外のお怒りにて、今此態。八郎とてもまッ其如く、御鏡の行くへ知れねば、泰親もろとも命の瀬戸。

( 61 )

りう 思ひがけなき御兄弟方の御難儀。モシ、どうぞ仕様は、ござりませぬかいなア。

泰親 其しが家は、代々陰陽師の頭たるゆゑ、萬事の善悪、上聞に及ぶと雖も、一つとして僥忽なかりしが、合點の行かぬ此度のお怒り。これといふのも大臣には、佛門に入り給ひ、諸國行脚の折から、唐土より熊野浦へ着岸せし、女を供して歸らせられ、玉藻の前といふ名を下され、日夜の御寵愛淺からず、淫酒に耽り、俄かに御心猛々しくならせられしも、御傍らに彼の婦人あるゆゑ。これを思へば貴賤に限らず、慎しむべきは色情の道。(ト思はずお柳の顔を見て)ヤ、これなるお柳が人相は、人界ならぬ異形の有様。

ト思ひ入れ。お柳これを聞き、ハツと顔を背け

りう アモシ、滅多な事を。

泰親 サア、言ふに言はれぬ浮き世の習ひ。陰陽師身の上知らずと、斯く成り果てしわれ〜兄弟。  
平太 いつ會稽の春にあひ、お家に花の咲く事やら、



八郎 知れざる鏡の行くへといひ

金藤 われもお柳が色香に迷ひ、べんくんだりも大臣へ不忠。

泰親 何と申す。弟八郎はこれなるお柳と不義致し、それゆゑ寶詮議も怠りしとや。

八郎 なかく以て私共は。

出来 イヤ、さうは言はせねえ。一つ村に居る此庄屋が、様子は残らず知り抜いた。二人が不義は、おれが證人。

泰親 すりや、其方は不義に心を蕩かされ、寶詮議を怠りて、もしや外から御鏡差上げなば、君への申し譯は如何致すぞ。

八郎 サ、それは。

泰親 但し言ひ譯あるか。

八郎 サ、それは。

トつかへる。泰親は八郎が襟髪をとらへ

泰親 チエ、汝はなア。正しく御鏡紛失も、大館の侍女たる藻女と、不義ゆる其身の越度に落ち、家來の妹と不義を働く人非人め。それも尤も、其方はじめ此小兒も、戌の年月日時揃ひし生れ。ここな畜生め。

金藤 すりや、八郎親子は戌の年度揃ひしとや。ハテナア。

泰親 いづれもの手前、面目もござらぬ。此上は、身が手に掛けて。

ト八郎の刀を取つて立ちかゝる。平太郎、お柳とめて

平太 アイヤ、憚りながら御主人八郎様に、不義はござりませぬぞ。

泰親 ヤ、何と

平太 田熊の息女藻女様の事は、若氣の至りと申せども、申さば戀ひにやもめの事。御鏡紛失致せしゆゑ、子までなしたる仲なれど、あかぬ別れも上への恐れ。其上、相手の藻女様、此程行くへ知れざる沙汰。さすればこれを咎むに足らず。まった妹のお柳の事は、現在兄の平太郎、縁者の證據と申されんが、鏡にかけて不義でござらぬ。

金藤 コリヤ平太郎、これほど知れた不義者を。

平太 其不義者こそ、外にござる。

金藤 ナニ、不義者が外にある。シテ、其不義者は、何國の、誰れだ。

平太 外でもござらぬ、御自分様。

金藤 ヤ。

平太 證據は即ちさいつ頃、お柳が都に在りし時、懸想して、送つたる此短冊。

「風になびく、其枝にこそ大鳥の

せめて一夜は、峙かりなん」。

風に靡くは柳の枝、柳は即ち妹お柳、峙かりなん大鳥は、即ち鷲塚金藤次様。流石京家のお侍ひ、顔に似合はぬ手爾波の戀ひ歌。押付け戀慕の此短冊。それが主人の不義でない、慥かな證據。これでも御批判ござるかな。

金藤 サア、それは、

兩人 サア〜〜、

平太 こゝが即ち思案の外。左様なものではござるまいか。

金藤 よいワ。不義の批判は外道ゆゑ、此儘にも致さうが、那須の八郎は御鏡を失ふ大罪人。

泰親 罪もいや増す弟八郎、餘人の手にかゝらんより、いつそ身共が。(ト思ひ入れ)

金藤 待たつせえ、泰親。那須の八郎は天下の科人、こなたの自由にはなりませんまい。

泰親 ぢやと申して。

平馬 ハテ、成敗致すは金藤次様。滅多な事をおつしやるな。

金藤 囚人を生かさうと、殺さうと、身共の心一つ。外の奴らが指でもさゝば、違命の罪だぞ。成敗致さぬ其先きに、ドレ、しやツ面を。(ト八郎を引付け) 成る程、なま白けた面骨だ。道理こそそこ

( 64 )

らあたりのめいた犬が、びろ〜するわえ。今聞けば、汝等親子は戊の年度揃ひしとの事。道理こそ、寶證議の心も無く、尻尾を振つてめいた犬に、じやくらする小胸のわるさ。さかりの附いた、アノこゝな、畜生侍ひめ。

ト扇にて打ち据ゑる。八郎無念の思ひ入れ。

八郎 此身に越度あるゆゑに、チツとこらえてゐればこそ

泰親 あまりなる此打擲。

金藤 何がなんと。

八泰 おのれは、チエ、。

ト立ちかゝるを、平太郎、兩人を押へて

平太 コレ、必ずともに。

八泰 ぢやと申して。

平太 ハテ、あなたは御存じあるまいが、最前様の折から不思議に妹、現のうちに、寶證議の手がかりに、此家へ來る逆意の輩

皆々 なんと。

平太 御鏡首尾よう取戻し、御歸參になるそれまでは、大切な御身ではござりませぬか。短慮は功をな

服公園御前藻玉

さすの譬へ。ヂツと辛抱なされませ。(ト思ひ入れ。金藤次此うちギツクリの思ひ入れ。)

八郎 何か様子は知らねども、詮議の手が、り、あると申せば。

金藤 ヤア、なまぬるい詮議呼はり。それまでべんく、だらりと待たれるものか。いつそ此場で泰親兄弟。

泰親 仰せにや及ぶべき。斯くなる上はかねての覺悟。

八郎 人手にかゝり死なんより、いつその事に。(ト兩人とも腹を切らうとする。)

平柳 モシ、必ずともに。

トとめるを、金藤次兩人を突き退け

金藤 流石は八郎、よい覺悟。身共が介錯。

ト刀を振り上げる。お柳は金藤次に縋り

りう モシ、どうぞ暫しの御猶豫を。

金藤 頼みとあれば、聞き届けてくれうが、そんなら身共が頼みも叶へて。

りう アレしつこい。其やうな事は。

金藤 知らぬとあれば、二人が首を。

ト思ひ入れ。平太郎見て

平太 アイヤ、憚りながら金藤次様、其戀ひ私しが、お取持ち致しませう。

金藤 何と申す。すりや、其方が此戀ひを

平太 お取持ち致し、あなたの望みを叶へませう。

りう モシ兄さん、滅多な事を。

平太 ハテ、おぬしが心たつた一つで、お二人様の御難儀も、詮議の日延べも妹が胸。立てるばかりが貞女ではない。昔しよりも例しある、貞女を捨て、貞女を立てる。ナ、サア、この道理を聞き分けて、金藤次様へ色よい返事を。合點がいたか。

ト思ひ入れにて呑みこませる。お柳呑みこみ

りう 成る程、お前の言はしやんす通り、貞女を破つて貞女を立てる……いかに、あなたのお心に随ひませう。

金藤 ヤア、そんなら身共へ

りう 色よい返事を致さずとも、一つの功を立てませう。

平太 そんならおぬしは金藤次様へ、色よい返事はよそにして、一つの功を立てるとは、そりや何事。

金藤 上へ對して一つの功より、身共は矢ッ張りおぬしが色香を。

泰親 すりや、お使者には、大臣の事はおかまひなく、彼れが色香をはるくと、これまで聞きにお來

やつたか。

金藤 サ、それは。

泰親 然らば女が申せし詞、何故貴殿は取上げ召れぬ。

金藤 サ、それは。

八郎 御返事が承りたい。

金藤 そんならお柳が詞を、聞き届けてくれうが、一つの功を立てるとは。

リウ 此程先の大臣様の、日毎に募る御悩み。其病根を断ち切らば、それを一つの功となし、寶の詮議、

日延べの願ひを。

八郎 心得ざるお柳が一言。大臣の御悩みは、典藥が秘術を盡し、諸寺諸山にても其祈り

泰親 それを何ぞや、女の身で、軽々しう平癒とは。

金藤 餘人は格別、此金藤次は呑みこめぬ。

平馬 イカサマ、これは御尤も。女心の淺はかに、頭痛の病ひと聞いたゆゑ、鷲の看板の粉藥か、丸藥

か、但し又

出来 上下揉んで腹四文、飛んだ所へ揉み下ける、女按摩の提重(?)かも知れませぬ。

リウ 成る程、其やうにさみなさるも御尤も。さりながら、御悩平癒はわたしが胸に。ハテ、盗人の晝

寝も、心當てのあつての事。何はともあれ私しに

金藤 申し附けてもくれうが、して、御平癒なき時は

リウ お二人様は元より、私しが命も差上げませう。

金藤 面白い。詞番ひし上からは、偽りならざる其爲に、兄平太郎は暫時人質。

八柳 ヤ、何と。

平太 コレ、妹、おれが人質に行くは大事ないが、先の大い臣の御悩みを安受合ひにして、もし癒ら

ぬ時は、御主人はいふに及ばず、おぬしもおれも、命の切端。

リウ 成る程、お前までが其やうに、お案じなざるは尤もなれど、其功といふは。コレ。

ト囁く。平太郎思ひ入れあつて

平太 ヤ、すりや、あの柳の

リウ アモシ、(ト思ひ入れ)

平太 さういふ事なら聞き違ひもあるまい。そんなら今より私しは

平馬 旅宿に伴ひ、きつと糺明。

八郎 すりや其方が

泰親 平癒ござらば早速に

金藤 人質返して詮議の日延へを。

泰親 もし偽る其時は

平太 重なる科ゆる此兄も

出来 三人四人の命が寂滅。

リウ わたしが身にもかゝはるゆる

八郎 見事平癒を。

リウ いふにや及ぶ。

金藤 然らば奥にて、泰親もろとも。

泰親 左様ござらば、金藤次どの、

リウ 暫しが間御休息。

八郎 御兩所様を案内致せ。

平金 とはいへ、お柳を。

ト平太郎、門口へ出ようとすると、八郎、「コレ」と戸を締める。金藤次はお柳へ立ちかゝる。泰親隔てる。皆々思ひ入れ。チャン、と唄になり、平太郎、平馬、出来作は向うへ、金藤次、泰親、お柳は縁丸の手を引き、奥へ入る。八郎残り、あと合ひ方になり、こなしあつて

八郎

世の衰への端なるや、大館には佞人多く、忠臣は枯木の如く、百夜に(？)空しき其上に、大臣には御惱の折から、兄泰親どの御祈念に、無くて叶はぬ八手の御鏡、某宿直の折から紛夫ゆる、今の浪人。これにつけても妻藻女、子までなしたる仲なりしが、父法眼に勘當うけ、家出して行くへ知れず。便り少なき此身の上。いかなる宿世の因縁やら、われ／＼親子は戌の年揃ひし生れ。最前兄泰親どの某しを犬なりとの悪口、身にしみわたりし御教訓。何等寶詮議と思へども、折悪しき瘡の病ひ。よくも武運に盡きたるか。こりや一思案せにやならぬわえ。

ト手を組み、思案の思ひ入れ。時の鐘、合ひ方になり、向うより和田四郎、前幕の形にて斧を持ち、跡より出来作も斧を持ち、附いて出て来り、兩人花道にて小聲になり

出来

和田四郎どの、彼の代物は。

和田

金藤次どのより預かつた此御鏡、お柳めが知つたゆゑ、打ち殺したと思ひの外、息吹き返して……後日の邪魔ゆる人知れず、コレ。

ト囁く。出来作呑みこみ

出来

そんなら彼奴を。

和田

コレ。

ト兩人思ひ入れあつて、舞臺へ来て、下の方よりスツと入り、窺ふ。八郎これを知らず、始終思ひ入れ

あつて

八郎 最前お柳が一つの功を立てんと言ひしは、此場を延ばす一時のがれ。此上は金藤次を討つて捨て  
兄泰親どのを伴ひ、此處を立退かうか。イヤ、それでは後日に兄者人、いよく重なる御身の  
罪科。と言つて失つたる御鏡の、手が、り無ければ、生きて詮なき某しが身の上。いつその事に  
腹切つて、申し譯とは思へども、此儘死なば、後に残りし妻や子が、路頭に迷ふを見るやうで：  
……と思ふまい。死すべき時に死なざれば、死にまさる恥の上塗り、さうぢや、南無阿彌陀  
佛。

ト腹を切らうとする。よき時分よりお柳出かゝりゐて、此時、つかくと走り寄つて

リウ モシ、待たつしやれ。こりや何故の御切腹でござりまする。

八郎 何故とは、所詮傾むく我が運命、それぢやによつて。

リウ 成る程、忠義一圖のお心から、其やうに思はしやんすは尤もながら、時節を待つて家名の花、今  
日開くお前の御運。

八郎 ヤ、何と。

リウ 最前金藤次づらへ、先の大<sup>おと</sup>臣の御<sup>かん</sup>惱み、平癒致させんと受合ひしは、お前のお命助けたい、わたし  
が心底。

八郎 其志しは嬉しけれど、良薬祈念に怠りなき、大臣の御<sup>かん</sup>惱みを平癒させんと、其<sup>かた</sup>方づれが受合ひし  
ゆるゑ、邪智深き金藤次、平太郎を人質に取つたる上、もし此事成就せざる時は、忠臣たる家來を  
敵<sup>かたき</sup>の手へ渡し、一命終らば無益の犬死。

リウ 成る程、賤しいわたしゆるゑ、其やうに思はしやんすも御尤も。さりながら、此程大臣様の御<sup>かん</sup>惱は  
同國<sup>のくに</sup>女<sup>め</sup>坂<sup>さか</sup>の柳の<sup>やなぎ</sup>大<sup>おほ</sup>木、其<sup>その</sup>幹<sup>み</sup>の下<sup>もと</sup>に一つの<sup>ひと</sup>骨<sup>ほね</sup>體、これは大臣の現世のしるし、風吹く度<sup>たび</sup>に柳の動  
くは、即ち頭痛の御<sup>かん</sup>惱。其<sup>その</sup>柳<sup>やなぎ</sup>さへ切る時は、立ち處に御<sup>かん</sup>惱平癒は疑ひなし。

八郎 ハテ、奇<sup>あま</sup>異なる事の物語り。如何<sup>いか</sup>致して其<sup>その</sup>方<sup>かた</sup>は存<sup>ぞん</sup>じをるぞ。

リウ サア、それも言ふに言はれぬ、此身の俗性。

八郎 ヤ。

リウ イエ、俗物語りに常々から、過ぎ行かしやんした、と、さんの話し。

八郎 イカサマ、處に久しき老人の物語り、殊には年回の折なれば、われを導く前表ならん。

リウ 其お心なら少つとも早く、其<sup>その</sup>柳<sup>やなぎ</sup>を切つてお前のお手柄に、御<sup>かん</sup>惱平癒、それを功に詮議の日延べ。

八郎 然らば、片<sup>へん</sup>時<sup>じ</sup>も早<sup>はや</sup>う其<sup>その</sup>柳<sup>やなぎ</sup>を……チエ、心は矢竹に逸れども、折悪しく瘡<sup>かさ</sup>は頻りにさしくる熱  
氣。(ト瘡の病ひに苦しむ思ひ入れ。)

リウ エ、臍<sup>へし</sup>甲<sup>か</sup>斐<sup>ひ</sup>なき其お心、忠義の爲と心を勵まし

八郎 いふにや及ぶ、大臣の御爲。これより直ぐさま、柳が下へ。

出来 ト行かうとする。此時、出来作、斧を持つて窺ひ寄り

八郎、うぬを。

八郎 ト斧にて打つてかゝる。八郎よるめきながら、ちよつと立廻り、斧をひつたくり、出来作を當て、幸ひ手に入る斧を以て、女夫坂なる柳の根元へ。(トつかく行きにかゝる。)

リウ モシ。

八郎 ヤ。

ト振返る。お柳ちよつと氣を變へ

リウ めでたい門出の、家名に花の

八郎 盛りはやがて、(ト瘧に慄へる)。

リウ ヤコレ、わが夫。

八郎 女房ども。

リウ 早うござんせ。

八郎 合點だ。

ト時の鐘にて向うへよるめきながら入る。お柳見送つて、ホロリとして

リウ モシコレ、我が夫、其柳を切つて捨てれば、先の大<sup>おとよ</sup>大臣の御惱みは平癒なれど、此身はこれが一生の

ト思ひ入れ。此時奥より金藤次と和田四郎窺ひ出て

金藤 そんなら女夫坂の柳を切れば、元の大<sup>おとよ</sup>大臣の御惱みは平癒とや。先きへ仕掛けて、おれが手柄に

リウ イヤ、お前をやつては

ト金藤次をさへる。和田四郎は自分の斧を金藤次に渡し、お柳を突き退け

和田 此斧を以て、柳を早く

金藤 合點だ。

ト斧を持つて行きにかゝる。お柳やるまいと立廻りのはずみ、和田四郎以前の鏡を落す。お柳取上げ見

リウ こりやコレ、御鏡。

金藤 これを。

ト山嵐し、時の鐘になり、金藤次は件の鏡を引つたくり、お柳を突き退け、一さんに向うへ入る。お柳は跡を追ひかけ行かうとする。此うち出来作心付き、お柳にかゝる。お柳和田四郎出来作三人の立廻りのうち、奥より泰親は以前の形、繩を解き、大小にて、お露も付き出て來り、此立廻りの中へ入る。泰親は出来作を見事に投げる。又起き返り來るを、お露は百萬遍の珠數を出来作が首へ引掛けとめる。お

柳、和田四郎立廻りながら、花道まで行つて、舞臺を見て

リウ  
これは。

つゆ  
こゝかまはずと

泰親  
片時も早う。

リウ  
さうぢや。

和田  
汝をやつちやア

ト兩人立廻りながら向うへ入る。此うちに前の捕り手一人出て、泰親にかゝるを見事に切り倒し、キツと思ひ入れ。皆々此仕組みよろしく

幕引附けると、山嵐し、時の鐘にてツナギ、すぐに引返し。

幕

本舞臺、向う淺黄幕。所々に草土手、萩、薄、秋草のあしらひ、真中に柳の大木、同じく吊り枝、これにいろく好みあり、よき處に草井戸、縄釣瓶を置き、誂への通り。こゝに金藤次、前幕の形、斧を持ち、立ちかゝりあるを、八郎も斧を持ち、これを留めてある見得。すべて紀州女夫坂、柳の下の體。禪のツトメにて幕明く。

金藤  
瘡ぶるひの那須の八郎、何故身共をさゝへるのだ。

八郎  
大臣の御惱平癒は、これなる柳の根を断つて、御全快を功となし、寶の日延べを願ふのだワ。

金藤  
小癩な事を。手柄は仕勝ち、柳はおれが

八郎  
女房が心を盡せし柳、やはか汝に

金藤  
何をおのれが。

ト斧にて打つてかゝる。八郎、病中ゆゑにかよはき立廻りのうち、金藤次の懷中より前幕の御鏡落ちる。

八郎取上げ見て

八郎  
ヤ、こりやコレ、尋ねる御鏡。

金藤  
南無三、それを。

ト兩人争ふはづみに、件の鏡を柳の枝へ打ち上げる。

八郎  
ヤ、大切なる御鏡は、柳の枝へ。

金藤  
身共が取り得て

ト又禪のツトメにて、兩人立廻りのうち、向うよりお柳と和田四郎立廻りながら出て來り、お柳は兩人を突き退け、八郎を圍ひ、キツと思ひ入れ。八郎見て

八郎  
オ、そちや女房お柳。

リウ  
こちの人、御身に怪我はなかつたかえ。



八郎 此身に恙はなけれども、大事の鏡はあの枝へ。

リウ わたしが取り得て、お前の願ひを

金藤 女ぐるみに、合點か。

和田 心得ました。

ト四人立廻り、八郎は金藤次、和田四郎を引附け、斧を振上げ打たうとして、瘡の病ひ起りし體にて、

苦しき思ひ入れ。お柳見て

リウ モシ、こちの人、心を慥かに。

八郎 チエ、心は矢竹に逸れども、又もや瘡が。(ト思ひ入れ)

金藤 此處に乗つて

和田 女め、うぬを。

ト兩人は八郎を蹴飛ばし、お柳は和田四郎の山刀を打落す。これにて和田四郎は有合ふ總釣瓶の水を、八

郎にザツプリ浴びせる。これにて八郎アツと思ひ入れ。金藤次見て

金藤 野郎めをおツ方附け、鏡を早く。

和田 合點だ。

ト兩人柳へかゝらうとする。お柳さへる。此うち八郎心付き、兩人を見事に投げ退け、お柳を圍ひ、

キツと思ひ入れ。

金和 ヤ、瘡の病ひと思ひの外

リウ わが夫八郎どの、此體は。

八郎 忠義に凝つたる此宗重、天の助けに瘡りの本腹。もう此上は千人力、鏡を取り得て本地へ歸參。

うぬら一々、觀念ひろけ。

金藤 何を小癪な。

ト詠への鳴り物になり、四人立廻りあつて、和田四郎、柳へ登る。八郎も跡に付き、だん／＼にのぼり、

上にて八郎と和田四郎見事なる立廻り。下にはお柳と金藤次立廻りのうち、金藤次の斧、あやまつて柳

をどうと切る。薄ドロ／＼になり、切り口より本蘇芳の血汐流れ出る。これと共にお柳の五體へ血汐滲

み出る。上にて立廻りのはすみに枝を切る。此切り口よりも血汐走る。八郎は鏡を取り、和田四郎を

踏み附ける。金藤次はお柳の體を見て

金藤 ヤ、柳と共にお柳が血汐。

リウ 嬉しや、今ぞ此身の念願成就。

八郎 鏡はわが手へ戻らせ給ふ。

金藤 南無三、それを。

ト八郎、和田四郎上より飛び下りる。皆々鏡を櫛に立廻りのうち、下座より平太郎、前幕の形に一本差  
しにて、三郎義連を引ッ立て、出て來り、此中へ入る。皆々見て

平太 あなたは御主人。妹もろとも

リウ ヤア、お前は兄さん、

八郎 平太郎。して、此者は

三郎 金藤次どのに一味の義連。

金藤 八郎主従、疊んでしまへ。

和田 三郎  
合點だ。

ト六人立廻りのうち、お柳は三郎を當てる。平太郎は和田四郎を見事に切り倒す。八郎は金藤次をちよ  
つと當てる。平太郎こなしあつて

平太 ヤ、妹が五體へ此血汐。何故そちは手を負うた。

八郎 合點のゆかぬは柳の枝、其切り口よりたばしる血汐。

平太 心得がたき此場の不思議。

リウ 成る程、御不審な御尤も。今こそ明す私しが身。恥かしながらお二人様、お聞きなされて下さり  
ませ。



八郎 平太郎。して、此者は  
 三郎 金藤次どのに一味の義連。  
 金藤 八郎主従、疊んでしまへ。  
 和田 合點だ。  
 三郎

ト六人立廻りのうち、お柳は三郎を當てる。平太郎は和田四郎を見事に切り倒す。八郎は金藤次をちよつと當てる。平太郎こなしあつて

平太 ヤ、妹が五體へ此血汐。何故そちは手を負うた。

八郎 合點のゆかぬは柳の枝、其切り口よりたばしる血汐。

平太 心得がたき此場の不思議。  
 成る程、御不審な御尤も。今こそ明す私しが身。恥かしながらお二人様、お聞きなされて下さりませ。



二人 ヤ、なんと。

ト思ひ入れ。誂への合ひ方になり、お柳こなしあつて

もど我れは人間ならず。年を榮ゆる此一木、即ち柳の精魂たりしが、いつぞや領主鷹取の折柄、既に切り倒さるべきを、那須の八郎様に助けられ、いつか御恩を報ぜんと思ふうち、御子息縁丸様危ふき御難儀、お救ひ申さんとせしところ、まことのお柳どの、樵夫の爲にあへなき横死。其五體へ、わが精魂をかいなして、御恩送りも情けなさ、輪廻はかなき妹脊の縁。今日の御難儀助けたく、現在夫に此身を切れと、刃物を渡し勧めしは、命を捨て、御恩返し。又二つには、假りに一夜のお情けを、受けし夫を世に出したさ。此上は片時も早く、鏡を取り得て御歸參あらば、草葉の蔭にてわらはが喜び。

平太 ハ、ア、驚き入つたる其一言。さてはまことのお柳は、樵夫の爲にあへなき最期とや。

八郎 今まで知らざる凡夫のおろか。さては其方は、柳の精魂にてありしよな。

平太 最前思はず梓弓、かゝりや繋がる血筋の妹。

丸郎 其五體をかり寝の床も、今が別れとなつたるか。お名残り惜しい宗重様。

丸郎 われとても、思ひは同じ妹脊の語りひ。たとへ柳の精魂たりとも、一旦結びし互ひの愛着。那須の八郎宗重は、同じ形の女房を、二人持ちしと笑は、笑へ、何とて此の身の恥ならず。

平太 有り難き其お詞。今の仰せを未來の引導。せめてあの世の成佛得脱。

リウ もはや此世に思ひ置く事、さらく無い。早う柳を切つてたべ。

二人 でも、現在の

リウ 覺悟の上は、苦痛を助けて。

平太 然らば

八郎 是非に及ばぬ。南無阿彌陀佛。

ト柳をどうと切る。ドロくになり、お柳「アツ」と苦しむ。兩人立寄つて思ひ入れ。此時、金藤次と

三郎 三郎心付き、八郎の懐より鏡を出し

八手の御鏡、忝い。

金藤 鹿島三郎、此間に早く。

三郎 合點だ。

ト行きかゝる。八郎支へるを、振切り駈出すを、平太郎引附ける。

金藤 此上は柳を切つて、おれが手柄に

八郎 何をおのれが。

ト金藤次を突きつけ、又柳を切る。ドロくになり、お柳の五體より心火燃えて、柳の枝へ引いて取る。

此途端、残りし柳の葉、一時に枯れ葉となる。

八郎 金藤 さてこそ柳は

リウ ト金藤次柳へかゝらうとする。お柳スツクと立ち身にて、金藤次を連理引きのやうに引附けて

八郎 嬉しや、今ぞ念願成就。

成佛得脱。

平太 不便や妹。

ト此時、三郎振り切り、向うへ逃げて入る。

南無三、御鏡。(ト行かうとする。)

金藤 うぬをやつちやア

トかゝる。金藤次又引き附けられ、動かれぬこなし。

八郎 早行け。

平太 ハア。

トかけり、大ドロく。平太郎向うへ入る。よろしく

幕

返し 和歌の浦隴山の場

登場人物 那須女房、藻女。衛士、福作。同、太郎又。同、次郎又。同、當作。鹿島の三郎義連。横曾根平太郎。玉藻の前。

本舞臺、三間の間、正面大櫓の杉林。うしろ黒幕。よき所に眺への岩。上の方に茅葺きの古家、戸根に岩屋の祠と書き、室の軒より鐵の籠を吊り、中にひで(しで?)を焚く。舞臺は眺への本水。すべて紀州の和歌の浦、鵜山の景色。幕の中より仕丁福作、太郎又、次郎又、當作、いづれも白丁、烏帽子にて、一升徳利、鉢肴など取りちらし、酒盛りりの體。山嵐し、夜神樂にて幕明く。

福作 サア、い、加減に盃を廻さねえか。

太郎 ハテ、此男はせはしない。おいらはやうく今飲みかゝつたのだ。

次郎 おきやアがれ。よく嘘を言ふものだ。さつきから、てめえ一人で飲んでゐるわえ。

當作 さうだ。茶碗を取つたが最後、一生離した事のねえ男だ。

太郎 ハテ、此男は、おればかりこめるなく。

當作 イヤ、こめるといへば、當時大館のお羽利き、あの田熊法眼様は、公卿でも武家でも、差別なくこめるでないか。

福作 それは其等の事だ。法眼様には、大臣でも言ひなり次第。先達て渡海した唐女を、今では官女として、御寵愛に方圖がないわ。

次郎 それはそれにして、此方はかまはず、やらかせく。  
皆々 それがい、く。

ト捨てぜりふにて酒を飲みみる。矢張り夜神樂にて、向うより三郎義連、服紗包みの神鏡を持ち、走り出て來り、舞臺の皆々を見て

三郎 ヤア、わいらは玉藻の前のお供に來た、仕丁共だなく。

福作 左様でござります。お前は三郎様。

皆々 義連様ではござりませぬか。

三郎 さうだ。コリヤ、衛士ども、よい所で逢つた。身共は金藤次と心を合せ、奪ひおいたる八手の御鏡、那須の八郎に見附けられ、彼奴の家來の平太郎といふ土民、身共が跡より追ッ駆けるわ。わいらはおれが加勢して、其平太郎めを殺らしてくれろ。

太郎 お氣遣ひなされますな。玉藻の前様を驚護のわれく、其野郎めがうせをつたら

次郎 有無を言はさずふん縛り、狼藉したと云ひ立て、

當作 たいほんの形とやら、仕置きの手ごめでいつか往生。

福作 して、其鏡は御所持かな。

三郎 即ちこゝに肌身離さず持つてゐる。必ずともに、見えたらぬかな。

四人 心得ました。

ト向う、バタ／＼にて人音する。

三郎 アレ／＼、あの足音は、慥かに追ひくる平太郎。

福作 うせたら寄つて、高手小手。

四人 お氣遣ひなされますな。

ト突く棒、さす股など取出し持つてゐる。矢張り夜神樂にて、向うより平太郎、前幕のなり、一本差しにて出て来り、箭のあかりにて三郎を見附け

平太 鹿島義連、こゝにうせたか。

三郎 そりやこそ来たぞ。

四人 合點だ。

ト平太郎へかゝるを搔きのけ、三郎を引き附ける。四人は平太郎を取り巻き狼藉者、そこ動くな。

平太 イ、ヤ、狼藉無禮は致さぬ。此義連こそ八手の名鏡所持なす曲者。

三郎 ぬかすな、土民め。又名鏡を持つたりとて、口外立てするおのれが怪しい。衛士ども、合點か。

四人 動きやアがるな。

平太 すりや、これなる義連に、わいらも組みする衛士どもだな。

福作 イ、ヤ、今宵は玉藻の前、此和歌の浦へ神詣で。辻々固めのわれ／＼が

三人 狼藉者ゆる繩打つて。

平太 さてこそ一味の仕丁めら。妨げひろがば一々に、土民が用意の犬おどし、刀の錆だが退くまいか。

太郎 玉藻の前御歸館まで、固めのわれ／＼。刃向ひ立てとは

三人 狼藉者め。

三郎 息の根とめろ。

四人 合點だ。(ト立ちかゝる。)

平太 こりやもう是非に及ばぬわえ。

ト白刃を抜く。これより三郎はじめ皆々平太郎と立廻りあつて、キツとなる。誂への鳴り物にて、五人を相手に立廻り、ト、福作太郎又を見事に切る。次郎又、當作は下座へ逃げて入る。三郎は鏡を持ち、逃げるところを、平太郎追ひ駆け引ッ捕へ、鏡を奪ひ取り、三郎を引敷き、キツとなつて

嬉しや。忝や。これぞ御主人八郎様の、難儀となつたる八手の名鏡。わが手に入りしか、エ、忝い。

三郎 それを。



平太

ト加ね返してかゝるを一太刀浴びせる。これにて三郎倒れると、此途端にドロ〜になり、平太郎の持つたる鏡、仕掛けにて手を離れ、上の杉の木の枝へ飛ぶ。これにて両方の窓蓋をおろす。雷序になり、狐火燃え、箭の火消えて闇になる。

ハテ、争はれぬ此場の動搖。不浄を禁ずる鏡の威徳。血汐の穢れにわが手を離れ、あれなる杉の一枝へ、飛び去る奇特に引きかへて、群がる陰火は、まさに狐火。

ト此うち始終薄ドロ〜、雷序にて、鏡へ白面の妖狐うつる。平太郎は狐火と鏡に目を附け、思ひ入れあつて

ヤ、灯影にあり〜御鏡へ、うつるは金毛白面の、妖狐の姿現はれしは、さては此程聞き及ぶ此日の本へ渡りし悪狐、妨げなすか。速かに、立去れ〜。

ト切り拂ふ。大ドロ〜、狐火群がり、杉の枝の鏡、仕掛けにて水船へ入る。

ヤ、大切なあの御鏡、又もやこれなる水中へ。いで此上は、さうぢや。

ト水船へ飛び込まうとする。此時大ドロ〜、狐火群がり、支へる思ひ入れ。これにて白刃にて切り拂ふ。矢張りドロ〜にて、平太郎はわが持つたる白刃にて自然にわが身を切り、苦しむこなしにて、水船の方へさしより、鏡を取らんと水中へかゝり、又ドロ〜烈しく、平太郎持つたる白刃を自然とわが腹へ突き立て、苦痛のこなし。ト、白刃をわが手に引き廻し、水船へ見事に落ちる。大ドロ〜にて、水船の三方より吹き水。血汐の穢れにて件の鏡を差し金にて吹き上げる。これと共によき所へ白氣立昇る。



件の御鏡は白氣に卷かれ花道の上へ引かれ、虚空へ引き上げると、好みの鳴り物になり、上の方の宮の戸帳を巻き上げる。中に藻女、女六部の拵へにて、錫杖を突き、立ち身。件の白氣に目を附け、思ひ入れ。

( 89 )

藻女 旅寢の夢か幻しに、俄かの動搖。そのみならず水中より、怪しき白氣立ち昇るは、まさしく鏡の

ト思ひ入れ。此時向うにて

呼び 玉藻の前様參詣。

ト三郎心付き、藻女へかゝる。ちよつと立廻りあつて又

玉藻の前様參詣。

藻女 (思ひ入れ) 合點の行かぬ此場の大變。殊に夜陰に思はずも

三郎 すりや玉藻の前の

藻女 ハテ、心得ぬ。

三郎 怪しい女め。

ト藻女へかゝる。立廻りあると、又向うにて

呼び 參詣。

ト呼ぶと、樂になり、藻女振切つて行きにかゝる。三郎「われを」と留める。立廻り、大ドロくにて  
兩人タチ／＼となり、氣を失ふと、ドロくかすめて、大薩摩の淨瑠璃になる。

大サツマ、あゝら怪しや忽ちに、一天俄に掻き曇り、霧かあらぬか朦々たる、雲間を分けて  
御手洗へ、うつるや月の俤の、身には羅綾の五重ね、玉藻の姿はでやかに、悠然た  
る粧ひは、げにさうく(?)とこそ知られけり。

ト、ドロく、下り葉になり、花道の上より人形の雲下りる。よき所にてとまる。此時、藻女心付き、  
起き上がったて

藻女 さては俄かに立覆ふ、雲の端立に思はずも、放心せしか。ハテ、いぶかしい。

ト此時、雲の中にて

玉藻 「君すめば、よする玉藻のみがき出でて

藻女 ヤ、なんと。

ト大ドロくになり、右の雲左右へ開く。中に玉藻の前(平太郎と早替り)十二單衣、緋の袴、吊り冠  
のまゝ立ち身、槍扇をかざし、八手の御鏡を持ち、よろしく思ひ入れ。

黒白は定かならねども、見れば雲間に、ありくくと

玉藻 千代も傳へよ、和歌の浦風。」

藻女 ヤ。

ト思ひ入れ。此うち薄ドロ、矢張り下り葉にて、玉藻の前は雲に乗つたるまゝ、花道よき所へ下りてと  
まる。藻女これにキツと目を附け

さてこそ高位の御姿は、

三郎 (心付き) すりや、當大臣の内子たる

藻女 これ。

ト押へる。玉藻の前、つかくと舞臺へくる。

慥かにそれこそ。

トさしよつて鏡へ手をかける。玉藻の前これを振切り、袖にて顔を隠すと、ドロくになり、雨窓蓋下  
りる。これにて暗くなる。

ヤ、今まで夜半の月あかりも、霧かあらぬか、黒白もそれと。

ト又三郎は藻女へかゝる。此の立廻りのうち、玉藻の前岩臺へ上がり

玉藻 此身の仇たる名鏡は

ト鏡を出す。三郎此聲を聞き

三郎 ナニ、名鏡とは。

ト三郎行かうとする。藻女さゝへて立廻り。此うち下の方にかけてある鳴子繩を取つて、三郎は藻女へかゝる。藻女、三郎を投げるはずみに、鳴子カラ／＼と鳴る。これに玉藻惘りする。此途端に、玉藻の惣身より仕掛けにて光り出る。

藻女 ヤ、玉藻の前の惣身より

玉藻 これぞ手に入る鏡の威徳。

藻女 ヤ。

三郎 それを。

玉藻 トかゝるを立廻り。藻女は仕込みの錫杖を抜き、三郎を見事に切る。これを木の頭。無禮者めが。

トきつと見得。藻女仕込の白刃を隠す。これをキツカケに木になり、玉藻の前の惣身より、左右へ光り出る。雨窓蓋引上げ、あかるくなる仕掛けよろしく、ひやうし

幕

### 六建目 御遊の場

#### 登場人物

那須の八郎妻藻女實は池藻の前。衛士又五郎實は木幡彈正景澄。輔雅の君。雀の宮の神主。舌切忠太夫。烏丸中納言光兼。磯上飛仲太仲國。金剛太郎重遠。衛士、福作。

同、太郎又。八郎一子、緑丸。伴の七郎熊武。官女、水無瀬の局。同、山路の局。同、三芳の局。田熊法眼俊次。進の藏人春俊。那須の八郎宗重。鳥羽の大臣。玉藻の前。

本舞臺三間の間、正面障地入りの網代塀。左右見切り、花盛り。こゝに烏丸中納言光兼、装束、公卿の拵へにて、上の方に住ひ、磯上飛仲太、伴の七郎、上下、衣裳にてゐならび、下の方に水無瀬、山路、三芳、ぬるで、いづれも自無垢緋の袴の官女にて、めい／＼海棠の花槍を持ち、東西に一人づゝ立ち別れ、花いくさの見得。三味線入りの中の舞ひにて幕ひあく。

トよろしく花軍の立廻りあり。此鳴り物にて向うより、田熊法眼俊次、白髪、法眼袴の形、これも海棠の花槍を持ち出て、花道にてこれを見て、つか／＼と舞臺へ來り、入れ替つて此中へ入り、下の方を無性に突き立て、追ひまくり、しやんと留める。皆々思ひ入れ。

官女 ヤ、あなたは田熊法眼様。

飛仲 御位る定めの花いくさ。供への稽古に横槍を入れられ

七郎 老大方と定めたる、女官達へ加勢めされて

光兼 若大方と定めたる、女官達を追ひまくられしは、さては貴殿も

官女 老大方でござりますか。

田熊 イヤ、どちら方と申すでもござらぬが、いはゞ兄君、殊に一旦大々臣の任を受け給ひし鳥羽の君を、其儘元に直すのが、マア順道かと存じまして。

三人

こりやアさうありさうな事でごさる。

水無

法眼様はじめ、方々にもお聞きの通り、此程白川の大<sup>おと</sup>臣さま御平癒ありしも、那須の八郎様の功とて、御勘氣御免の其の上に

ぬる

今日八<sup>や</sup>手の御鏡受取りの役目にて、再び参内あるとの事。

山路

それについては、かねて仰せ下りし人質とあつて、八郎様の一子緑丸

三芳

先き程召されたとの噂でござります。

田熊

ムウ。其那須の八郎は、身共が娘<sup>もくすめ</sup>藻女の不義の相手。其緑丸と申すは、二人<sup>ふたり</sup>が仲にもうけしおさな子。それゆる娘は勘當なせしに、貴殿も知つての通り、女の身にはためしない、神隠しにあつて行くへ知れず。然るに八郎めは、此程勘當御免を蒙むり、再び出仕を願ふと雖も、疑ひかゝりし者なれば、人質を差出せよと、彈正臺より申し渡されしが、すりや、いよく人質を差上げし上名鏡受取る役目を乞ひ受け、参内致す彼れが胸中、方々には何と思はるゝな。

光兼

されば、其八郎と申すおのこは、おのれが守護なす八手の御鏡を、失うたるお咎めにて、高砂やアも諍ひ倦きたる、長々の浪人者。

飛仲

失させ給ふ御鏡は、玉藻の前より大臣<sup>おと</sup>へ差上げたれば、手<sup>て</sup>めへは取つたと思ひの外

七郎

僅かの功を笠に着て、勘當御免を蒙むつて、又ぞろ御鏡<sup>みかど</sup>を受取りの役目。何ともハヤ、面<sup>つら</sup>の皮の

厚い男でござる。

田熊

サア、其面<sup>つら</sup>の皮をかいて、出仕致す彼れが胸中。方々油断召さるゝな。

水無

それぢやによつて人質を、差上げたではござりませぬか。其緑丸と申すは、お前の實の御孫。其やうな事言はずとも

官女

いとしがつて遣はされいなア。

皆々

ト此時唐樂の音聞える。

七郎

アレ〜、最早大臣<sup>おと</sup>は、唐土<sup>から</sup>驪山宮のおん催し。

官女

ほんに、樂<sup>がく</sup>の音色もたゞならぬ。

田熊

鳥羽の大臣には、玄宗皇帝、御寵愛の玉藻の前には楊貴妃にて、いま酒池肉林の御遊興。

光兼

局たちには、はやく〜南殿へ伺候あつて。

官女

委細心得ました。

ト右の鳴り物にて、官女四人奥へ入る。田熊法眼あとを見送り、思ひ入れ。鳴り物は管絃になる。

田熊

何はともあれ、人質を取りをかば、此方<sup>このほう</sup>に七分の強み。だん〜手筈がうまうなつて参るわえ。

飛仲

これは格別、何かに附けて邪魔になるは白川の老大臣<sup>らうおと</sup>。かねて牒し合せし、調伏せし計略は如何でござるな。

田熊

其儀も彼の金藤次と牒し合せ、此白絹へ調伏の祕文を、生々と記しおいてござる。

光兼

ト箱の中より白絹と密書を出して、三人に見せる。これは法眼、何をお言やる。こりやこれ白絹、どこに文字が書いてござるか。それく、下々に致す、どふんとやらにさも似たり。

田熊

ハテサテ、貴殿なぞの知らぬ事。年寄つてもぬからぬ法眼。他人を憚る一つの手段。伴の七郎、ひそかにこれをお見やれ。(ト七郎へ密書を渡す。)

七郎

ドレ。……「田熊法眼殿へ、金藤次」。……ナニく。……「老大臣調伏の祕文、他見を憚り、唐土舜慶伯が薬法を用ひ認めたる間、矢張り白絹と相見え候ふ。尤も人間の血汐を注ぎかけられ候へば、忽ち文筆現はれ申し候ふ。」

飛仲

すりや、此白絹へ、人間の血汐を注ぐ時は天晴れ妙計。

三人

ト手紙を法眼へ戻し、思ひ入れ。法眼懐中して

田熊

此白絹は伴の七郎、葎壁門の乾の隅へ、土を穿つて人知れず埋める手段、心得ました。

七郎

成る程、法眼には身に引受けて、よく若大臣の肩を持ちやるな。

光兼

飛仲 それといふも鳥羽の大臣、まこと先の大臣の胤ならず、素性を糺せば法眼どの

田熊

コレ。ト押へる。此時向うより又五郎、白丁、衛士の形にて去り出て来り、花道に手をつき、こなしあつて

又五

申し上げまする。

田熊

其方は衛士の又五郎。

三人

あはたゞしい。何事ぢや。

又五

ハツ、只今陽明門へ、田舎の神主らしき者、怪しげなる女を一人同道致し、法眼様へ直きくにお目にかゝりたいと申しますが、通しませうか。いかゞ計らひませう。

田熊

ムウ。合點のゆかぬ。其怪しげなる女子と申すは、もしや行くへ知れざる身が娘の、藻女ではないか。ハテナア。

又五

ト思ひ入れ。又五郎向うを見て。兎かう申すうち、アレく、其女はおめす臆せず、此ところへ、参りまするわく。トてんつむになり、向うより當作、次郎又、衛士の形、六尺棒を持ち、藻女は前幕の衣裳方々破れ、髪も亂れし體。忠太夫、白き行衣のなり、手甲股引き、旅の形にて、藻女を連れ、出て来り、花道よき所にて

仕丁 さがれく、さがりをらう。

忠太 アイく、さがるはさがりやすが、田熊法眼どのに逢つてからさがりまする。

藻女 それまでは一戸上がる。上がるわいな。

當作 ヤア、田熊様と、わいらがやうな氣違ひ女と

次郎 さほてんの幽霊に、お近附きは無えわ。

二人 下がれく、さがりをらう。

藻女 イエく、上がりますく。

ト争ひながら、此人數本舞臺へくる。田熊法眼、藻女を見て

田熊 ヤア、わりや行くへなくなつた、此法眼が娘でないか。

藻女 アイ、わたしや女子ぢやによつて娘。男なら悴。

又五 ア、神隠しにならしやつたといふ、法眼様の御息女でござりまするか。

皆々 成る程、變な調子だわえ。

忠太 ヤレく、嬉しや。左様なら、あなたが田熊法眼様でござりまするか。私は下野の國、雀の宮

の神主、舌切忠太夫と申す者。此度紀州熊野本社へ參詣致しました下向の折柄、その山中に此女  
中が、何かキヨロリカンとしてゐらるゝから、何人だと聞いても、何だか一向他愛の無い事ばかり。

親はと聞けば、都の内で田熊法眼といふ者の娘。自らも以前は大館へ宮仕へせし者ぢや、其方都  
へ連れ参れと、何か大風な物の言ひやう。氣違ひかも知れませぬゆゑ、いやとは言つて見たが、  
何も後生と、今日まで私しが路銀で、やうくこゝまで連れて來ましたが、聞けば違はぬお前の  
娘御、慥かにお受取りなされませ。

田熊 成る程、身共が娘に相違はないが、此奴は那須の八郎といふ者と、不義致した咎によつて、親子  
の縁を切つて勘當したれば、あかの他人。此方に毛頭かゝり合ひはないぞ。

忠太 エ、そんならなけなしの路銀を遣つて、連れて來た上に、……ほんの骨折り損の草臥れ儲  
けか。こついはとんだ目にあつたわえ。

又五 マア、何はともあれ、お娘御の、神さそひにあつた話しを。

藻女 サア、不義の咎から勘當受け、どこをたよつて此身のお詫びをと、くよくよと思つてゐるうちに  
何か脊の高い山伏様が來たと思はんせ。そこで其山伏様が、目をねぶつて、おれと一しよにと、  
わたしをおぶうて、行く道々も、そつと目を明いて見りや、まんくたる海の上。又其雲の上。  
峯やら、谷やら、越すやうに思つたが、其山伏様が言ふには、サア、こゝがおぬしとおれが棲家  
ぢやと言ふを見れば、家は無し、杉の木が、によきくとおひ重なり、夜明けて見れば、其山伏  
様は鼻の高い大男。ところへ又、鼻の高い坊様がござんして、おれは僧正坊といふ者、われが嫁

入りの仲人ぢや、さて掣といふのは太郎坊。次郎坊は添ひ掣。イヤモ、くる人もく、鼻の高い衆ばかり。それから、喜びぢやくと言ひ出して、先づ落ち附きの吸ひ物は、蛤でなうて生栗。三々九度の盃ごとも、冷酒にあらで熱湯酒。花掣どのが鼻の先きを火傷するやら、亂騒ぎ。まづまづ、それから、夫婦になつて暮らすうち、亭主の鼻の高いでおけばよかつたに、ふとした事で、わたしや出来心でな、居候ふの木ノ葉天狗と間男して、追ひ出されると思つたら、いつか熊野の山の奥とやら。そこで此顔の長い男に逢つて今のわけ。わたしが思ふに、大方十日ばかりも天狗どのと女夫になつてゐるやんした。なんとマア、きやうとい女子でござんせうがな。皆さん、愛い奴ぢやと褒めてやつて下さんせえ。

トいろく仕方話にて話す。皆々思ひ入れ。

田熊 ヤレ、益體もない物の言ひやう。勘當は致したなれど、法眼が一人の娘を棒に振つてのけた。コレ、娘、われが神さそひになつて、今年で丁度六年になるわやい。

藻女 それはマア、われ知らず、長逗留致しましたわいなア、

又五 モシ、法眼様、マアく、何事もなくお歸りになつた娘御様。めでたい次手に、どうぞ御勘當を。

光兼 それく、磨も烏丸なれば、天狗とは羽根仲間。まんざら他人でもない。只管われくに免ぜられ

飛仲 左様々々。御息女の勘當は、免されて遣はさるゝがよろござるて。

田熊 エ、コレ、わるい奴なれども、一旦天狗道へ落ちたを腹癒せに、いゝわ、勘當免してくれうわ。それでわたしも、鼻が高うなつたわいなア。

忠太 ヤレく、それでこそ此忠太夫も、世話甲斐があつて、鼻が高うござります。

當作 イヤサ、鼻はさのみではないが、顔は長いてナ。

忠太 エ、お前方は、おれが顔の長いのは、今始まつた事ぢやアねえ。古いく。

又五 ほんに、古いと申せば、お娘御様のお召し物が、あまり見苦しくなりました。お召し替へになつてはどうでござります。

田熊 イカサマ。コレ、當作、次郎又、娘を長局まで連れて行て、はした女どもに言ひ附けておくりやれ。

兩人 畏りました。

又五 コレ、雀の宮の神主どの、こなたも臺番所へ行つて

藻女 飯など食べたがよいぢやなア。

忠太 ハイく。左様なら、後方お目にかゝりませう。

當作 サア、ござれ。

ト管絃になり、次郎又當作先きに、藻女と忠太夫下座へ入る。

田熊 ハテ、不思議にも存命にて、歸る事は歸りをつたが、以前に變る娘が素振り。

又五 折に幸ひ、今日那須の八郎どのもお出でになるとの噂。これでは聲にお取りなさるゝでござりませうな。

田熊 イヤ、聲などには、いつかな。今日八手の鏡の受取りさへ、法眼が氣に入らぬに、白川の大  
臣、頭痛の御痛み祈りの爲とは表向き、彼れめは安部の泰親と合體なし、當大臣御寵愛ある玉藻  
の前を怪しき女なりと老大臣へ申し上げ、鏡を以て玉藻の前が實性、見出さんとの計略と、此法  
眼は存するが、方々には如何思はるゝ。重き役目を蒙むりしこそ幸ひ、又ぞろ彼れめを

三人 深い所へ

又五 おやりなさるゝ目ろみかな。

四人 ヤア。

又五 ト思ひ入れ。又五郎は手早く田熊法眼の持ち來りし花槍を取つて

此お槍は、即ち海棠の造り花。そんならこれが花いくさの

田熊 ト田熊法眼の方へ突き出す。田熊法眼思ひ入れあつて花槍を取り  
衛士に似合はぬ詞の機轉。どうやら役にも……オ、幸ひ。

ト田熊法眼は皆々に囁く。

三人 そんなら彼れめを。

又五 エ。

田熊 大事を聞いた上からは。……エイ。

ト田熊法眼、磔を打つ。又五郎受け留め、これを見て

又五 こりやコレ、お金。こりやどうだ。

田熊 オ、不審は尤も。コレ。

ト囁く。又五郎思ひ入れあつて

又五 ア、そんなら今日の花いくさ。若大臣方と名乗つて出て、わざと不覺を

田熊 コリヤ。……合點か。(ト思ひ入れ)。

又五 それにしては、あまり不束かな此金子。

三人 骨は折らさぬ。われも。……エイ。

又五 トめい、順よく包み錢を磔に打ち附ける。これを又五郎、一々見事に受け留める思ひ入れあつて  
又五 ヤ。又ぞろ三包み。(トにつこり思ひ入れ)。これなら承知。ムウ。  
ト兩手を脾胃にあて、倒れる。



二人 ハテ、氣の早い。  
田熊 それでゆかずば……コレ。(ト花槍の仕込みを抜いて見せる)。  
三人 そりやソレ、仕込みの  
田熊 コリヤ。

ト押へる。よろしく管絃にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、結構なる九尺の唐屋體。緞帳の上下唐垣。芭蕉の葉の見切り。舞臺前所々に寄せ石これに牡丹の造り花よろしくあしらひ、三味線入り詠への唐樂。此道具とまると、よき所まで押し出す。ト竹笛の入りたる詠への雲上なる獨吟になり、よきほどに唐樂あしらひにて、三方の緞帳を巻き上げる。こゝに鳥羽の大臣、唐裝束、玄宗皇帝の拵へ。玉藻の前、揚貴妃のこしらへ。好みの通り、笛を調べぬ見得。よき所に詠への臺に八手の鏡を飾り、獨吟一くさり切れる。兩人こなしあつて

鳥羽 雲にはいせう(?)を帯び、花には姿を思ふ。其唐土の玄宗と、貴妃が浮き名を流せしも  
玉藻 天の河風小夜更けて、しかも文月七日の夜、驪山の宮の手枕に、するな帝の勅詔。  
鳥羽 今宵は星も逢ふ夜にて、天にあつては比翼の鳥、地にあらば連理の枝。  
玉藻 それは巫山の朝の雲。

鳥羽 ゆうべの雨と誓ひしは、  
玉藻 見ぬ唐土のさゝめ言。  
鳥羽 それを移して日の本の  
玉藻 大臣へ妾が及ばぬ戀ひ。  
鳥羽 イヤ、貴妃にもまさる玉藻の前。(ト手を取る)。  
玉藻 大臣様  
鳥羽 ハテ、あてやかな  
玉藻 オ、恥かし。

ト唐團扇にて顔を隠し、しなだれる。これより又獨吟になり、笛を奪ひ合ふ和らかな濡れの模様あつて獨吟納まる。此時、下座より田熊法眼先きに、光兼、飛仲太、七郎に官女四人、詠への盃臺、二つ口の銚子など持ち、あとより當作、次郎又、海棠の花槍を持ち出て來り、皆々左右へ別れて住ひ、こなしあつて

田熊 ハテ、大臣様には、今日御任命めの式。唐土驪山宮の御まなび。  
光兼 お羨ましき御遊興  
七郎 戦は必定、身方の勝利。

飛仲

御代萬歳と、たゞく

皆々

おめでたう存じ奉りまする。

鳥羽

オ、まろを祝して人々は奏聞。

玉藻

君にもさぞや御満足。……局たち、早く九献を。

官女

畏りました。

呼び

ト銚子、盃臺を持ち、立ちかゝる。此時、揚げ幕にて  
輔雅君の参内。

田熊

ト呼ぶ。田熊法眼思ひ入れあつて  
ソリヤ。(ト當作、次郎又に見くばせする)。

二人

ハッ。

鳥羽

ト件の花槍をしごと、鞘落ちて本身の槍になる。これを掻い込んで一散に向うへ走り入る。

玉藻

ムウ、すりや輔雅が参内。ハテ、さてはいよく先大臣の殿命によつて、任に就けん結構なるか。  
ハテ、小ざかしい。  
もしも若大臣様の代ともならば、君にはあらぬお別れかと、モシ、自らはそればかりが悲しう  
なござりますわいなア。(トしなだれかゝる)。

田熊

アイヤ、其お心遣ひは、御無用に遊ばされませう。われくがよろしく

四人

計らひおきましてござりまする。

ト思ひ入れ。又「参内」と呼ぶ。三味線入り、早下り葉になり、向うより輔雅の若大臣、壺折衣裳、槍  
扇を持ち、若大臣のこしらへ。進の藏人春俊、上下衣裳にて参内傘をさしかけ、後より金剛太郎重虎、雅  
兒鬚、白丁の露を取り、荒事師のこしらへ。これを當作、次郎又、槍にて取巻き、立廻りながら出て來  
り、花道にて

金剛

ヤア、わが君輔雅君に、何咎あつて此狼藉。わるくヂタバタ騒ぐが最後、うぬら一々、いけ首を  
引ッこ抜くぞ。

次郎

ヤア、手向ひひろくと違命の罪。

當作

そ一寸も

二人

動きやアがるな。

金剛

何を。

輔雅

磨が舍人へ狼藉あつては、先大臣への恐れあり。藏人、とゞめい。

藏人

ハッ。……御詫なるぞ、金剛太郎、必ず荒氣を出すまいぞ。

金剛

でも。

藏人 コリヤ。

水無 若大臣様輔雅君には、お早うお出で遊ばされました。

輔雅 先大臣白川君、まつた當今大臣の兄君お勧めにて、輔雅参入致す折柄、

日華門のほとりより、思ひもよらず伏せ勢起り、君をはじめわれを、劔戟を以てあの如くお圍みあるは、如何の儀でござります。

鳥羽 オ、それは其方に覚えがある筈。弟には先大臣を願ふまで、當大臣の任を奪ひ、押して大權を握らん、いはゞ是れ謀判も同然。

光兼 それゆゑ衛士に申し附け

次郎 取り圍んだが誤りか。

皆々 なんと覚えがござらうがな。

輔雅 こは思ひもよらぬ方々のお言葉。尤も先大臣の仰せには、當大臣政事を忘り、明暮れ玉藻の前が色香に耽り、不徳の至りと世上の譏り。かくの如きは天神へも恐れあり、磨に代つて任に就けたつての御説。さはさりながら、親兄の禮を重んじ、強ひて辭退なしたれども。

藏人 出でて返らぬ御仰せ、若大臣さまも思し煩ひたまふ折から、参上せよとの再度のお使者、さるに

よつて、進の藏人供奉仕り、参上致してござります。

金剛 其神妙な若大臣様に、謀叛などと名を附ける田熊法眼、此重虎が目に見せうか。

輔雅 天神地神も上覽あれ、謀叛などは穢らはしい。必ず御疑念あらせらるゝな。

鳥羽 イ、ヤ、其詞偽りならん。其方安部の泰親と合體なし、われに匹夫の相ありと、退隱の父大臣へ

奏聞に及び、剩へ、これなる玉藻の前、八手の御鏡を不思議に取り得、大館へ守護し歸りし大功ある女なるを、強ひて遠ざけんと計りしも、其方が差圖であらうがな。

輔雅 こは存じよらぬお言葉。毛頭以て左様の覚えは。

玉藻 イエ、無いとでは言はせぬ。自らにも畜類の相ありと、あられもない泰親の奏聞。これとてもそなた様の、妾を遠ざけん、下心からでござりませうがな。

輔仁 何故あつて此輔雅、左様の企み致さんや。

玉藻 何故とはまざしくしい。御身此玉藻の前に心を掛けられ、折に觸れては戀ひ歌の手爾葉、手に取らず戻せしに、さては兄君を失ひ給ひて、自ら内子となして、大任に就かん下心、なんと覚えがござりませうが。

輔仁 エ、。(ト恟りする思ひ入れ)。

鳥羽 ヤア、大任を望むのみならず、予が寵愛の玉藻の前に、心を掛くる憎くき輔雅、檢非違使に命を下し、きつと禁獄申し附けよ。

輔雅 おほろけならぬ御難題、一つも覚えは無けれども、檢非違使の辱めを受けんよりは、われとわが手に、刃に伏して申し譯。藏人、參れ。

ト立ち上がるを、藏人キツと留めて

藏人 アイヤ、暫くお待ち下さりませう。……御兄弟の御争ひを、藏人逐一承るに、とやかく論は無益の至り。幸ひあれに八手の御鏡。此日の本は神の御國。あの御鏡を誓ひに立て、曇らぬ心の潔白を

輔雅 いかにも兄君の御疑念を晴らさん爲、此場に於て神に誓ひを

田熊 アイヤ、其誓言もどかしい。もう此上は手ばしこく、かねて約束の如く、花いくさに勝れたる方をこそ、大任に就けまらせん。當大臣の兵には、即ち斯くいふ田熊法眼。

ト件の花槍を持ち、身拵へして前へ出る。

皆々 して、若大臣方の兵は何者。

ト此時下座より又五郎出かゝりゐて

又五 若大臣方のお役目は、此衛士の又五郎めが、勤めますのでござりませう。

金剛 アイヤ、心知れざる餘人は頼まぬ。若大臣方は此重虎が、どいつ、どなたの嫌ひはねえ、一番相手になりませう。(ト立ち上がる。)

輔雅 重虎、控へい。たとへ老大臣の仰せをもどくとも、望みにあらぬ大大臣の位。其花いくさに負けるも幸ひ、此輔雅が心の潔白。

玉藻 すりや、いよ／＼此場に於て、天永のむかし、兄弟宮のためしに習ひ、今、目の前に御位定め。

鳥羽 それは宿禰と當麻の蹴速、相撲の勝負に位るの争ひ。

藏人 これは優しき海棠の、花の槍にて御位の

田熊 花を咲かすか。

又五 花を散らすか。

光兼 花々しく、色香争ふ

皆々 花いくさ。

玉藻 それをば御覽遊ばして

鳥羽 イデヤ賀盃を廻らさん。

又五 とく／＼用意。

田熊 イザ、

又五 イザ、  
二人 イザくく。

ト三味線入りの白嚔子になり、田熊法眼と又五郎、海棠の花槍を持ち、左右へ立別れ、拵へ事の立廻り、又五郎われを忘れて強くなる。田熊法眼と敵役、「違うたく」と仕方して、又「金をやる」といふ思ひ入れ。此度々に又五郎弱くなる仕組み。田熊法眼圖に乗り、手ひどく頭をくらはす。敵役ヤンヤと褒める。又五郎腹を立て、口小言を言ひながら、田熊法眼を手ひどく押し附ける。

田熊 ア、これぢやく。(ト金の仕方して見せる)。

又五 イヤ、もう錢にも金にも替へられぬ。もう自棄だ。(トきつとなる)。

敵役 コレく、これぢやく。(トあぶくして金の仕方して見せる)。

又五 否だく。此品返す。約束變替へ。

ト光兼、飛仲太、七郎へ、最前の錢を磔に打ち返す。此金皆々の顔へあたり、三人顔を押へて思ひ入れ。サア、斯うしてしまつて、此方の思ふ存分に、今に腹癒せ。マカシヨトナ。

トこれより又五郎キツとなり、田熊法眼を弄り物にする立廻りの仕組み。此うち田熊法眼の懐より以前の密書を落す。又五郎手早く懐中して、田熊法眼をしたゝかに打ち据ゑ、又五郎は上の方に、田熊法眼は下の方に、此仕組み納まる。皆々思ひ入れ。

藏人 勝負は見えた。若大臣の勝となつた上からは

女形 御大臣は輔雅君。

田熊 イヤ、まだ残つて……下郎め、觀念。

ト花槍の仕込みを抜いて、突いてかゝる。當作次郎作立ち上がり、金剛太郎も敵役も立ちかゝるを、藏人留める。又五郎は田熊法眼が突きかけし槍の鹽首を取つてキツと引き附ける。鳥羽の大臣こらへかれ緩怠なり。おのれ匹夫め。

ト槍扇を振上げ、立ち身。又五郎左右を留め、此途端に皆々見得よく留まる。よき時分藻女、下げ髪に替へ、蒔繪の掛け盤に椀を持ち、出かゝりゐて、此時中へ入り、鳥羽の大臣をとめ

藻女 これはく、大臣様、久しぶりでお目もど致しましたわいなア。

鳥羽 ヤ、其方は先年、悪神の爲に誘引せられし法眼が娘の

官女 藻女さんではござんせぬかいなア。

鳥羽 留めるな、藻女。にツくい匹夫め。磨が手に掛け(ト又五郎へ立ちかゝる)。

藻女 これは蓮葉な大臣様、マアくお待ち下さりませ。……ほんに、蓮葉といへば、あの井戸に桐の葉が落ちてあつた。其方拾うておじやいのう。

又五 ハイく、お庭の掃除は衛士の役。

田熊 約束違へし又五郎め、

敵役 よく深い所へやりをつたな。

次郎 其返報は、宮奴仲間が

當作 ちよつと斯うして。

又五 ト左右よりかゝるを、ボン／＼と投げのけ、又立ちかゝるを、双方へちよつと締め上げ  
ハ、ハ、ハ、ハ。同じ仲間の竹熊手、ほでさしひろぐは、ほうきに御苦勞。ドリヤ、お庭でも掃くべ  
いか。

ト兩人を引ツ立て、こなしあつて下座へ入る。

田熊 いらざる所へ娘の藻女、おのれが知つた事では無いわ。すツこんでをらう。

藻女 ハイ／＼。左様なら私しは、おまんまを食べてしまひます。どなたもお許しなされませ。

ト飯を食ひにかゝる。藏人こなしあつて

藏人 たとへ若大臣にはお望みななくとも、一旦の契約なれば、花いくさに勝つたる上は、大臣は、輔雅  
君でござりませうがな。

敵役 サア、そりやア

金剛 但し其方は負け腹で、横車を押さつしやるか。

敵役 サア、そりやア、

皆々 サア／＼／＼、

鳥羽 ト思ひ入れ。玉藻の前こなしあつて、鳥羽の大臣へしなだれ、囁く。大臣こなしあつて

いかにも、玉藻の前が申す通り、たとへ花いくさには勝つとも、道に背きし不徳の弟、大任に  
就けんとは思ひもよらず。コレ、先大臣の仰せなりとも、いつかないつかな。たつてとあらば先  
大臣をも、きびしく押し込め、弟は遠流に處し、其外、磨に逆らふ生公卿ばら、一々罪科に申し  
附ける。此旨きつと心得い。

敵役 ハ、ア。

藏人 こは大臣の仰せとも存ぜず、一旦の御説も世上の鑑、御異變とあつては世は常闇。

田熊 ヤア、善惡ともに、出で、返らぬ君の仰せ。

飛仲 いで、われ／＼が、目にももの見せうか。

光兼 詞を背けば違命の罪人。

金剛 ヤア、横しま非道の生くら刀、

藏人 此藏人に立たうと思ふか。

敵役 オ、立て、見せう。

金剛

見せよ。

敵役

見せうわ。

皆々

何を。

ト皆々キツとなる。此うち藻女、飯を食ふことあつて、此時真中へ出て

藻女

そりや皆さん、無理ぢやく。

田熊

とは又、なぜ。

藻女

オ、お腹なかがくちいわいな。

田熊

ヤイ、娘、又してもわりやア出しやばつて、何が無理ぢや。それとも譯を存じてゐるなら、それを申せ。

藻女

皆さん方、時節が参りませぬ。

皆々

なんと。

藻女

たとへ人間に幸ひが来ようが、笑ひが来ようが、一寸すん先きの見えぬは人間の悲しさ。そこを見抜くが、しばしのうちも、天狗と夫婦になつて、一生高い所から見下ろして、あの人は、いつの幾日に幸ひがくる、此人は、何月の幾日に願ひが叶ふといふ事は、見通しの藻女。それぢやによつてまだ時節の来ぬうちは、わッばさッばと争ふは、皆さんの無理といふものでござんす。

鳥羽

ムウ。たとへ大臣の位ゐるにをつても、禍福の到るは許られぬ人界の常。しばしも魔道に入つたる藻女。して、磨が王位上なき位ゐるの望みはいかに。

藻女

ハイ、叶ひまする。

敵役

して、われくが大望は。

藻女

叶ふ段ではないわいなア。

玉藻

コレ、妾わらわが願ひは。

藻女

ハイ、玉藻の前様の願ひが叶へば大事

玉藻

エ。

藻女

サア、随分叶ひまする。

田熊

それが定ぢやうなら、災わざひも三年とやら。

藻女

果報は寝て待てと申しまするぞえ。斯う見渡したところが、皆様のお望みも、きつと叶ひまする程に、どこへなと行つて、裸にでもなつて、晝寝して待つてゐやしやんせ。まだ暑うござるわいなア。

田熊

そんなら此場は藻女に

敵役

預けて退去。

藻女 若大臣様にも青龍殿へ

藏人 お成りとあれば、供奉はわれく。

輔雅 大臣のお怒り和らぐやう、よしなに頼む、藻女どの。

鳥羽 心知れざる輔雅を、方々警護。

敵役 ハア、。

皆々 トこなしあるを、立役支へて

まづ、入らせられませう。

ト管絃になり、輔雅先きに、藏人、田熊七郎、飛仲太、光兼に女形付き、金剛太郎も随つて入る。藻女 残る。引違へて下の方より忠太夫、結構なる蒔繪の飯鉢を持ち、ウロ／＼して出て来り

忠太 ヤレ／＼、腹がベコ／＼するから、茶漬けを一杯下せえと言つても、下々だの、はしただのと安

く言やアがつて、構ひ附けねえから、あの臺番所とやらで、飯櫃をちよろまかして来たが、ア、

コレ、そこらに椀でも茶碗でも無いかしらん。

トうる／＼してそこらを尋れる。藻女これを見て

藻女 コレ、其方はまゝ、食ふなら、こゝに掛け盤があるぞえ。

忠太 ヤア、お前は天狗さんのおかみさん。ヤレ／＼、地獄にも知る人、ドレ、ゆつくりと飯でも食ひ

ませう。

藻女 飯ならわしが給仕してやらうわいな。

忠太 それは憚りでござりやす。どうでも馴染の人でなけりや話しが解らぬわい。

ト忠太夫飯を食ひかゝる。鳥羽の大臣これを見て

鳥羽 見れば一飯の食事を致すを、喜見城の楽しみをも見ゆるが、ハテ、下々と申す者は、うらやまし

いものぢやなア。

玉藻 して、大臣のお樂みわえ。

鳥羽 そりや言はいでも知れた事。此日の本の名所舊跡、又は花紅葉を寄せつくしても、其方の色香に

代へる楽しみは無いてや。

玉藻 あの偽りなおことば。過ぎつる夜半も、お情け薄い御説、自らは、よう聞いてみましたわいな

ア。(トつんとする)。

鳥羽 何を玉藻が申すやら。そちや、無き名の濡れ衣を磨に着せるのぢやな。

忠太 なんだ、ぬぎおきの濡れ衣を着せる。それよりは、仕立ておろしの浴衣でもかぶせればいゝに。

藻女 これはしたり、飯食ふうちは物言はぬものぢや。ソレ／＼、口のはたに飯粒が附いてあるわいな。

コレ、そしてあなたは、大大臣様ぢやぞえ。



忠太

エ、大大臣様だ。そりやア大變だ。こんな事を言つて、罰があたりやしまいか。モシ、御覽なされませ〜。……ドレ、もう一杯替へようか。

玉藻

それぢやによつて、もう自らには秋の風。

鳥羽

コレ、なんの其方に秋の風。

玉藻

イ、エ、秋風ぢやわいな〜。

忠太

モシ、天狗さんのおかみさんえ。此暑いのに、秋風ぢや〜と言はつしやるが、ありやアマア、どうしたのだえ。

藻女

ありや大大臣様の女夫喧嘩ぢやいなア。

忠太

エ、そんならアノ大大臣様も、女夫喧嘩をするものか。こいつは珍らしい。

藻女

サア、大大臣様の女夫喧嘩も珍らしいが、わしが今までゐた、杉の梢の夫婦喧嘩は、又おつなものぢやわいな。大天狗の亭主が、片肌脱いで横を言ふと、小天狗の女房が勇み肌で、中ッ腹を言ひながら、亭主の胸ぐらを取るかと思へば、長い鼻へ取り附いて、やつさもつさ、鼻ねじりが始まるわいなア。オ、鼻團扇の投げ打ちやら、亂騒ぎ。モシ〜、あなた方方、女夫喧嘩なら、ちつと投げ打ちの稽古をなされませ。

忠太

ソレ〜、なんでも投げ打ちをしなければ、夫婦喧嘩の形へは入りませぬ。

鳥羽

ムウ。して其投げ打ちをやらんは、いかやうに致すものぢや。

忠太

投げ打ちの仕やうは、わたしが教へて上げやせう。……斯う向う鉢巻きで、片肌脱いで「エ、コレ此あまア、長屋あるきばかりしやがつて、又よく亭主の讒訴ウ言やがつたな。叩ツくじくぞ、山の神め」……と言ひながら、何でもそこにある物を、手當り次第に抛るのでござりまする。

ト飯つぎの蓋を投げて見せる。

鳥羽

ハテ、いかうむづかしいものぢや。……此久方のあまめが。千早振る神代もきかぬ男宮の、さかしらを言ひ立てる、此足引きの山の神め。(ト思ひ入れあつて、飯つぎを抛り)斯様致すのか〜。

忠太

ハ、ハ、ハ、マア、そんなものさ。

玉藻

アレ〜、大臣にはあのやうに宣ふが、自らは如何致すればよいのぢや。

藻女

モシ、斯う仰しやりませ。

ト玉藻の前に唾き、教へる事あつて、玉藻の前呑みこみ

玉藻

アレ、大臣の宿六どの、妾が顔を踏み給うて、姫御前さへ御覽ある(?)姫一人をはぐませかねる、働きのない大臣様には飽きた程に、早う去り状とやらの、仰せを賜はりたいわいなア。

ト藻女に教はり、こつぶ盃臺なぞを投げ散らす。

藻女

サア〜、それでよし〜。サア、これからは、仲直りの一段ぢや〜。

忠太 ソレ／＼、仲直りに一つ締めませう。

鳥羽 それは如何致すのぢや。

忠太 いかにも唐人の眞似をしてござるとて、仲直りにまで通辭がいるか。

藻女 サ、何であらうと、私しどものするやうに遊ばしませ。

四人 ヨイ／＼／＼。

ト手を打つ。これを見ながら、鳥羽の大臣、玉藻の前、不器用に手を打つ。此音に又五郎、呼ばれると心得し思ひ入れにて、竹熊手を持ち、下の方より出て

又五 ハ、ア、お手の鳴つたは、御用でもあるかしらん。

玉藻 ト下の方へつくばひある。皆々これを知らず、兩人は屋體へ上がり、こなしあつて

鳥羽 モシ、大臣様、以前の如く睦しうなつたる上は、此末とてもお見捨てなう

玉藻 そりや御眞實の仰せござりまするか。

鳥羽 三種の葦器を誓ひに掛け

玉藻 仇し心のないやうに

鳥羽 其方一人を月雪花

玉藻 片時お側を

鳥羽 離れず、離さず

玉藻 夜のお伽に

鳥羽 比翼の枕。

玉藻 嬉しうござんず。

鳥羽 可愛の者やの。

ト兩人よろしくあつて抱く。

忠太 こればつかりは通辭はいらぬ。

藻女 サ、閉帳ぢや／＼。

ト唄になり、綴帳をおろす。これにて又五郎ウツと目を廻す。忠太夫、藻女恠りしく

忠太 ヤア、あの人は、目を廻した／＼。

藻女 ほんに、こりや衛士の又五郎ぢやわいな。

忠太 癪癪でも起つたのた。コレ、氣をしつかりと持たつしやい。

藻女 官奴どの／＼。

ト兩人して呼び生ける。藻女心付き、そこにある瓶子の酒を、無性に又五郎の口へ注ぎこみ、又呼び生

ける。これにて又五郎、やう／＼気が付き起き上がる。

忠太

ヤレ、気が附いたかいの／＼。

又五

ヤレ／＼、気がゆるいぞ／＼。

忠太

ヤア、そんなら貴様は、今のいちや附きを見て

藻女

氣を失うたのかいなア。

又五

イヤ、気がわるい／＼と思つたら、カッとのほせて、つい目を廻したさうだ。

忠太

エ、助倍な男だわえ。

又五

大きにお世話でござりました。時に氣が附いて見りやア、何だか豪氣にい／＼心持ちだ。なんでも

忠太

二合五勺引ツかけたといふ心持ちだ。

又五

そりや其筈の事だ。どうしても氣が附かぬから、天狗様のおかみさんが、やみ雲にこなたの口へ

藻女

酒をつぎ込んだのだ。

又五

コレ、お館様の酒を振舞うたぞや。

忠太

ア、そんならお盃を頂戴したのだな。何でもい／＼わえ。ア、い／＼心持ちだ。心持ちはい／＼が

又五

氣がわるくつこて堪られぬ。モシ、天狗様のおかみさんえ。どうぞしてくんなさらねえか。コレ

忠太

コレ、氣味合つて見る氣はねえか。どうだ／＼。

トだん／＼酔ひの廻りしこなし。

藻女

そんなら此藻女に、色事せいといふのかや。

又五

平つたく言やアさうさ。コレ、お前も鼻の高い亭主に追ひ出された面當てに、鼻の低い男と色に

藻女

なるのも、又氣が變つてよからう。どうだ、氣はねえか／＼。(トしなだれる)。

忠太

わしや色事は否いのう。

又五

そんなら不承知かえ。まだ去り然も狀取らぬ天狗様のかみさんと色事をして、こなた、鼻高どの

藻女

に七兩二分浚はれるだらうぜ。

又五

鼻の高い人がイザゴザを言やア、顔の長いこなたを渡りにやるからい／＼わ。そんならいよく、

藻女

お前は女房には否かえ。

又五

女房にならう。

藻女

エ、。

又五

それが、むづかしうなうてよからうぞや。

忠太

イヤ、あんまり嬉しくつて又目を廻しさうだ。

又五

成る程、天狗界を遍歴して來た程あつて、物事の解りは早いな。

又五

そんならいよく、おめえは女房。

藻女 こちらの人。

又五 きつとだね。

藻女 オ、くど。

又五 エ、畜生め。(ト引寄せて抱く。)

忠太 成る程、大館といふ所は、とんだ所だ。あれといひ、これといひ、丁度二度だが、ア、面が長い。

トこなし。管絃になり、奥より田熊法眼出かけて

田熊 ヤイ、娘、おのれはく。不義の咎にて勘當され、それにも懲りず、勘當ゆるすと其儘、人もあらうに、最前親に無禮をした下郎めと不義ひろぐ。おのれがやうなそつぱりが、廣い世界にあらうかい。

藻女 サア、わしもさうは思ふが、下界へおりて男を持たぬと、天狗道へ立たぬわいなア。

忠太 こりやア娘御が尤もだ。亭主天狗の去り状は、此忠太夫が取つてやるわ。かまふ事はねえ、男を

持たつしやいく。

藻女 コレ、天狗どの、わしや今日から立派な男を持つて、こなさんを思ひ切るぞや。(ト空へ向つて言ふ)。

又五 さうだく。今日からおれが、亭主ぢやく。

田熊 ヤイくく。心の違つた阿呆同前な娘、何と言はうが、素性賤しい下郎めを、此法眼が聲には

通らぬぞ。

又五 イヤ、素性は歴とした系圖を持つてゐる。

田熊 シテ、其系圖は。

又五 即ちこゝに。(ト最前拾ひし密書を出して見せる)。

田熊 ヤ、そりやソレ儘かに。

ト寄るを、藻女隔て

藻女 成る程、こりやよい系圖ぢやわいな。サア、父さん、聲に取らんせく。

又五 取らずば系圖をお上へ出さうか。

藻女 サア、取らんせ。

田熊 (ギツクリ思ひ入れあつて) エ、いまくしい、そんなら下郎を

又五 お前の聲に

忠太 さつさと取りやれ。

田熊 マアく、取つた。

三人 そりや、斯うして取つたわ。

藻女 これから其方を

又五 帶紐解いて

忠太 サツサ、取つたりく。

光兼 ト皆々手拍子にて浮かれる。よき時分より光兼、下座より出かけるて  
怪しい宮奴………捕つた。

ト又五郎へかゝるを、引廻して

又五 鶉の眞似をする烏猫どの。

藻女 鼠でも取らんせ。

ト兩人して光兼を突飛ばす。これにて光兼、忠太夫へこげかゝり、これより兩人猫の見得。田熊法眼と  
又五郎藻女けしかける。よろしく、管絃になり、此道具ぶんどす。

本舞臺、三間の間、高足の簾御殿、階、高欄、竹の節の欄間、金張り付き、左右網代塀。上の方に誂へ  
の井戸。うしろ軒口に結構なる大ぶりの燈籠を吊しあり。簾一杯下りてゐる。こゝに金剛太郎と伴の七  
郎、以前の白絹を引き合ひ、よろしく見得にて道具納まる。

ト兩人ちよつと立廻りあつて

七郎 こりやア重虎、身が所持なせし白絹に、ほでほしさツかけ、何とする。

金剛 何とするとは怪しき白絹、此重虎に渡して行け。

七郎 小癩な素丁稚め。邪魔ひろぐな。

金剛 改め見るわ。

ト立廻りのうち、薄ドロくになり、發端の怪鳥二羽、日覆ひより下り、件の白絹を咬へ舞ひ上がり、  
桐の木の梢にとまる。

二人 南無三、小鳥が白絹を

七郎 此旨急いで驚塚どのへ。

金剛 われには詮議が

トかゝるを振切り、一散に向うへ入る。金剛太郎續いて追ひかけんとする。此時揚げ幕にて

呼び 那須の八郎参内。

金剛 八郎様が出仕とあれば、折を窺ひ彼の白絹。ソレ。

ト梢に目を附け、心を残し、奥へ入る。

呼び 参内。

ト三味線入り(樂になり、矢張り薄ドロく、左の鳴り物へ雷序を打込み、所々に狐火出る。向うより  
那須の八郎、剃立て長上下、大小の姿にて出て来り、花道にて舞臺に目を附け、キツと留まり

八郎

ハテ、心得ぬ。那須の八郎宗重が、身の誤まりの雲晴れて、悉くも今日今宵、館へ出仕の階下に到れば、簾洩る風のかほりこそ、大臣の御秘藏ある、亂菊と名けし名木。ことに集まる數多の狐火。梢に怪しき小鳥の白絹。仔細ぞあらん。恐れ多くも。

トつかく〜と行き、刀を抜いて切り拂はんとして、桐の木の枝を打ち落す。これにて小鳥白絹を落し、目覆ひへ引いて取る。これと共に狐火消えて、雷序と樂打ち上げる。八郎白刃をチャツと納め

狐火消えて、小鳥も飛び去り、残るは白絹。まことに思はず桐の一片、打ち折つたるは、ハテ、心が、りな。

玉藻

(簾の内にて) 桃花緑水に映じ、黄鳥南枝に啼く。……………誰そ簾を上げい。

官女

ハア。

ト音楽、唄になり、簾巻き上がると、内に玉藻の前、十二單衣の形に着替へ、梅の上に脇息にかゝりゐる。よき所に結構なる香爐臺。うしろに琴を立てかけ、官女四人左右に付き添ひ、銀の燈臺をともしあり。官女、八郎を見て

御座間近う、何者ぢや。

八郎

ハツ、拙者ことは先達で、御勘氣を蒙むりし那須の八郎宗重。此度先の大臣、御惱平癒ましますこと、柳の大樹を切り折りし、某が功とあつて、御勘氣ゆりて召し返され、今宵俄かのお召とある

玉藻

も、先達で失させ給ふ八手の名鏡、玉藻の前様御所持との事。其名鏡は某に申し請け、立歸れとある身の面目。八郎宗重、御座を恐れ、只今の出仕。何卒、名鏡、偏へに願ひ奉りまする。すりや此程自らが、和歌の浦へ社參の路次にて、思はず手に入る八手の名鏡、先の大官の仰せによつて、受取る役目の其方が、那須の八郎宗重か。

八郎

ハツ。

玉藻 公卿と武家とは抜群の相違、いは、大大臣の御不便、あまり筋目なき自らなれど、内子といはるゝ上からは、受取る役は、公卿、殿上人ならんに、武家おこされし先の大官の御胸中、何とも以て訝かし。渡す妾は軽くとも、鏡は名におふ日の本の寶。殊更一たび失ひて、詮議とても仕出さず、自らが手に入りしを、ようも軽々しく、受取りにおぢやつたの。

トきつと思ひ入れ。八郎もこなし。

水無

内子の逆鱗、御尤もにはござりますが、先の大官より使ひの武士。

ぬる

役目を受けし八郎が、

山路

これまで勘氣のお方といひ

三芳

何卒武士の願ひの通り

水無

お聞濟み遊ばさるゝやう

四人 願はしう存じまする。

ト皆々思ひ入れ。玉藻の前は三寶の鏡を取つて

玉藻 然らばこれに飾りある、名鏡を其方へ

八郎 速かにお渡し下されませう。

玉藻 さほどまでに願ふ八郎、殊に自らに付き添ふ者まで、今の勸め。大臣様へは自らが、御機嫌よしなにとりなせせん。那須の八郎、名鏡すなはち渡すであらう。

八郎 ハッ。家の面目、冥加至極、有り難く存じ奉りまする。

玉藻 受取り渡しは禮儀あり。残らず別間へ。

四人 ハア。

ト管絃になり、官女四人は思ひ入れあつて奥へ入る。

八郎 然らば名鏡は八郎へ。

玉藻 いかにも……其方へ渡す名鏡は

ト八郎を上よりよろしく見おろす。雲上なる合ひ方になり、玉藻の前思ひ入れあつて、側にある短冊箱を敗り、短冊へ題の上の句を書き

那須の八郎、其方へ渡す此名鏡、受取つてたも。

八郎 ハッ。(トしとくと階を上がり、件の短冊を受取り見て) 名鏡ならぬ此短冊。殊に一首の上の句は

(ト思ひ入れあつて) 「夜や更けぬ、閨の灯し火いつか消えて」。こりやこれまさしく戀ひ歌の上の句。

玉藻 閨の灯し火消えなんと、思ひ玉藻の胸の火は、藻に棲む蟲の、コレ、あの螢火と同じ事。言ふに言はれぬ恥かしい、啼かぬ螢のわれとわが、身で身を焦す胸のうち、推量してたもいのう。

八郎 すりや、玉藻の前様には、拙者により給ひし此戀ひ歌。かゝる武骨の東武士、お弄りあるか、お情けない。

玉藻 イ、ヤ、自らは偽り言はぬ。まこと其方に今逢うて、大小立派な那須の八郎、殿上には見もやらぬ、きつとしやつた殿振りに、恥かしながら

八郎 憚り多くも、御戀慕あつてか。

玉藻 心のうちを、推量してたもいのう。(ト檜扇にて顔を隠す)。

八郎 エ、有り難や、忝や。いは、大大大臣の御寵愛深き、此日の本の美人と呼ぶ、玉藻の前様、み心かけさせ給はるとは、武士の冥加に餘りし某。

玉藻 すりや、自らへ色よい返事を

八郎 罷りならぬ。(トきつと言ふ)。

玉藻 ヤ。

八郎 エ、お情けないお心に  
玉藻 なんと。

ト合ひ方變る。

八郎 氏も素性も存ぜねども、上なき君に思はれ給ひ、内子とまで仰がれ給ふ御身を以て不義密通。道に背きし人面獸心。

玉藻 ヤ。(トぎつくり思ひ入れ)。

八郎 那須の八郎は誠の武士、左様な戀ひ歌は存ぜぬ、知らぬ。見下け果てたる、流石は婦人。お怒りあらば御手討ち。命にかけてもお諫め申す。

トきつと言ふ。玉藻の前思ひ入れあつて

玉藻 すりや、自らが思つた事もいたづらに、其短冊の詠歌さへ、仇となり行く妾が胸の炎さへ、くるしき、つれなさ。……其方へ戀ひ路が叶はねば、自らとても其如く、所持する名鏡、なんのマア、破却なすとも渡しはせぬ。其御鏡もコレ、こゝに。(ト三寶に飾りし鏡をとつて見せる)。

八郎 ヤ、あなたの願ひの叶はぬ時は

玉藻 いつかな鏡は、渡さぬ〜。

八郎 すりや、どのやうに願うても

玉藻 返事が出来ねば鏡は渡さぬ。

八郎 其御返事は。

玉藻 サア、

兩人 サア〜〜、

玉藻 願ひを叶へてたものう。

ト高欄にもたれ、上より思ひ入れ。八郎こなしあつて

八郎 道を守れば今日の役目の等閑。叶はぬ時は、又も此身は埋れ木の、先祖の家を失ふ時節。家を思へば道ならぬ、

玉藻 不義と知りつゝ、自らが、どうぞ願ひを

八郎 叶へますれば名鏡は

玉藻 すぐに其方へ

八郎 お渡しあるか。(ト八郎思ひ入れ)。

玉藻 證據が見たい。

八郎 エ

玉藻 偽りならぬ證據は即ち此短冊。連続さする



八郎 すりや、私しに戀ひ歌の下の句  
玉藻 其短冊へ

ト短冊を差出す。八郎取つて、思ひ入れあつて、そろ／＼二重へ上がり、硯を引寄せ、件の短冊へ下の句を記し

八郎 憚りながら

ト差出す。玉藻の前取つて、よく／＼見て

玉藻 「わが影にさへ別れてしかも」。

八郎 「夜や更けぬ、閨の灯し火いつか消えて

玉藻 わが影にさへ別れてしかも。しかも戀ひ歌の、連続せしからは  
八郎 名鏡お渡し下さるか。

玉藻 此日の本にかけかへなさ、寶は其方に

八郎 アノ、拙者めに

玉藻 渡されぬ。

八郎 ヤ、すりや何ゆゑにお渡しなきぞ。(ト詰め寄る。)  
玉藻 不義者のゆゑに。

八郎 ヤ、なんと。

玉藻 大臣の寵愛淺からぬ、妾に向うて此戀ひ歌、重ね／＼の不義の科人。宿直の者ども、詮議しや。  
藏人 (奥にて) ハア。

ト管絃になり、二重舞臺へ輔雅君、奥より平舞臺へ田熊法眼、浦上飛仲太、進の藏人、めいめい手燭を  
持ち出て來り、八郎を見て

田熊 不義者ありとのたまひしが

飛仲 これにをるのは那須の八郎。

藏人 最早御勘氣御赦免の

輔雅 忠義の武士たる八郎が、御兄君の寵愛ある、玉藻の前へ

玉藻 いやとよ、若大臣のお詞さる事ながら、玉藻の前へ不義を言ひかけ、大臣をはじめ輔雅君を、調  
伏咀唄の兆しある、那須の八郎は不忠の侍ひ、必ず御油斷なさるゝな。

八郎 ヤア、女と思ひ心を許させ、われを不敵の曲者に、仕立てんとなす企みよな。

藏人 殊に貴殿は先達て、宿直の夜半に失ひし、八手の名鏡、玉藻の前の御手に入り、其身のあかりは  
立たねども、御惱平癒も貴殿の働き、其功にめで、今日も、名鏡受取る其役は、那須の八郎と嚴  
命ありしは、こりや先大臣が御心あつての事ならずや。さるによつて其許にも、一人の倅を人質

に差上げおく。然るに役目を忘れて、又もや不義の疑ひ受けては、貴殿の武士が立つまいぞよ。立つも立たぬも呆痴の八郎、先達て身か娘藻女と、不義を働き、親も許さぬ伴を備け、今度は以前に上越す大膽、御臺所へ不義などは、道を知らざる大だわけ。

飛仲 此上は官人ばらに申し附け、繩打つて獄屋へ引く。サア八郎、御前に叶はぬ、きり／＼こゝをト立ちかゝるを、八郎立廻つてキツとなり

八郎 イ、ヤ宗重、御息所へ不義なりとは、何を以て其證據は自らへ、今も送りし此短冊。戀ひ歌と見せたる其下の句を、詠ぜし其方、これが慥かな

不義の證據。まつた親王を調伏の心ある事察せしは、其方が出仕の其砌り、これなる桐の一枝を切つて持ちしは、謀叛の心底。桐の葉に（脱文不明）秋の夜の、月の鏡を渡さんや。不忠の八郎、これでも其方は言ひ譯あるか。

八郎 ヤ、なんと。  
輔雅 其枝、これへ。  
飛仲 ハア、。

輔仁 ト桐の枝を差出す。輔雅は玉藻の前の持ちし短冊をも受取り、よく／＼見て「夜や更けぬ、闇の灯し火いつか消えて、わが影にさへ別れてしかも」。こりや正に、忍びあはん

す戀ひ歌の心。八郎、近う。

八郎 ハッ。

ト階へおづ／＼上るるを、輔雅は桐の葉の枝にて八郎を打擲する。八郎ハッと思ひ入れ。後すきりに、ツカ／＼と下りて平伏する。

輔雅 いか八郎、此短冊は何事ぢや。戀歌を認め送りしは、言ひ譯もなき其方が越度。まことに天子の御紋にたとふ桐の一枝、打拂うた不忠者。斯様の武士を大館に留め置ても恐れあり。急いで彼れを遠ざけい。

飛仲 畏つてござりまする。八郎、立たう。  
トかゝる。八郎思ひ入れあつて

八郎 某出仕の折に望んで、思ひがけなき玉藻の前様、近習を遠ざけ、戀ひ歌の上の句。返事なさねば御鏡は、渡すまじきお詞ゆゑ、是非なく記せし此下の句。それを此身の咎となし、遠ざけんとは心に一物。裏の裏行く玉藻の前。彼の唐土の姐妃にも、おさ／＼劣らぬ其胸中。面は美女にありながら、悪鬼に等しき上からは、悔んで返らぬ申し譯。此場に於て

ト刀に手を掛ける。藏人留めて  
藏人 すりや、其許は大館にて

八郎 階下を穢すも恐れあれど、只今の君のお詞、いと重き此身の罪。藏人、介錯頼み入る。  
ト思ひ入れ。藏人キツトと留めて

藏人 早まり召さるな、今一應、申し譯さへ立つたる上は

八郎 イ、ヤ、二度まで不義の汚名、世上の人の嘲りに、かゝらぬうちに  
藏人 コレ、待つた。

ト八郎を留める。此時奥にて

藻女 たわけ者の那須の八郎、待て。

八郎 ヤ、なんと。

藻女 以前の女房藻女が留めるほどに、マア、待ちなさんせいなア。

ト管絃にて、奥より藻女先きに又五郎、くはへ煙管に其盆を下げて出て來り、又五郎はよき所に大あく  
らにて其のみる。八郎見て

八郎 ヤ、そちや行くへなうなりたる女房藻女。堅固でありしか。  
藻女 お前も無事であるんすこと、俵がことも別條なく、息災などいふ事も、こゝにゐてヤも遠目か

八郎 すりや其方は只今まで、姿を隠し、いづれにありしぞ。

(140)

藻女

アイ、お前と不義の科あらはれ、こゝにござんす父さんの、心に違つてちつとの間、天狗道へい  
ざなはれ、これまで覚えぬ女の身で、天狗さんの豆腐とてこい、酒屋へ走れ、駕籠呼ぶ世話はな  
かつたが、使ひにあるくも枝から枝、人目に見ては女の輕業、木鼠野禽同前に、餘つ程身輕にな  
つたわいなア。

(141)

八郎 (藻女の様子に目を附けて、思ひ入れあつて) 常には似ざる藻女が、詞しどろに蓮葉なる、其ものごし  
は何とやら……コリヤ、女房。俵縁も成人なしてナ

ト何心なく寄るを、又五郎隔て、

又五 オツト待つたり、八郎様。今では女中はわしが女房。衛士の又五郎がお内儀だ。滅多に側へ寄つ  
てもらひますまい。

八郎 すりや藻女が今の亭主、アノ其方が……そりや誰れが許して。

田熊 其許し手は此法眼。子まである女房の、ある身を以て忝くも、大臣の内子と寵愛ある、玉藻の前  
様へ不義言ひかけ、其身を知らぬ不届き者。其胸中を見極めて、身共が許して娘の藻女、彼れめ  
が妻に遣はしたわ。

玉藻 法眼とても一人の娘、添はず男を恨みてや、下部に遣はず胸中は、不忠不義と見極めつかん。さ  
すればあつて益なき八郎、自らが目通りにて、縛り首うて、田熊法眼。(トきつと言ふ)。

玉藻前御園公

歌舞伎本傑作集 第十卷

田熊 畏つてござりまする。……サア、八郎、腕廻せ。(ト立ちかゝる)。

藻女 ア、コレ、父さん、待ちなさんせ。八郎どのと縁切つたわたしが、構ふことはなけれども、主をお前が手に掛けては、刀の穢れと思ふから、留めるぞえ。それに又、介錯さんしては、刃金が此上なまくら物にならうわいな。

田熊 そりや又、なぜ。

藻女 ハテ、八郎殿は戌の年戌の月戌の日戌の時の生れ。其縁を引いてやら、倅も同じ戌の年月日時を生れ、親子ともに畜生の、血筋があると心付き、影を隠した此藻女。存へて添うてゐるなれば、女房にまでも畜生の、うつらぬうちに此方から、思ひ切つたは何とマア、智慧のある女ではないかいなア。

又五

成る程、こりやア思ひ切り所ぢや。シタガ、先の亭主の八郎様も、女房子に倦いたやら、鏡を受取る人質に、わが子を先きへ寄越したは、思ひ切つたといふ心。此上女房の藻女が、身腹痛めた倅と思ひ、其子を持參の嫁入りは、おいらは少つと不承知だ。

藻女 そりや氣遣ひさしやんすな。腹は借り物。なんの倅をわしか方へ、受取つてよいものかいなア。こりや尤もな藻女とやらんが詞。かゝる不忠の那須の八郎、現在妻にも見限られ、そちや侍ひの道が立つまい。それでもおめく命が借しいのか。生害致す心はないか。

玉藻

八郎 馴染み重ねし妻にまで、うとまれし身の何面目、命は捨て、も名は末代、切腹なして

ト刀へ手を掛けるを、藏人押へて

藏人 貴殿が此場で自殺致さば、老大臣の名へ不便かゝり、那須の家名は今日限り

八郎 絶えなん事の口惜しさに、いろく思へど、名鏡お渡しなきゆゑ

玉藻 然らば鏡は相渡さん。

八郎 ヤ、なんと。

玉藻 さほど思は、鏡は渡さん、さりながら、自らへ不義いひかけ、桐の小枝を切つたる咎、其言ひ譯は有りや、八郎。

八郎 サ、其言ひ譯は。(トつかへる)。

藻女 そりや言はいでも。腹切つて、命を持てたら、言ひ譯も立ちませうが、其命を捨てもせず、役目を勤める仕様はあれど、こなさん、そこへ心がつかぬか。

八郎 なんと。

藻女 ハテ、お前の生ませた縁丸、殊に役目の人質と、寄越したからは覺悟の上。年端もゆかぬあの子の命、思つて見れば風の前なる灯し火同前。あの子に腹を切らすれば、其身の潔白、言ひ譯立てる親子は同姓同血の、これが即ち大臣へ言ひ譯。

又五 イカサマ、これはいゝ料簡。

藻女 なんと智慧者であらうがな。

八郎 すりや辨へなき子伴を、母の身として殺せとな。

藻女 それぞ即ち下世話にいふ、親の因果が子に報ふ、道理と思ひ諦めて、親の手に掛け、あの子の介錯。

又五 それで亭主も疑ひ晴れ、こなたを女房に持つのも安堵。

藻女 又わが子の介錯致した上、其後にては伴の血汐、肉もろともに親の身で、切腹させるがよい慰みそれを否むは心に一物。此刑罪は、如何思し召されます。……なんとよい智慧ぢやござりませぬか。

玉藻 こりや一しほのよい慰み。八郎、其方は如何思ふぞ。

八郎 縁は切つても藻女は、わが子に腹を切らすを勧め、われは卑怯の侍ひと、人の譏りをうくるとも親にもまさる伴が忠義、殊には名鏡受取らば、先祖の家も立つの道理。御説に應じて伴が介錯、切腹さするでござりませう。

玉藻 さある上は法眼用意。其うちこれなる御鏡は、其方へ。

ト田熊法眼へ鏡を渡す。田熊受取り

田熊 ハッ。法眼守護仕るでござりませう……官人、小伴もろとも、用意の品、念いでこれへ。  
仕丁 ハッ。

ト管絃になり、仕丁二人、大廻板を吊り出て來り、よき所へ直す。次郎又、當作、縁丸を引つ立て出て來り

次郎 仰せに隨ひ、那須の八郎が小伴

當作 お目通りへ召し連れましてござります。

縁丸 ヤア、母さまのう。

ト駈け寄るを、藻女思ひ入れあつて

藻女 コリヤ、縁、わが身はわるい父親を持つて、思はぬ災難、必ずわしを恨むまいぞや。コレ、八郎どのと縁切つた上は、今から其方の母ではない。さう思つて、サ、ぬしの手しほで成人しや。

ト八郎の方へ突きやつて、思ひ入れ。

縁丸 それでもわしは

ト藻女の方へ行くを、八郎引附け

八郎 イ、ヤ、母とは縁無き其方。殊に此場で某が、子に腹切らせ、親が介錯。必ず未練な死を遂げな。

縁丸 エ、アノわしを。

ト懐ふ。玉藻前目を附け

玉藻 子を捨つる藪は今眼前、身を捨つるは、ア、稀れなもの。いよく伴を身代りに腹切らせなば名鏡渡さん。さりながら、血汐の穢れ、鏡へ恐れ。まことに親の悲しみ、愁ひを拂ふは九献の用意。腹切らするを慰みに、妾は琴を……其品これへ。

官女

ハア。

田熊

ト官女四人は長柄土器と琴を持ち来り、めい／＼よろしく直す。縁が切れ、ば某が、孫と思はぬ面晴れに、三寸繩に其儼鬼を。

輔雅

トかゝるを、八郎ちよつと立廻り、藻女は田熊を押へる。此うち八郎、刀の下げ緒にて縁丸を縛り、縁丸ツツと泣き倒れるを、ありあふ手拭ひにて猿轡を掛ける。輔雅思ひ入れ。

藏人

さはいへ不便の小兒の有様。親の手づからわが子の介錯。思へば般の紂王の、其心にもおさ／＼劣らぬ

又五

ト玉藻の前思ひ入れあつて、ニツコリとする。又五郎も思ひ入れ。上々様は九献の樂しみ。われらはこゝで徳利酒。

藻女

他人にあらぬ親と子が、此悲しみは(ト思ひ入れ)。

田熊

猶豫致さば名鏡は

八郎 是非とも身共が

田熊 然らば餓鬼が切腹の、暫時四方をとりかこむ

飛仲 其手配りは……そりや。

仕丁 動くな。(ト左右より八郎を取巻く)。

田熊 キリ／＼、介錯。(ト立ちかゝる)。

藻女 コレ。

トちよつと田熊法眼を留める。これをキツカケに玉藻の前琴にかゝり、誂への獨吟になる。八郎思ひ入れあつて、縁丸を組板の上へ仰向けに寝かし、刀を抜いて水をかけ、寢刃を合すことよろしく、件の白絹を出し、白絹を巻き用意する。飛仲太と仕丁取巻きあて、皆々こなし。八郎は縁丸の腹へ突き立てんとして、いろ／＼思ひ入れ。藻女は愁ひを隠し、見ぬふりをしてゐる。八郎おくれ切りかゝるこなし。次郎又當作此體を見て、左右よりかゝるを、突き退け／＼立廻つて、此途端に縁丸の腹へ突き立てる。これまでに唄一くさり切れる。藻女見かれて駆け寄るを、田熊法眼押へて

田熊 コリヤ娘、なんで駆け寄る。

藻女 エ。わたしが思はずさし寄るは、あの琴の音に浮れよる

田熊 ヤ。

藻女 浮かれ／＼し酒機嫌

又五 浮かれて側へ  
藻女 酔うたまぎれに一さしの

ト又寄るを、田熊法眼支へる。此時薄ドロ／＼かすめて、雷序になり、狐火あまた出て琴の上へまどふ。又五郎はこれと一しよに思はず放心する。狐火、琴の糸の筋を渡る。これより早めたる琴の手になり、其音を出す。藻女は八郎の方へ思ひ入れあつて、扇を開き、酔ひたるふりにて舞ひに事よせ、扇にて顔を隠して思ひ入れ。縁丸は苦しみ、おち入る。八郎は思ひ入れあつて、白刃を捨て、泣き落す。これで唄一ぱいに切れる。藻女心付き、走り寄つて刀を取上げ、縁丸の首を打落し、白刃をすぐに八郎の目先きへ突き出す。八郎思ひ入れあつて、白刃の血を口にて拭ふ。此時又薄ドロ／＼になり、狐火消える。又五郎こなしあつて

又五 わが子を親の身替りに、むごい目見する辛抱も  
藻女 言はぬは天晴れ。  
田熊 ヤ。

藻女 ト目を附ける。藻女思ひ入れあつて  
大腰抜けの八郎どの。  
八郎 これといふのも名鏡を

ト玉藻の前の方へ目を附ける。藻女は白絹へ目を附け

藻女 まことにわが子を介錯の、白刃を巻きし白絹に  
又五 何か怪しき文字の様子。

ト兩人引合せ見る。件の白絹へ血汐附きて、文字白くなる。田熊法眼驚き  
田熊 さては最前渡したる、あの調伏の白絹が  
藻女 エ、。  
田熊 それを。

トかゝるを、八郎キツと當てる。此うち矢張薄ドロ、玉藻の前の顔、仕掛にて白面の狐になる。皆々見  
て  
輔仁 ヤ、放心なしたる玉藻の前。面變りし此體は。  
藏人 年経る妖狐の其面差し。  
藻女 さてこそ變化の所爲なるか。  
皆々 事の實否を。

ト藻女は件の白絹を持ち、つか／＼と二重へ上がる。田熊法眼はこれを取らんと行きかゝるを、八郎又  
當てる。藏人も二重へ駈け上がり、皆々玉藻の前に詰めかけ  
輔仁 お目覺まさされよ。

皆々 玉藻の前。

藏人

ト此聲に玉藻の前、フツト目を覺まし、元の顔になる。  
いよく怪しき

トかゝるを、キツとなつて

玉藻

緩急至極。

八郎

ト管絃になり、簾下りる。舞臺に八郎と法眼、飛仲太、仕丁残り

田熊

わが子の切腹、見届けめさるゝ上からは、八手の鏡は某へ、お渡しあれよ法眼どの。  
イ、ヤ、此法眼が内子より賜はりし此名鏡、渡す事罷りならぬ。

八郎

今更表裏の其詞。是非とも拙者へお渡しあれ。

田熊

たつてとあらば汝も刑罪。飛仲太、彼れに繩打ち召され。

飛仲

心得ました 腕まはせ。

八郎

すりや、どうあつても

田熊

鏡は渡さぬ、こゝ、放せ。

ト立廻つて田熊法眼振切り、正面の簾の中へ入る。八郎追ひ行くを、飛仲太と仕丁支へる。此時下座より金剛太郎走り出て、此中へ入る。

金剛

八郎どの、してお役目は。

八郎

おのれ、法眼、鏡を渡せ。

ト管絃になり、八郎同じく簾の中へ入る。

飛仲

狼藉働く八郎宗重。二人は童を、合點か。

次郎

心得ました。童め、覺悟。

ト金剛太郎にかゝり、立廻りのうち、飛仲太下座へ入る。あと三人よろし立廻り、此うち奥より藏人、ツカノと出て來り

金剛

春俊どの。

藏人

玉藻の前の怪しき様子、先の大<sup>お</sup>大臣へ申し上げん。此むね其<sup>その</sup>方は宗重へ。

金剛

心得ました。

藏人

さうぢや。

ト早三重になり、藏人は一散に向うへ入る。仕丁、金剛太郎へかゝる。

金剛

こりやアわいらは何とする。

次郎

疑ひうけた那須の八郎。

當作

腰押しひろぐ金剛太郎。



次郎 取つて押へて高手小手、繩かけて引く。腕廻せ。

金剛 小癩な兩人、そこ動くな。

兩人 腕廻せ。

金剛 ト立廻り。大ダテあつて、金剛太郎は兩人を下座へ追ひ込み大臣の御前、心もとない。憚りうけて

ト階へ踏みかける。此時簾の中にて「エイ」と聲あつて、太刀音する。ヤ、あの太刀音は。

トためらふ。ドロになり、簾の中より差し金にて、鏡飛んで上の方の桐の梢へ上がる。ト管絃になり、簾巻き上がる。中に鳥羽の大臣、那須の八郎の切り首を引下げ、血刀を持ち、藻女、田熊法眼、此様子を見て、慄うてゐる。桐の梢の鏡、仕掛けにて光ります。鳥羽の大臣これにキツと目を附ける。小鼓の樂になる。

鳥羽 ハテ、争はれぬ鏡の威徳。磨が居間とも憚らず、劍戟を振る那須の八郎、手討ちになせし血汐の穢れ。俄かの動搖。アレ、桐の梢に飛行する名鏡。内子がこれに居合さば、取り得ん事もあるべきに、あるに甲斐なき其方は藻女。(ト思ひ入れ)。

藻女 大臣の御詫、まことにお道理。内子様なら飛び去る鏡も、元へ戻らせたもふ噂。わたしは賤しき法

眼が娘なれども、てんほの皮、此振り袖へ御鏡の

田熊 戻りなば親の面目、此上あらん。娘、鏡を取り得るは仕様は。

藻女 氏も素性もなければ、内子にあらぬ藻女が、扇へもしや

鳥羽 取り得よ藻女。

ト藻女持ちたる舞ひ扇にて、思ひ入れあつて招くと、ドロ／＼烈しく、鏡は藻女の手へ渡る。すぐに取り上げ

藻女 ヤ、思はず鏡は藻女が、かざせし袖に戻らせたまふか。エ、有り難や。喜ばしや。

鳥羽 出かした藻女。名鏡これへ。

藻女 イ、ヤ、名鏡は藻女が、慥かに守護する内子の役目。

田熊 なんと。

ト此時又五郎窺ひ寄つて

又五 鏡は衛士の下郎めが。

ト奪ひ取つて行くを、鳥羽院引附ける。又振り切つて二重より飛び下りる。鳥羽の大臣續いて駆け行くを、金剛太郎支へる。此間に又五郎井戸の中へ飛び込む。田熊法眼驚き、行きかゝるを、藻女留める。鳥羽の大臣は金剛太郎を振り切り、井筒へかゝる。井戸の中より槍を突き出す。鳥羽の大臣これを捕へて

忠太 引く。これにて忠太夫、四天の形に着かへ、槍を持つたまゝ現はれ  
大臣の俗性。

鳥羽 トかゝるを、鳥羽の大臣、槍を奪ひ取り  
緩怠至極。(トきつとなる。)

藻女 お騒ぎあるな大臣様、やんごとなき御身にも、妾が疑ひ。  
鳥羽 ヤ、なんと。

藻女 父法眼も天下の敵。  
田熊 其高言を。

藻女 ト抜いて切り附ける。藻女其りを奪ひ取り  
今こそ天の是れ御罰。

鳥羽 ト田熊法眼の腹へ白刃を突き立てる。鳥羽の大臣驚き

藻女 ヤア、娘の身として現在の、親を害すは神國の

田熊 此日の本には類るなき大悪人。助けおかれず手にかけまする。  
大悪人とは何を以て。

鳥羽 女ながらも辨へなき

藻女 辨へあるゆる親どもへ、今こそ門火の庭前に、吊りおく螢の蟲籠を

鳥羽 なんと。

藻女 エイ。

ト簪を螢籠へ打ち附ける。これにて螢籠の前側碎け、螢飛び散る。これを合ひ圖に四方にて、門を固め  
の太鼓を打つ。皆々思ひ入れ。

鳥羽 螢の飛ぶを合ひ圖となし、

田熊 所々に合はず太鼓の音。

藻女 四門を圍むるかねての手配り。

田熊 さては身共を。

ト寄るを立廻つて、田熊法眼を二重より突き落す。鳥羽の大臣立ちかゝるを、金剛太郎、忠太夫左右よ  
り支へる。

鳥羽 親に手向ひ、狂氣の女。

藻女 狂氣致さぬ、自らが、親と存じて切害なす。親を殺すが天下の爲。

鳥羽 親を殺すを天下の爲とは。

藻女 疑はしくば一通り、女ながらも藻女が、詳しく語つてお聞かせ申さん。大臣をはじめ父法眼、す

さつてよつく承れ。

鳥羽

やゝ、なんと。

ト誂への鳴り物。藻女は階に腰を掛け、キツとなつて

藻女

もと自らは、それなる法眼が娘、忝くも大館へ御奉公。然るに若氣の誤りにて、那須の八郎と不義密通、男子を儲けし事現はれ、八郎宗重お咎めうけ、われもともく漂泊の折柄、夜毎に怪しき赤氣、大館に棚びく珍事、安部の泰親が内々の訴へ。是れまさに、大臣寵愛限りなき、玉藻の前の素性こそ、人間ならぬ妖狐なりと、聞きしもいつぞや紀の路なる、隴山にて怪しき光明。其時修行者に姿をやつし、又今日久々にて、親を便つて益もなき、戯れ事を言ひ立て、入り込み見るに折よくも、別れし夫子に對面は、天の幸ひ時到り、妖狐の正體見出さんには、戌の年月日時揃ひし親子の血汐、天竺まかだ國金鳳山の藥王樹に此血を注いで護摩木となし、内侍所を形代に、妖氣の祈りなす時は、極めて悪狐の性を現はす。是れ唐土の雲仲子が、照魔鏡の祕法の第一。その戌の年の揃ひし夫子、忠義の爲に命を捨てさせ、あじやらに紛らし自らが、涙一滴こぼさぬは、右の護摩木を成就なし、天下の愁ひを拂はんと、其功ありてはからずも、わが子を切つたる血のしたゝり、此白絹にかゝると其儘、怪しき文字は自らが、素性を記して呪咀なす祕法。まこと妾は大臣の胤、藥の上より田熊法眼、水子の伴を産屋に入れ替へ、鳥羽の大臣と尊敬させ、大臣の

胤の自らを、娘となして不義と言ひ立て、咎に落して殺さん巧み、大臣の胤を絶やさん企て。それ存せしは法眼一人。大臣と申すは、筋目賤しき田熊が伴。其身は知らぬにきはまれども、罪科のがれぬ神國の、一時に報ふ天の御罰。思ひ知つたか田熊法眼。……われ男子にてあるならば、大大臣ともなるべきに、女子に生まれし果敢なきは、故なき旅に頭を下け、無念の月日を送りしも、斯かる悪事を見出さん爲。女なれども自らこそ、雲の上人の胤なるぞよ。倭人の田熊が一子たる、紛れ偽る似せ大臣、すさつて三拜仕れ。

ト早下がり葉になり、廣振り袖を詞の切れ目くんに脱ぎ、下には白衣やうなる肌着を着こみ、平舞臺を見おろし、白絹を差し附け、キツとなる。鳥羽の大臣、田熊法眼思ひ入れあつて

田熊

ヤア、此身に覺えなき高言。其方は田熊が實の娘、大臣の胤とは何のたわ言。

鳥羽

磨に向つて不敬の詞、偽りとは思へども、もしや實義に極まるや。これぞと申す證據ありや。

藻女

證據は眼前名鏡の、飛び去り給ふを自らが、勿體なくも差招けば、忽ち戻らせ給ふこと、これぞ貴き血筋の證據。其上、紀州熊野の柳の大樹、根先きに埋めし箱のうち、輔雅君調伏の、あの人形に添へたるは、即ち白絹と同じ秘文の田熊が手跡。

田熊

ヤゝ、すりや柳の木の根元に埋めし

忠太

大樹の柳の切り株より、出でたる人形、添へたる願書。藻女様は先大臣の御胤にて、當大臣こそ

は田熊の胤、産家に入れ替へおきたりと、願書に記して調伏呪咀、大願成就なさしめ給へ、願主は即ち田熊法眼。これ御大事と早速に、藻女様へ訴へて、熊野で逢うたる體になし、お連れ申した雀の神主。人形二つ、願書に覚えがござらう。

ト釘を打つたる藻女形に、願書も共に出して思ひ入れ。

鳥羽 いや、此身に覚えはない。さはさりながら一言の答へもなきは、さては田熊が胸中に、覚えあつてか。ナ、なんと。

田熊 エ、残念や、口惜しや。これまで工みしわが悪逆。いかにも大臣と尊敬せしも、此法眼が實の伴娘といひし藻女は、先大臣の正しき御胤。二十餘年が其間、それなりに過ぎ行きしが、いかに大臣の胤なりとて、女童に見出されしか。思へばく、チエ、残念やなア。すりや法眼は、いよく磨が

田熊 われこそ實の親なるぞ。

鳥羽 ト無念の思ひ入れ。鳥羽の大臣、田熊法眼をキツと見て

ヤ、さては肉身分けしわが親人といふは……ホ、ホイ。(ト思ひ入れ)。エ、とは知らずして此年月、上なき床を穢したる、ためし少なきさかしら事。思へば思ひまはすほど、空おそろしき悪逆無道。さりながら、われを憫れむ心底は、此身にとつて勿體なき、天の御罰に親子が成行

き。せめて苦痛を助けの爲

田熊 ヤ。

ト見上げるを、鳥羽の大臣、小さ刀にて田熊法眼の首を打落す。皆々ハて

皆々 現在親を

鳥羽 手にかけてたるも悪人の、親と一つでない證據。すぐに此身も

ト鳥羽の大臣、手早く腹へ突き立てる。

藻女 さこそあるべき其生害。悪事に組みせぬ是れ潔白。

鳥羽 エ、忝い。存ぜぬ事として此年月、筋なき此身に金巾子の、冠りを捧げし天罰の、報うて子として親の介錯。

藻女 それは悪事をうとみし介錯。那須の八郎は忠義の介錯。貴き胤の自らが、知らぬ事とてかはせし枕。臣下の夫となりはて、一子を儲けし其爲に、素性知れたる上からは、一日も連れ添はれじと、家出なして行くへ知らさず。

鳥羽 心つかひの御胸中。それにひきかへ、悪人ながらも親を討つ、世にも稀れなる大悪無道、あの世へ赴き親人の、責め苦を心身に引受けて、未來の苦報を助くる孝行。

藻女 八郎親子が生血は、妖狐を見出す祕法の第一。

鳥羽 其一言を忠死の宗重、あの世で逢ひなば言ひ聞かせん。

ト思ひ入れ。此時奥にて

呼び 祈りの刻限。

金剛 もはや泰親

藻女 祈りの時刻。

鳥羽 大臣の胤にあらぬ身は、玉藻の前に迷ひしが、素性賤しき即ち證據。

藻女 妖狐をしりぞげ、やがて豊の御代萬歳。

兩人 ト八郎と切り首と文字の白絹を取上げ、きつと思ひ入れ。此時、光兼と飛仲太窺ひ出て  
さては女は。

トかゝるを、金剛太郎と忠太夫引取り、立廻つて引附ける。鳥羽の大臣白刃を抜く。これを木の頭。藻女は首と白絹を見て、思はず泣き落す。これをキサミにて、よろしく拍子  
幕引き附けると、すぐにドン／＼のツナギにて、引返す。

幕

### 大詰 青龍殿祈りの場

登場人物 八郎女房藻女實は池藻の前。衛士又五郎實は木幡彈正景澄。輔雅の若大臣。金剛

太郎重虎。泰親門人、辻浦左京。同、峯岡主水。同、松倉外記。同、小泉大和。同、神宮内。播磨守安部の親泰親。玉藻の前實は金毛九尾の妖狐。

本舞臺正面家根を見せたる道具、大簾一面にかゝり、うしろ結構なる張り物。上の方に破風口、黒格子、すべて青龍殿のかゝり。好みの道具。平舞臺よき所に誂への護摩壇。此四方に竹を立て、注連繩を張り、真中に北辰の宮、所々に二百八燭を點じ、こゝに安部泰親、白の行衣の形、髪をさばき、幣束を持つてゐる。左京は黄の行衣にて、同じ色の幣を持ち、大和は萌黄の行衣、同色の幣を持ち、主水は赤の行衣、これも同色の幣を持ち、外記は黒の行衣、同色の幣を持ち、宮内は白の行衣、これも同色の幣を持ち、五人とも淺黄刺貫、烏帽子、湯褌にて控へゐる。うしろに牛素袍、股立ちの侍ひ四人詰め寄り、控へる。早下がり葉、これにかすめて、ドン／＼をかぶせ、引返して緋あく。

大和 青黄赤白黒、祈念のト者、

五人 いづれも用意致してござる。

泰親 身不肖なれども播磨守安部の泰親がト筈、關白どのの命に隨ひ、易の表を考ふるに、妖氣頼りに覆ひ、異形大臣に添ひ奉ること眼前たり。

大和 さるによつて、加茂明神へ祈誓なし、賽目の弦を行ひ、

外記 再び先の大いに勘文をさゝけ、

宮内 斯く青龍殿に於て今日の御祈念。

主水 八百萬神ことごとく勸進なし、

大和 東西南北、中央の役目のわれく。

外記 用意調ふ上からは、いざ泰親どの、

五人 御祈念々々々。

泰親 此上は諸行の方々、玉藻の前をこれへ招待、願ひ奉りまする。

呼び (此時、簾の中にて)玉藻の前様お入り。

侍ひ すりや、玉藻の前様のお入りとや。

ト早下がり葉になり、正面の簾を巻き上げる。こゝに玉藻の前、十二單衣、緋の袴の形、牛眼に泰親を見て、思ひ入れあつて

玉藻 泰親が最後の願ひ、青龍殿へ自らを、今日のでうせう(?)それへ行て、逢ひませうわいのう。

ト三味線入り、小太鼓の樂になり、玉藻の前、二重舞臺より、しづくとおりて來り、二疊臺へ直る。うしろの簾はすぐ下ろす。

泰親 まづは今日のお役目、御苦勞の御入り。

玉藻 見れば青黄赤白黒の淨衣を着たる五人の小者。

五人 魔魅の障碍を祈念の者。

玉藻 いゝや、障碍の祈念に事よせて、こりや自らを、呪咀なすのであらうがな。

泰親 なんと。

玉藻 此程の問答に面目を失ひ、先の大いへ勸文をさへけての此祈り。再度の問答、又も泰親絶句なさば、其儘置かうや。して其壇の構へは何と。

泰親 祈りの故實、壇上に北辰北斗を飾れるは、此程よりの魔魅の障碍、事明らかに顯はさん此祈念。

玉藻 すりや泰親には、いよくアノ自らを。ウム。

ト思ひ入れ。これよりノットになり

泰親 まづ四方三面の壇上には、中央に北斗北辰を勸請なし、七十二府人おふくは(?)童子。

大和 二十八宿を四方に分ち

主水 青龍、朱雀、白虎、玄武は、即ち五色の御幣束。

外記 八百萬神悉く、四方に發し(?)大天王

宮内 中央には大聖不動

泰親 まつた四角には四天王、二十八燈の明りを照らし、今ぞ障碍の降伏退散。

五人 怨敵退散々々々々。

玉藻 ホ、ホ、ホ、ホ。ほんにきやうこつな禁裏の御祈念。目にも見えざる魔畜の障碍、其災ひもわれゆ

る。と泰親が愚昧の卜筮。其業に暗くして面目を失ひ、又もや再度の此祈り。ろふこころ所(？)の不審もあらば言ひ聞かさん。此上今日の問答に誤りあらば、其身は元より、安部の家名は斷絶ちやぞ。

泰親

いかにも。先達ての問答に、天に風雲の變化に水火の異み、人に不時の病ひ、是れ定業の因縁とあるゆゑ、いかにも泰親が理に伏せしが、此程和歌の浦へ參籠の其折柄、殊に夜陰に其身より光りを放ちし怪しき有様。そもく正法に不思議なし。人間の身よりして、光りの出づべきやうやある。是れ怪しむべきの第一なり。

玉藻

ハテ、泰親はよくく愚昧のたわけ者。正法に不思議なければ、人の身より光りを現はすを怪むや。其折柄は勅使といひ、殊に行くへ知れざる内侍所、思はず手に入る御鏡の、其奇特にて此身の光明。汝知らずや、そもく元恭天皇の妃、衣通姫は、其身すぐれて美はしく、御身の外まで通るゆゑ、衣通と名く。又聖武天皇の御妃、身より光りを放ち給ふがゆゑに、光明皇后と稱し給ふ。即ち帝叡感のあまりならずや。それを咎むるものならば、これにても正法に不思議なしと申すやいかに。此場に於て速かに返答致せ。サ、何とぢや。

泰親

サアそれは。(トつかへる)。  
童遊びの祈りの壇上。おろかな事を。

呼び

トきつとなる。此時奥にて  
お入り。

ト早下がり葉になり、正面の簾巻き上げる。中に輔雅の大臣、金冠、白衣の形り。側に池藻の前(元の藻女)廣袖、襦衣裳にて控へある。奥より金剛太郎、白丁を引張り、弓矢を持ち出る。あとより官女四人、いづれも懐剣を持ち、つかくと出て來り

金剛

素性怪しき玉藻の前、

皆々

動くまいぞ。

ト取巻く。玉藻の前思ひ入れあつて

玉藻

ヤア、仰々しき女ばら。殊にお入りと思ひの外、輔雅どの、此體は。

池藻

其不審尤も至極。大臣には仔細あつて俄かの薨去。

玉藻

ヤ、すりや鳥羽の大臣には、果敢なく世を去り給ひしとや。

輔雅

素性は變れど兄君の、薨去によつて宣旨を蒙むり、今日就任の上からは

池藻

改めて大大臣の輔雅君。

輔雅

サア、此上は、たとへいかほどあらがふとも、及ばぬ魔魅の正體を

泰親

猶此上は泰親が、祈念の幣束。

池藻 邪正をうつすは名鏡の威徳を以て。

玉藻 名鏡とは、そりやいづれにありや。

池藻 ヤア、景純、名鏡守護なし、はや参れ。

景純 (向う揚げ幕の中にて)お召しに任せて、只今それへ。

ト、ツツカケに、かすめたるドン／＼にて、向うより又五郎、實は木幡彈正景純、凛々しきなりにて、件の名鏡を持ち、走り出で来り、キツと見得。

泰親 木幡彈正景純、

金剛 お来やつたか。

景純 此程怪しき玉藻の前、見現はさんず其爲に、衛士とやつせし某こそ、木幡彈正景純が、守り奉りし此名鏡。照魔鏡にはあらねども、御身の正體、鏡の威徳。

池藻 戊の年度の親子が生血

泰親 藥王樹の護摩木もろとも、炎の中へ。

ト護摩木を取つて、護摩壇の中へ打込む。煙硝火立つ、薄ドロ／＼になり、玉藻の前ウツトリとなる。景純、鏡を差附ける。

金剛 暮目三度の夜音に

泰親 魔性の正體現はさすんば、諸神諸佛の祈りの白幣。

五人 怨敵退散々々々々。

ト金剛太郎は弓矢を取り直す。泰親をはじめ五人の社人、持つたる幣束にて玉藻の前を打つ。これにて玉藻の前苦しみ、大ドロ／＼。金剛太郎かゝると、引抜きにて、怪しき好みの姿になり、後ろへ狐火燃える。

皆々 ヤ、玉藻の前の

池藻 さてこそ怪しき

景純 變化の有様。

玉藻 チエ、残念や。われは三國自在に飛行し、天然にては斑足太子、唐土にては殷の紂王、いま日の本に押し渡り、鳥羽の大臣を失ひ、魔界になさんと近寄りしに、泰親が祈りの徳、殊には八手の名鏡の、光りに恐れ此身の正體、金毛九尾白面の、姿をやみ／＼顯はすか。エ、残念やなア。

皆々 さてこそ三國傳來の、妖狐であつたか。

玉藻 大臣をはじめ、引裂き捨てん。

泰親 おろかや、青黄赤白黒の祈りの幣束。

五人 立去れ／＼。



ト大ドロくになり、玉藻の前は主水を引つかむ。池藻の前と官女四人は輔雅君を守護する。景純と金剛太郎は玉藻の前へ詰め寄る。泰親と残りの社人は祈りにかゝる。玉藻の前の無念のこなしにて、主水を引裂く。此見得にて簾おりの。

金剛 ハテ争はれぬ毒目の奇特。まつた博士の丹精に、眼前奇瑞を顯はせしか。

景純 疑ひもなき加茂の御神、守護なし給ふか。エ、忝い。

池藻 これも偏へに神國の、神の御末のかけまくも

金剛 尊とき御代の

皆々 萬々歳。

輔雅 いやとよ、されども斯程まで、自在を得たる老狐なれば、天地の間に縦横なし、猶も障碍をなさ

景純 んも知れず。

仰せにや及ぶべき。三國自在に飛行なし、國家を惱ます稀代の惡狐。

輔雅 其正體をしとめずして、其儘おかば天下の大事。

金剛 金殿樓閣残りなく、手分けをなして狩り出さん。

景純 方々、ぬかりめさるな。

ト奥の方にて、「アリヤ〜」の聲する。此時大ドロく、雷の音。上の破風を蹴破り、玉藻の前、金毛

九尾白面の狂狐の姿にて出で、黒雲に乗り、呼び桶の口を乗り、花道の上よき所まで来る。皆々此體を見上げる。

玉藻 一旦姿は顯はすとも、猶も日本にとまつて、時節を待つは都より、東にあたつてよき山野、那

須野ヶ原へ飛び去らん。

ト玉藻の前、上にて思ひ入れ。大ドロく、出端の鳴り物にて、雲に乗りたるまゝ向うへ飛び行く。舞臺の人数見得よく「アリヤ〜」とかけ聲にて、よろしく

幕

お  
く  
い  
り  
そ  
が  
の  
な  
か  
む  
ら

御國入會義中村

『御國入會我中村』は、

文政八年一月、中村座上場の春狂言で、南北が七十一歳の時の作です。

例に依つて南北が、白井權八と笹野權三とを双子の兄弟にするなどといふ、奇想天外の脚本ですが、これが又ひどく江戸人の人氣に叶つて、書きおろしは勿論、其後上場の度毎にいつも大入を占めてゐたのです。それといふのが、この權三と權八とを勤める役者は、互角の人氣役者に限ります。その人氣役者を、喧嘩させたり、仲直りさせたりするのが、双方の役者の最風非常に非常な興味を起させるのも、大入りの原因の一つだらうと思ひます。

こゝで一寸、春狂言のことを申し上げておきませう。

延寶の昔、初春に會我の狂言を演じて大當りを得て以來、江戸の芝居の初春は、必ず會我の狂言ときまつてしまひました。この習慣は明治前まで續き、その間に、いろ／＼な變遷もありましたが、明和から文化文政へかけてが、まづ會我狂言の全盛時代といひませうか、三座揃つて、それは／＼花々しい競争をしたものです。會我狂言といつても、決して同じ狂言を演じるのではありません、毎年新作するのです。そして「會我」といふ狭い世界の中だけで、いろ／＼と新しい趣向を凝らすのが、作者の腕の見せ所となつてゐたのです。

併し、毎年新しい狂言を作るにしても、大體の段取り、順序、形式といふものは極つてをりました。

三建目(序幕)は、顔見世狂言と同じく、或る神社の前の場と極つてゐまして、こゝでは多く下廻り役者が活動します。「御國入會我中村」では、瀬戸明神の場に當りますが、是れでは、序幕にもう立て者が活動してゐます。

四建目、乃至五建目は、世話場でシンミリした愁嘆を見せますが、多くは鬼王新左衛門の貧家でして、鏡の質受けや短刀の詮議に、鬼王や團三郎が苦心をする場です。「御國入會我中村」では、佐介ヶ谷の場が是れに當ります。

一番目の大詰は、必ず對面ときまつてゐました。これには、先づ豊後節なり長唄なりの地で、五郎や十郎の所作事があつて、それから對面になるののでして、大抵は祐經の館ですが、時には山の中にしたたり、船の中で對面したりする變態のこともあります。

二番目は世話物でして、會我に關係のある事もあり、無い事もあります。長くても三幕で、大體は大抵豊後節を使つて、道行き場が附いてをりました。

大體は斯うした形式ですが、勿論一定してゐた譯ではありません。段々後になるほど亂れて来て、時には會我狂言に、義太夫ものが入るやうな事もありました。

「御國入會我中村」は、南北が極端に技巧を凝らした會我狂言であります。

○

年表を掲げて置きます。

年	月	座	名	題	權	三	權	八	長	兵	衛	八	重	梅	十	内	丹	助	お	園	長	九	郎	半	七	三	勝	助	市	お	才	
文政	八	一	中村	御國入會我中村	市川	團十郎	尾上	幸四郎	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井
嘉永	一	一	河原	初元結會我鏡臺	市川	團十郎	尾上	幸四郎	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井
文久	三	一	中村	寶九字匡囀會我	坂東	三郎	河原	團十郎	尾上	幸四郎	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井	松本	岩井
明治	八	十	中島	蝶衛孖復讐	中村	重藏	山崎	國三郎	坂東	路島	澤村	巴杖	坂東	太郎	坂東	路島	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

この脚本は、百方探しましたが、帝國圖書館所蔵の十六冊物寫本だけしか得られませんでした。よつて是れを底本としました。

巻頭の木版は、書きおろし當時の錦繪です。面白いのは、脚本をお読みになると解りますが、實際はこんな筋はないことです。筋に無いのが錦繪に出たのは何故かといふと、これは板元が芝居の開場以前に錦繪を發行する關係上、作者から大體の腹案を聞いて構圖を定めるので、それが誤り傳へられたり、作者の腹案が變更されたりすると、本筋とまるで違つた錦繪が出来てしまふのです。そして、開場前に錦繪が出版される位なら、その芝居は人氣が立つてゐる證據で、興